

新 家

(その1)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

新 家

(その1)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

1931

1931

1931

1931

1931

序 文

新家遺跡は、近畿自動車道天理・吹田線建設予定地内の遺跡群のなかで最も北に位置している。

本遺跡は、昭和40年、府道中央環状線建設工事の際に木製の梯子が出土したことによって、その存在が知られるようになり、昭和49年の範囲確認調査を経て、古墳時代から鎌倉時代の複合遺跡であることが明らかにされていた。また、河内平野の古地形の変遷を復原するうえでも重要な位置を占めると考えられてきた遺跡でもある。

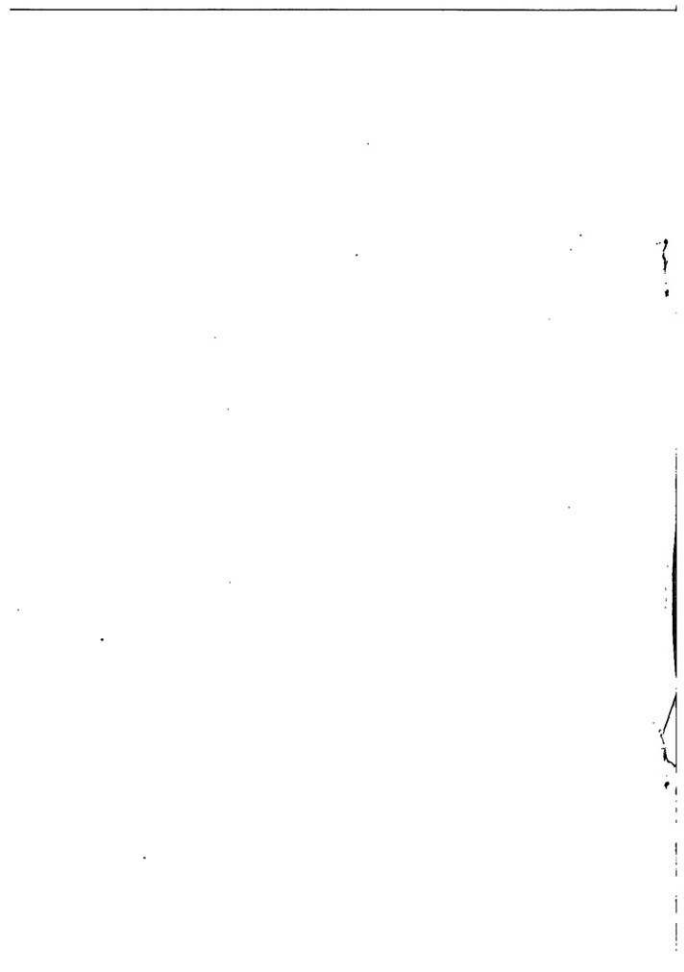
今回の調査では、縄文時代から江戸時代までの各種遺構・遺物が検出され、本遺跡が縄文時代晩期にまで遡ることが明らかとなった。とくに、縄文時代から古墳時代にかけては地形環境の変遷を具体的に跡付けることができ、河内平野の変遷史のなかに貴重な事例を加えることができたと考える。

本調査の実施にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターをはじめ調査関係者並びに一般多数の方々のご協力、ご援助をいただいたことに深く感謝すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるようお願い申し上げます。

昭和62年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 吉 房 康 幸



序 文

生駒山の西に広がる大阪平野は、万国博覧会以降、急速な開発の波に呑み込まれ、古えの姿を想像するにはあまりにも変貌してしまったが、地名には、若江、深江、菱江、盾津、池の端、江端、船場等々として河内湾―河内湖の名残りととどめている。そして地下には、その時代に生きた人々の遺産が数多く残されている。古えの姿から、荒れつつある我々は、これらの遺産のエネルギーな生活のあり様と、将来に対するより良き指針を得ることが出来よう。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる13遺跡の調査は、当センターが、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に発掘調査を依頼され、既に、長原遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡の3遺跡の調査が完了した。また現在は、西岩田遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡、友井東遺跡、美園遺跡、佐堂遺跡、久宝寺遺跡、亀井遺跡と8遺跡の発掘調査を実施している。

本書は、昭和56年3月に調査が完了した東大阪市新家東町及び荒本西に所在する新家遺跡の発掘調査の概要を記したものである。

本書の刊行が、河内平野中央部、特に旧河内湖岸近辺の実態の把握と、特殊性の理解に大きく貢献出来得るものと考ええる。

最後に、調査期間中、ご指導いただいた大阪府教育委員会と、多大のご援助を賜った日本道路公団大阪建設局、同大阪工事事務所の関係各位並びに調査事業に従事された調査関係者諸氏に厚く御礼申し上げるとともに、当センターの今後の事業に対し温かいご支援を賜わるよう切望するものである。

昭和62年3月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 坪 井 清 足

1
2

3
4

例 言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、東大阪市新家東町及び西荒本2丁目に所在する新家遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用 377413000円は、すべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、昭和54年6月1日から昭和56年3月31日までの間実施した。
5. 出土遺物の基礎的整理を主とする遺物整理業務も、発掘調査と並行して実施した。また、遺構図面や写真資料等の概括的な整理業務は、現地における発掘調査の合間と、昭和56年2月1日から昭和56年3月31日までの2ヶ月間実施した。
6. 本調査並びに本書作製は、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪文化財センターが実施したものである。調査並びに本書作製に関係したものは以下の組織表のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	井上定情
	事務局次長兼総務課長	筒井康雄
	主幹兼庶務係長	阪上九子、主査 田中喜代子
		主事 秋山芳廣、立石紀代、灰本明子、千野和久、田口宗義、鎗山洋子
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師 片山彰一、平井貞子、技能員 立花正治
調査総括責任者	業務課長	堀江門也
瓜生堂分室	主幹兼業務第1係長	中西靖人、技師 入江正則、西口陽一、森屋美佐子
	業務第5係	技師 宮崎泰史
	業務第6係	技師 芝野圭之助、佐久間貴士

また、調査に際して多数のために個々に列記する事はできないが、日本道路公団大阪建設局、同大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、河内警察署、布施警察署、楠根川沿岸土地改良区等に格別の配慮を受けると共に、近畿大学、奈良大学、大阪商業大学、大阪経済法科大学、神戸学院大学の学生諸君の協力を得た。

7. 本書の遺構実測図の方位はすべて真北をさす。
8. 本書に記載した各遺物は、一連の番号を与え、実測図と写真を対照できるようにした。土器は数字のみで遺物番号を表記し、石器は数字の前にS、木製品はWをそれぞれ付して表記した。
9. 遺構実測図は、付図では、1/200、1/500に、図版ではトレンチ部を、1/100に、挿図等の拡大し

た遺構については、それぞれ1/20～1/80にそれぞれ縮小した。

10. 遺物の実測図の縮尺は、土器は1/4、石器1/2と1/1、木製品は1/4、1/6、1/8である。
11. 本調査では、自然遺物を中心に以下の諸氏に御指導、御協力を受けた。
(貝類)、梶山彦太郎、(花粉)、安田喜憲
12. 当遺跡の足跡、小孔の大半はアジア航測に依頼した空撮写真を基礎資料とした。
13. 本書の執筆は、遺構に関しては、中西、入江が担当し、遺物に関しては森屋が、このうち、石器は西口が担当した。また写真に関しては、平井貞子、片山彰一、立花正治が担当した。
14. レベルは、すべてT. P. を用いた。
15. 遺構のスケールはmを主に使用し、一部分cmを使用した。遺物はcmを主に使用し部分的にmmを使用した。石器の計測はcmとmmで表示している。
16. 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作製するとともに、カラースライドを多数作製したが、すべてを本書に掲載することは不可能であるため、本書記載以外の資料については、財団法人大阪文化財センターで保管している。広く利用される事を希望したい。

新 家

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

本文目次

序文	
例言	
第一章 はじめに	1
第二章 調査の方法	2
第三章 新家遺跡の歴史的地理的環境	4
第四章 調査の成果	7
第一節 基本層序	7
第二節 遺構	11
第三節 足跡	34
第四節 陸地化への過程(プロセス)	39
第五節 遺物	47
第五章 まとめ	114
第六章 新家遺跡の問題点	117
付章	
I. 新家遺跡の花粉分析	パリノ・サーヴェイ

挿図目次

第1図 新家遺跡トレンチ配置図 (1/2500)	3
第2図 新家遺跡周辺の遺跡分布図 (1/40000)	5・6
第3図 新家遺跡土層柱状図	9・10
第4図 縄文時代晩期 土器出土状況図 (1/50)	11
第5図 縄文時代晩期 5Aトレンチ セタシジミ出土状況・断面図 (1/100)	11
第6図 弥生時代後期 2Eトレンチ 木製品出土状況平面図 (1/80)	20
第7図 古墳時代前期 6Bトレンチ 河道底面堰平面図・見透し図 (1/50)	21
第8図 古墳時代前期 7Bトレンチ 河道底面堰平面図・見透し図 (1/50)	21

第9図	古墳時代前期	4 Bトレンチ	鋤跡平面図 (1/80)	22
第10図	古墳時代中期	落込6	模式図	24
第11図	中近世	井戸1・2・3・4	平面図・断面図	29
第12図	中近世	井戸5・6	平面図・断面図 (1/40)	30
第13図	中近世	3 Aトレンチ	鋤跡平面図 (1/100)	31
第14図	中近世	6 Eトレンチ	溝平面図 (1/200) 断面図 (1/100)	31
第15図	中近世	1 Bトレンチ	溝平面図 (1/200)	32
第16図	弥生時代前期	3 Aトレンチ	足跡 河道底面平面図 (1/60)	34
第17図	弥生時代後期	1 Bトレンチ	足跡平面図 (1/100)	36
第18図	古墳時代前期	5 Bトレンチ	足跡平面図 (1/100)	37
第19図	中近世	4 Bトレンチ	足跡平面図 (1/100)	37
第20図	縄文時代晩期以前	3 Aトレンチ	北壁断面図 (1/60)	39
第21図	縄文時代晩期	3 Aトレンチ	東壁断面図 (1/80)	40
第22図	弥生時代前期	A・Bトレンチ	カニ孔検出数分布図	41~42
第23図	弥生時代後期	5 Aトレンチ・7 Bトレンチ	断面図 (1/80)	43
第24図	古墳時代前期	4 Aトレンチ	立木平面図 (1/50)	44
第25図	鎌倉時代以前	2 Bトレンチ	南壁断面図 (1/80)	45
第26図	縄文時代晩期包含層	出土土器		47
第27図	弥生時代前期土坑1・2・落込1	出土土器		49
第28図	弥生時代前期土坑1・2	出土土器 (縦杓子)		50
第29図	弥生時代前期土坑3・5・7・8・落込16	出土土器		51
第30図	弥生時代前期包含層	出土土器		53
第31図	弥生時代前期包含層	出土土製円板		54
第32図	弥生時代前期包含層	出土石器		55
第33図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土)	出土土器		56
第34図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土)	出土土器		57
第35図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土)	出土土器		61
第36図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土)	出土土器		63
第37図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土)	出土土器		64
第38図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土)	出土土器		65
第39図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土)	出土土器		66
第40図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土)	出土土器		67
第41図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土)	出土土器		68
第42図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土)	出土土器		69

第43図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土) 出土木器	70
第44図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土) 出土木器	71
第45図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土) 出土木器	72
第46図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土上面) 出土木器	75
第47図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土上面) 出土木器	76
第48図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土上面) 出土木器	77
第49図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土上面) 出土木器	78
第50図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土上面) 出土木器	80
第51図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土上面) 出土木器	81
第52図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土上面) 出土木器	82
第53図	弥生時代後期包含層出土木器	83
第54図	弥生時代後期包含層 (灰色粘土上面) 出土木器	84
第55図	弥生時代後期包含層 (灰綠色シルト) 出土土器	88
第56図	弥生時代後期包含層 (灰綠色シルト) 出土土器	89
第57図	弥生時代後期包含層 (灰綠色シルト) 出土土器	90
第58図	古墳時代前期出土土器	91
第59図	古墳時代前期出土土器	93
第60図	古墳時代中期土壇 3・溝22出土土器	94
第61図	古墳時代中期土器溜 1 出土土器	96
第62図	古墳時代中期土器溜 2 出土土器	100
第63図	古墳時代中期土器溜 2 出土土器	101
第64図	古墳時代中期土器溜上層出土土器	102
第65図	古墳時代中期包含層出土土器	103
第66図	古墳時代中期包含層出土土器	104
第67図	古墳時代中期包含層出土土器	105
第68図	古墳時代中期包含層出土土器	106
第69図	古墳時代中期包含層出土土器	107
第70図	白玉、紡錘車、円板実測図	109
第71図	鎌倉時代以降出土遺物	110
第72図	礎石実測図	112
第73図	中近世出土遺物(1)	113
第74図	カンボン トゥートゥーリットのロングハウス	119
第75図	沖から見た水産加工場の水揚口	119
第76図	湿原の中の一軒家 (スマトラ)	120

第77図	トンレサップ南湖の水上家屋 (カンボジア)	120
第78図	掘立柱建物の床下の構造	121
第79図	南洋ウルシイ、ヤソール島の舟庫	121
第80図	ヤップ本島の舟庫	121

表 目 次

第1表	基本層序一覧表	8
第2表	弥生時代前期 柱列一覧表	14
第3表	弥生時代前期 土坑一覧表	14
第4表	弥生時代前期 落込一覧表	15
第5表	弥生時代前期 柱列1・2計測表(1)、(2)	16~17
第6表	弥生時代前期 柱列3計測表	18
第7表	弥生時代前期 柱列4計測表(1)、(2)	18~19
第8表	弥生時代前期 その他の柱列、柱計測表	19
第9表	弥生時代前期 柱列、方位一覧表	19
第10表	古墳時代中期 掘立柱建物一覧表	25
第11表	古墳時代中期 溝一覧表	25~26
第12表	古墳時代中期 土坑一覧表	26
第13表	古墳時代中期 落込一覧表	26~27
第14表	古墳時代中期 沼状遺構一覧表	27
第15表	古墳時代中期 2Bトレンチ 足跡計測表	38
第16表	中近世 4Bトレンチ 足跡計測表	38
第17表	古墳時代前期 4Bトレンチ 鋤跡計測表	38

図 版 目 次

図版1	弥生時代前期 1Bトレンチ 平面図(1/100)
図版2	弥生時代前期 2Bトレンチ 平面図(1/100)
図版3	弥生時代前期 3Bトレンチ 平面図(1/100)
図版4	弥生時代前期 4Bトレンチ 平面図(1/100)
図版5	弥生時代前期 5Bトレンチ・6Bトレンチ 平面図(1/100)
図版6	弥生時代前期 7Bトレンチ・8Bトレンチ 平面図(1/100)
図版7	弥生時代前期 柱列1平面図・断面図(1/60)

- 図版 8 弥生時代前期 柱列 2 平面図・断面図 (1/60)
- 図版 9 弥生時代前期 柱列 3・7 平面図・断面図 (1/60)
- 図版 10 弥生時代前期 柱列 4・8 平面図・断面図 (1/60)
- 図版 11 弥生時代前期 柱列 5・6 平面図・断面図 (1/80)
- 図版 12 弥生時代前期 土城 1・2、土城 5 平面図・断面図 (1/30・1/40)
- 図版 13 弥生時代前期 土城 4・土城 6・土城 7 平面図・断面図 (1/40)
- 図版 14 弥生時代前期 土城 3・8・10・11・12 断面図 (1/20、土城 8 のみ 1/40)
- 図版 15 古墳時代中期 5 A トレンチ 平面図 (1/80)
- 図版 16 古墳時代中期 土城 2・落込 6 内土器溜 1 平面図・断面図 (1/40)
- 図版 17 古墳時代中期 古墳時代中期 落込 6 内土器溜 2 平面図・見透し図 (1/40)
- 図版 18 基本層序
- 図版 19 基本層序
- 図版 20 縄文時代晩期 土器出土状況
- 図版 21 縄文時代晩期 セタシジミ 出土状況、弥生時代前期 1 B トレンチ
- 図版 22 弥生時代前期 柱列 1・2
- 図版 23 弥生時代前期 柱列 2、2 B トレンチ
- 図版 24 弥生時代前期 柱列 柱根断面
- 図版 25 弥生時代前期 柱列 柱根断面
- 図版 26 弥生時代前期 3 B トレンチ・4 B トレンチ
- 図版 27 弥生時代前期 7 B トレンチ・8 B トレンチ
- 図版 28 弥生時代前期 土城 1・2・土城 3
- 図版 29 弥生時代前期 土城 4・土城 5
- 図版 30 弥生時代前期 土城 6・土城 7
- 図版 31 弥生時代前期 土城 8・土城 9
- 図版 32 弥生時代前期 土城 10・土城 11
- 図版 33 弥生時代後期 2 E トレンチ 木製品出土状況
- 図版 34 弥生時代後期 2 E トレンチ・6 A トレンチ 木製品出土状況
- 図版 35 古墳時代前期 6 B トレンチ・7 B トレンチ 河道底面礫出土状況
- 図版 36 古墳時代前期 4 B トレンチ 鋤跡、古墳時代中期 4 A トレンチ
- 図版 37 古墳時代中期 5 A トレンチ・6 A トレンチ
- 図版 38 古墳時代中期 落込 6 内土器溜 2 遺物出土状況
- 図版 39 古墳時代中期 落込 6 内土器溜 1・2 遺物出土状況
- 図版 40 中近世 井戸 1・井戸 2
- 図版 41 中近世 井戸 3・井戸 5

- 図版42 中近世 3Aトレンチ 鋤跡、1Bトレンチ 溝
- 図版43 足跡 弥生時代前期 3Aトレンチ 河道底面、弥生時代後期 1Bトレンチ
- 図版44 足跡 古墳時代前期 5Bトレンチ、中近世 4Bトレンチ
- 図版45 足跡 弥生時代後期 5Bトレンチ、古墳時代前期 4Aトレンチ 立木
- 図版46 縄文時代晩期(滋賀里Ⅲ式)土器
- 図版47 弥生時代前期土器
- 図版48 弥生時代前期土器・石器・土製品
- 図版49 弥生時代前期土坑1出土木器
- 図版50 弥生時代後期包含層出土木器
- 図版51 弥生時代後期包含層出土木器
- 図版52 弥生時代後期包含層出土木器
- 図版53 弥生時代後期包含層出土木器
- 図版54 弥生時代後期包含層出土木器
- 図版55 弥生時代後期包含層出土木器
- 図版56 弥生時代後期包含層出土木器
- 図版57 弥生時代後期包含層出土木器
- 図版58 弥生時代後期包含層出土木器
- 図版59 弥生時代後期包含層出土木器
- 図版60 弥生時代後期包含層(上面)出土木器
- 図版61 弥生時代後期包含層(上面)
- 図版62 弥生時代後期包含層(上面)
- 図版63 弥生時代後期包含層出土土器
- 図版64 古墳時代前期包含層出土木器
- 図版65 古墳時代中期土坑2・溝22・土器溜1出土土器
- 図版66 古墳時代中期土器溜2出土土器
- 図版67 古墳時代中期土器溜2出土土器
- 図版68 古墳時代中期包含層出土土器
- 図版69 古墳時代中期包含層出土土器
- 図版70 古墳時代中期包含層出土土器
- 図版71 古墳時代中期包含層出土土器
- 図版72 古墳時代中期包含層、鎌倉時代以降出土土器
- 図版73 古墳時代中期、鎌倉時代以降出土土器
- 図版74 古墳時代中期、鎌倉時代以降出土土器

付 図 目 次

- 付図1 縄文時代晩期 遺構図 Aトレンチ (1/200)
付図2 弥生時代前期 遺構図 Aトレンチ (1/200)
付図3 弥生時代前期 遺構図 Bトレンチ (1/200)
付図4 弥生時代後期 河道模式図 (1/1000)
付図5 古墳時代前期 河道模式図 (1/1000)
付図6 弥生時代後期 足跡分布図 Bトレンチ (1/500)
付図7 古墳時代中期 遺構図 Aトレンチ (1/200)
付図8 古墳時代中期 遺構図 Bトレンチ (1/200)
付図9 古墳時代中期 遺構図 D・Eトレンチ (1/200)
付図10 中近世・近代 遺構図 A～Fトレンチ (1/1000)



第一章 はじめに

新家遺跡は、近畿自動車道天理・吹田線建設予定地内松原～東大阪間13.5kmに存在する新家、西岩田、瓜生堂、巨摩庵寺、若江北、山賀、友井東、美園、佐堂、久宝寺、亀井、城山、長原の13遺跡の内、最北端に位置する遺跡で、大阪府東大阪市新家東町及び荒本西一帯に所在する。

近畿自動車道天理・吹田線建設予定地内の13遺跡の取り扱いについては、昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局を中心として協議を重ねてきたが、昭和48・49年の財団法人大阪文化財センターに委託実施された第1次発掘調査を基に、基本的には発掘調査結果を尊重し、工法を検討しながら橋脚位置を決定し、高架道路を建設していくということで協議が整い、この協議結果を基に日本道路公団から文化庁へ文化財保護法に基づく協議文書が提出され、文化庁からの事前の発掘調査の徹底と遺構保存に十分配慮すべき旨の回答を受け、大阪府教育委員会は、財団法人大阪文化財センターに現地調査の協力を求めて、昭和51年4月、日本道路公団大阪建設局との3者で、調査についての協定書を締結した。

そして昭和51年7月、長原遺跡の発掘調査に着手して以来、瓜生堂遺跡（昭和53年2月）、巨摩庵寺遺跡（昭和53年11月）、西岩田遺跡（昭和54年3月）と順次調査に着手してきたところである。

また、この間、調査の終了した遺跡については、逐次、遺構、遺物の基本的な整理を進め、調査概要書「長原」、「瓜生堂」、「巨摩庵寺遺跡」等々として刊行してきた。

ここにまとめた新家遺跡は、昭和40年6月、旧意岐部小学校東側の工事現場から弥生時代のものと思われる梯子が発見されたこと、また、旧意岐部小学校周辺には、弥生時代から平安時代にかけての土器片が多数散布していることもあまって、集落遺跡の存在が想定されていたが、遺跡の実態については不明な点が多く、詳細はほとんど把握されていなかった。したがって、昭和49年に当センターは、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて当該遺跡の第1次発掘調査を実施した。その結果は昭和50年3月、「近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査報告書」として報告がなされた。これによると、新家遺跡では4ヶ所のトレンチを設定したが、最北端のトレンチからは遺物、遺構は検出されず、遺物、遺構を検出した範囲は南北約500mに及ぶこと、遺跡の時期としては、出土した遺物から古墳時代から鎌倉時代に当たること等が判明した。

一方、瓜生堂遺跡や西岩田遺跡の発掘調査が、所々で行なわれるにつれ、新家遺跡の存在する位置が、自然地理的な観点から旧河内湖あるいは河内湾の湖岸線を把握する上でも重要な意味を持つ遺跡であるとの認識が高まってきた。

このような諸点を踏まえて新家遺跡の調査は、昭和54年6月、府、公団、センターで調査についての3者契約を締結し、同年7月現地調査に着手した。その後数回にわたって設計変更に伴う契約変更を重ねながら昭和56年1月末をもって現地での調査を終了した。

第二章 調査の方法

新家遺跡の発掘調査は、日本道路公団から、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが全面委託を受けて実施したものである。調査の実施に先立って、前述の3者は、委託契約を昭和54年6月1日付で締結し、現地調査には昭和54年7月15日から着手した。

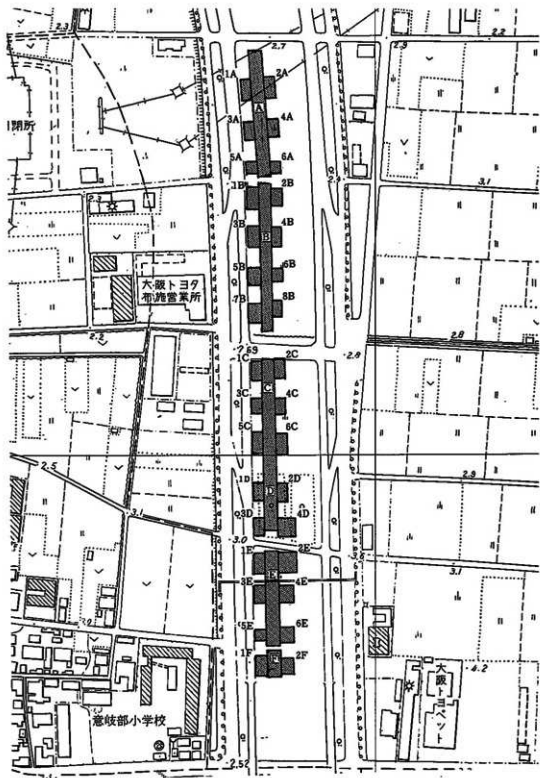
現地に於ける発掘調査は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが担当し実施した。なお、調査作業の内、機械掘削、人力掘削、鋼矢板打設及び引抜き、切梁腹起しの架設等の土木工事や準備工事は、調査に伴う補助作業として、土木工事専門業者に一括発注をし、工事請負契約を締結する形で実施した。

本調査は、因となる高速道路が高架道路であること。遺跡の立地する場所がデルタ地帯であり、その特徴として遺構や遺物包含層が地下深く埋没していること。その他安全性、経費、期間等の諸条件を考慮して、全面発掘調査より現況保存を優先した必要最少限度の調査を目的として発掘調査面積を極力限定する方法、いわゆる“トレンチ調査方式”が採用された。

“トレンチ調査方式”とは、最初に調査した長原遺跡の発掘調査方法（橋脚予定位置のみに限定された方法）の数々の問題点の反省の上に、瓜生堂遺跡の調査の段階から採用された方法である。この方法は、まず最初に路線中央（高速道路センター）に遺跡全域にわたって南北方向に幅10mのトレンチを設定し、その部分（トレンチ部）の調査結果を検討、判断して橋脚位置を決定する。そして決った橋脚位置の内、トレンチ部分に含まれなかった部分（切抜部）を再度発掘調査するという2段階調査の方法である。この方法では、基本的に遺跡全域にわたって1本のトレンチが設定されることになるが、遺跡地内には既に埋設されている地下埋設物（電々、水道、下水道、電気、ガス等）が存在したり、横断道路や、農業用水路があったりするため、トレンチが分断されるのは止むを得ないことであった。従って結局AからFまでの6本のトレンチに分断され、それぞれの長さはAトレンチから順に93m、116m、87m、60m、76m、30mとなった。

また、当遺跡の立地条件がデルタ地帯であることから、その特徴として遺構、遺物の埋没深度が深くかつ地下水位が高くて湧水が激しいこと等、調査精度の確保や、安全性の確保のために第1次発掘調査の結果に基づいて、埋没深度が2mを超える部分（A、B、E、F）については、トレンチ部、切抜部共に鋼矢板で土止めをすることとし、2mに満たないと結果を得ている部分（C、Dトレンチ部分）については、1：1の法工法で調査を実施することとした。ただし、Cトレンチについては、埋没深度がトレンチ部の調査の結果、2mを超えることが明らかとなったため、切抜部調査時には鋼矢板の土止工法を採用した。

調査の実測基準線並びに地区割については、道路公団のセンター杭をそのまま利用し、1グリッド10m四方とした。またクロノイド曲線の入るAトレンチ部分については、Bトレンチ以南の直線区間を延長することで基準線とした。



第1図 新家建跡トレンチ配置図 (1/2500)

第三章 新家遺跡の歴史的地理的環境

当遺跡を考える上で重要な意味を持つのは次の時代である。①縄文時代晩期、②弥生時代、③古墳時代である。以下各時代における周辺の歴史的地理的環境を述べてゆく。

縄文時代晩期

この時代の河内地域の自然地理的環境は「大阪平野の発達史」^{註1)}において明らかにされ、河内湖の時代とされる。また、遺跡の分布は生駒西麓地域と上町台地地域に限られ、大和川水系の沖積平野部にはあまり認められない。日下遺跡、芝ヶ丘遺跡、鬼塚遺跡が生駒西麓地域、森の宮遺跡が上町台地地域に見られ、八尾南遺跡、長原遺跡等がある。しかし、新家遺跡周辺においては、この時代の遺跡は全く知られておらず、歴史的には空白地帯である。

弥生時代

弥生時代には、これまでとは異なった遺跡分布が見られ、河内平野中央部に遺跡が集中する。むろん生駒西麓地域および上町台地地域にも遺跡が存在しない事は無いが、大遺跡は平野中央部に集中的に形成される。瓜生堂遺跡、山賀遺跡、亀井遺跡がこれらであり、生駒西麓地域には鬼虎川遺跡、上町台地地域には桑津遺跡がそれぞれ認められる。そしてこれらの大遺跡の周辺には小さな遺跡をいくつか伴っていると考えられ、そのうちの1つが新家遺跡と考えられる。また中期初頭に消滅した遺跡のうちで新家遺跡と非常によく似た性格の遺跡として高井田遺跡があげられる。

古墳時代

河内湖にどんどん土砂堆積が続く陸化作用の進行とともに、再び人々の生活空間となった。現在までに判明している遺跡の中で最も河内湖の中央部に位置するのが当遺跡であり、自然地理的な影響を最も鋭敏に反映する遺跡でもある。これら近隣の遺跡の動向から見れば次の通りになる。弥生時代前期にはすでに瓜生堂に人が定住しムラを形成し、その立地は三角州の先端に近い微高地に相当すると思われる。この遺跡はその後、土砂に被われる事があるが、根強くムラ遺跡を継続させている。西岩田遺跡では古墳時代前期(庄内期)から遺構に伴って遺物が出土し、新家遺跡では古墳時代中期より人々が定住し始める。この様に河内湖の陸化とともに遺跡はどんどん河内平野中央部に進出してゆく。

この様な状況を取りまとめると、新家遺跡の周辺の歴史的環境は、弥生時代以前は空白地帯であり、さまざまな諸関係を取りむすぶであろう周辺の諸集落の動向もほとんどわからない。むしろ、河内湖の自然地理的な影響を最も受けていると言えよう。弥生時代に入ってようやく、周辺の遺跡とともに出現し、ある時期に消滅する。これらも一連の関連性を持っているようである。古墳時代に入り、中期においてようやく人々が定住するが、これも河内湖のあり方や、自然の制御のあり方と関連していると考えられる。註1) 市原実、梶山彦太郎、「大阪平野の発達史」『第四紀研究』



第2図 新家遷移周辺・遷移分布図

第四章 調査の成果

第一節 基本層序

当遺跡では基本層序を十層に分層し、それぞれの層の基礎的資料は一覧表に示した。

I層 この層のT.P.—4.6m付近から、エドザクラの稚貝を検出した。さらにI層上部から40cm下付近まで、貝類の生息痕であるサンドパイプを多数認めた。その他極めて細かな植物遺体片を下部から検出し、上部では植物遺体が増加している。

II—1層 層中から広葉樹の落葉、木の枝、種子等と、炭化した木の剝片を少なからず確認した。暗灰色粘土、シルト、中砂が入り混り、モロモロとした土質である。

II—2層 基本的には暗灰色粘土層であるが、この層中に灰黄色中細砂層を含み、植物遺体はあまり含まない。層の下部から縄文時代の土器片が出土した。また5Aトレンチではセタジミの閉じた貝殻が密集しているのを観察した。

III層 灰白色砂層からなり、上部堆積は微粒子化して、VI層に漸次変化してゆく。層中からは、少量であるが、植物遺体を認めた。

IV層 灰白色の均一な粘土層である。粒子は非常にきめ細く、植物遺体もほとんど含まない。IV層の堆積終了後、この層上面に弥生前期の遺構が形成される。

V層 植物遺体の集積層であるが、間層に灰色粘土の薄い層が認められ、互層をなす。VI層では両者の関係が逆転する。植物遺体は単子葉植物の茎、葉が積み重なったものである。

VI—1層 この層の間層には残重にも植物遺体層が認められ、木器群を数多く含むのが特徴である。そして、この層は時間的推移とともに、灰色粘土層の占める割合が多くなる。

VI—2層 灰色粘土層、灰緑色シルト層、灰白色砂層の互層をなす。層中には厚さ5mm以下の薄い炭化物層が残重にも認められた。

VII層 砂層からなり、A・B地区にのみ認められる。VI—2層が堆積しなかった窪地を埋め、古墳時代前期の遺物を含む。上面には古墳時代中期以降の遺構が営まれる。

VIII層 この層は1mほどの厚さがあり、さらに3層に細かく分層できる。灰青色粘土層、灰青色粘質土層、暗灰青色粘質土層である。このほか茶褐色粘質土層が一部分のみに認められ、また黄色砂では調査地の大部分を覆っており、この下から足跡を検出した。灰青色粘質土系の層は3層以上には細分できなくて、I—VI層が残重にも細分できる薄い層からなるのとは異質である。

IX層 灰褐色粘土層、中央環状線買収直前まで、田畑として使用されていた床土にあたる。ただ、この層自体が田の耕作土であったかどうかに関しては、わからない。この層から切り込む井戸が数基認められる。

X層 黒色土層、最上層に認められる。田および畑地の耕作土層がよくわからない層である。

註1) 梶山彦太郎氏ご教示による。

第1表 基本層の序一覽表

	抽出面の高さ T.P. (m)	層厚(m)	土色	遺物	特 色
I層	-3.6~-3.9	不明	灰色粘土層	自然遺物としてエドヅクラの幼貝を抽出。	上部には、貝類の生痕化石、サンドパイプが認められた。海成層である。
II-1層	-2.7~-3.2	0.46	灰緑色粘質土層	広葉樹の葉、種子を抽出。	II-2層がAトレンチの北側に限り認められる。セタシジミが生息していた。
II-2層		0.20	暗灰色砂まじり粘土層	縄文晩期滋賀里土器片を出土。	
III層	-1.9~-2.6	0.65	灰白色砂層	土器片は検出せず、自然遺物を抽出。	IV層へは漸次的に変化する。この層中からもセタシジミを抽出する。
IV層	-1.5~-2.3	0.40~0.60	灰白色粘土層	層中から遺物は出土せず。	この層の上面に弥生時代前期の遺物が作られる。自然河運2条あり。
V層	-1.0~-1.9	0.30~0.60	黒茶色粘土層	弥生時代前期~中期前半の土器、木器。	この層は植物のピート層、黒茶色粘土層と灰色粘土層の互層。
VI-1層	+0.2~-1.15	0.15~1.90	灰色粘土層	木器を出土する。	河運が発達し、三角州を生長させる。
VI-2層			灰緑色粘質土層	弥生時代後期の遺物を出土する。	
VII層	+0.2~-0.3	0.65~1.25	灰黄色砂層	庄内式、酒津式の遺物を出土する。	VI-1層の河運しない区域は遺物も検出できず。遺物も抽出される。この上面に弥生時代中期の遺物層が形成される。
VIII-1層			暗灰青色粘質土層	瓦器、白磁、青磁、須恵器、土師器を出土。	
VIII-2層			灰青色粘質土層	瓦器、白磁、青磁を出土。	
IX-3層	1.4~0.35	0.40~1.40	灰青色粘土層	この層上面に黄色砂層あり。	この層上面に足跡。
IX-4層			茶褐色粘質土層	瓦器、その他を含む。	野地層か。
IX-5層			黄色砂層		
X層	1.0~2.5	0.05~1.50	灰褐色粘土層		
X層			黒色腐植土層		

備考：第4図3図は、基本層序をさらに細分したもので、必ずしも、この表とは一致しない。

第二節 遺構

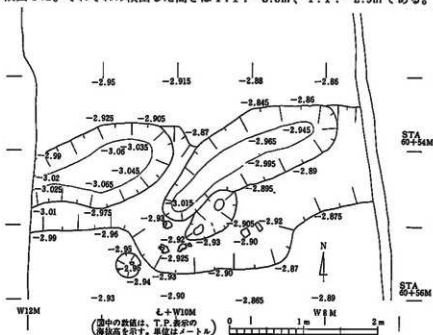
(1) 縄文時代晩期

1) 縄文時代晩期土器出土状況 (挿図4 図版20)

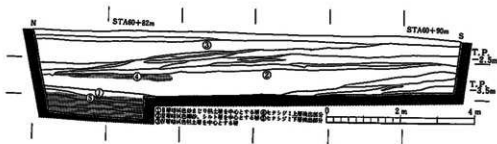
3 A トレンチ北側のⅡ-2層流水堆積層中から、縄文時代晩期滋賀里Ⅲ期の土器片約20個が出土した。これらの土器は2、3点ごとに集中し、これらが散在していた。接合し得た破片も少し離れて出土したが、土器の器壁や破断面の磨耗度は認められない。出土はT. P. -3.3mを測り、河内平野の地下深くである。

2) セタシジミ検出状況 (挿図5 図版21)

縄文土器出土地点に近接した5 A トレンチでは、Ⅱ-2層、Ⅲ層から貝殻を閉じたセタシジミを数多く検出した。それぞれの検出した高さはT. P. -3.5m、T. P. -2.9mである。



第4図 縄文時代晩期 土器出土状況平面図 (1/50)



第5図 縄文時代晩期 5 A トレンチ セタシジミ出土状況・断面図 (1/100)

[2] 弥生時代前期

この時代の遺構は柱列、土壇、落込に限られ、遺構分布も粗で、散在している。遺構分布範囲の北端、南端には河道が認められる。一方遺物は土器、木製品、石製品を確認したが、検出量は極めて少ない。

1) 柱列 (第2表)

柱痕がほぼ一直線に並んで遺存し、長方形を呈するもの、あるいは長方形の部分を検出するものから、2本のみで構成すると思われるもの等と、柱穴のみで構成されるものをあわせて柱列として取りあつかう。実際の機能では分離し得るかも知れないが、この点は考察で触れたい。また基礎的なデータは一覧表にして示す。

柱列1 (図版7・22・23) 全体形は長方形であり、このうち北東部、南東部は明らかではない。柱根は中央軸上のP-1、P-13が地中深く入れられている。柱根の間隔は不規則で、長軸方向において、左右一定の幅の振れを持って並ぶ。柱列の大半に柱根が遺存している。先端が180°近い鈍角を呈す柱根が多く、少数であるが最先端部が上からの圧力の為か、横方向に拡がり、柱根径より太くなる事例も認められた。なお遺存した柱根はすべて丸太材である。長軸方向は北から45°西に振っている。

柱列2 (図版8・22) 全体形は長方形をなし、南東隅のみ欠ける。柱根を残すものと柱穴のみのものが混在している。両者は時期差、建てかえ等の可能性もあり、前者が新しく、後者が古いとも考えられる。柱のあり方は柱列1に類似して、中央軸上両端の柱が深く太い。柱の並び方は柱列1と同様である。方位は北から約45°西に振っている。柱列1・2とも柱列内に他の遺構は存在せず、間に両者と平行な土壇1・2が存在する。

柱列3 (図版9) 形態は長方形であるが北西部はわからない。一本のみ長方形のわくから離れて、長軸延長上に存在する柱根が認められた。柱根はすべて丸太材である。方位は北から約45°西に振っている。この柱列の場合も両端の柱は太い。

柱列4 (図版10) 形態は長方形と思われ、このうち2辺を認めた。柱根の遺存するものと柱穴のみのものからなり、柱穴のみも相当数認められる。柱穴埋土も数種類あり、何回かの建てかえの可能性も考えられる。中央軸上の柱は太くかつ深く地中に入れられている。方位は柱列1・2・3とは異なる。

柱列5 (図版11) 形態は長方形を呈し、横4個×縦3個の柱穴からなり、比較的大型のものも認められる。方位は柱列5・6・7と同様である。

柱列6 (図版11) 形態は長方形を呈し、横3個×縦3個の柱穴からなる。柱列5と重複し、両者の前後関係はわからない。

柱列7 (図版9) 形態は長方形を呈し、横3本×縦2本の柱からなり、南東隅のみわからない。柱は柱穴のみである。

柱列8 (図版10) 形態は長方形を呈し、横2本×縦2本のみ判明している。柱は柱穴のみで

ある。

柱列9 (付図3) 柱列1の西側にあり、2本の柱根からなる。

柱列10 (付図3) 2本の柱根からなり、方位は柱列11と非常に似る。

柱列11 (付図3) この柱列も2本の柱根からなり、一方は丸太材、一方は中心を通る八つ割りにした木材を使用する。

柱1 (付図3) 1Bトレンチ柱列2の南西側にある単独の柱根である。付近にはさらに南西側に柱穴が3個存在しており、これと一群になる事も考えられる。

柱2 (付図3) 柱列3の北東側にあり、柱根が一本認められる。この周辺にも柱穴が数個認められ、これらとあわせて柱列になる事も考えられる。

2) 土壇 (第3表)

人為的作為の認められる窪みを土壇として、深くて法面があり、炭化物層が堆積層中に認められる事、土器・木器等の遺物を出土する事が多い。

土壇1・2 (図版12・28) 柱列1・2の間にあり、四者は互いに平行である。土壇1・2は南北に連らなっている。

土壇3 (図版14・28) 大型の土器片を出土した。

土壇4 (図版13・29) 比較的深く掘り込まれる遺構である。

土壇5 (図版12・30) 浅い皿状で、底面から土器片、石、植物の小枝等を出土した。

土壇6 (図版13・30) 底面には小石が比較的多く認められた。

土壇7 (図版13・30) 底面から土器等を出土した。

土壇8 (図版14・31) 底面は平坦で、土器、木片等が認められた。

土壇9 (図版31) 深く掘り込まれた土壇内に、木材加工時の切削片が充満しており、他の遺物は認めなかった。

土壇10 (図版14・32) 細長く深い。遺物は木片を少し検出した。

土壇11 (図版14・32) 遺物は出土しない。

土壇12 (図版14) 遺物は石、土器片を出土した。

3) 落込 (第4表)

土壇以外の浅い窪みで先述した以外に、人為的作為にとぼしく自然の窪みの可能性があるものも含んでいる。これらはすべて一覧表に示す。

第2表 弥生時代前期 柱列一覽表

柱列名	遺構名	柱間法	柱間距離(m)	柱高(m)	断面形状	方位	備	考
1B	柱列1	7.14	3.30	0.21~2.26	柱間法不明	方	遺構名不明	
1B	柱列2	8.42	3.22	0.45~1.53	遺構名不明	方	遺構名不明	長方形、第9表に詳しく示す。
2B	柱列3	(測)4.44	(測)2.98		8	方	遺構名不明	第9表に詳しく示す。
3B	柱列4	(測)6.48	(測)3.10		32	方	遺構名不明	第9表に詳しく示す。
3B	柱列5	4.18	2.81		8.10	N-29°-E	遺構名不明	北西向、南東向を見る。
3B	柱列6	2.57	2.20		32	N-28.5°-E	遺構名不明	4本×3本の柱列、間隔は0.7×0.4、0.5×0.4である。柱間は違存せず。
3B	柱列7	2.20	1.70		13-25	N-27.5°-E	遺構名不明	間隔は1.0×0.42×0.25等の大きさである。柱間は違存せず。
4B	柱列8	1.20	0.85	0.85~1.20	20~35	N-56.5°-W	遺構名不明	柱間は違存せず。
1B	柱列9	1.70			4-5	N-35.5°-W	遺構名不明	柱間は違存せず。
5B	柱列10	2.28			27~36	N-74.7°-E	遺構名不明	2本で構成する。
7B	柱列11	1.18			4-6	N-9.3°-E	遺構名不明	2本で構成し、一本は割り材、半径6cm、もう一本は径7cm。
1B	柱1				6-7	N-9.5°-E	遺構名不明	2本で構成する。
2B	柱2				6		遺構名不明	柱列1の南西側にある。
					6		遺構名不明	柱列3の北東側にある。
2B	柱2				17		遺構名不明	

第3表 弥生時代前期 土坑一覽表

遺構名	遺構名	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形状	断面形状	遺土層1層	遺土層2層	遺土層3層	遺土層4層	遺物及び備考
1B	土坑1	4.30	1.40	0.20	細長い円形	開口は急	黒色炭化物層	黒色炭化物層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	土器片多く出土。
1B	土坑2	2.60	0.80	0.20	細長い円形	開口は急	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	炭化物層	遺物は少量出土。
2B	土坑3	1.50	(測)0.76	0.33	(測)半円形	開口は急	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	遺物は少量出土。
2B	土坑4	1.95	0.78	0.60	楕円形	開口は急	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	遺物は少量出土。
2B	土坑5	1.70	1.15	0.64	不定形	浅い凹状	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	遺物層に遺物が散在する。
3B	土坑6	1.04	0.90	0.25	隅丸方形	開口は急	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	底面に小石が少し存在する。
4B	土坑7	2.25	1.70	0.27	不定形	開口は急	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	一部分、北面が再び掘られる。
5B	土坑8	4.42	2.04	0.19	不定形	開口は急	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	炭化物、土器片、木片等も出土する。
5B	土坑9	0.68	0.79	0.22	いびつな楕円形	開口は急	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	木片加工の切屑片が充填していた。
7B	土坑10	5.70	1.10	0.36	細長い楕円の遺構	開口は急	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	土器片を少量、出土する。
7B	土坑11	1.70	1.06	0.27	楕円形	開口は急	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	遺物は少量、出土する。
8B	土坑12	2.61	2.35	0.20	不定形	開口は急	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	土器片、木片、石を出土した。
8B	土坑13						褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	褐色赤色粘土層	遺物、土器片、木片、石を出土した。

第4表 外生時代前期 塔達一覽表

塔達名	塔達長(m)	塔達幅(m)	塔達高(m)	塔達深(m)	塔達底(m)	塔達頂(m)	塔達底1層	塔達底2層	塔達底3層	塔達底4層	塔達及び備考
1 B	塔達1.1	3.35	2.28	0.10	不定形		灰白色粘土				遺物なし。
2 B	塔達2.2	6.80	2.73	0.07	(塔)直角三角形		灰白色物	黒灰色粘土層 粘土アラopp層	黒灰色土、灰白色 粘土アラopp層		土器片を遺物層より約10cmほど掘り上げられている。 ここに土器片が認められる。
2 B	塔達3.3	2.20	1.04	0.21	不定形		暗灰色粘土層	黒灰色粘土、灰白色 粘土アラopp層			遺物なし。
2 B	塔達4.4	1.26	0.98	0.21	楕円形		灰白色物	黒灰色粘土層	灰白色土、灰白色 粘土アラopp層		塔達部分で遺物層を透し、土器の一部のみ。
2 B	塔達5.5	0.76	0.40	0.04	不定形		灰白色土、黒色粘土 アラopp層				遺物なし。
2 B	塔達6.6	1.54	1.36	0.07	不定形		灰白色粘土層				遺物なし。
2 B	塔達7.7	0.96	0.70	0.05	不定形		黒灰色粘土層				遺物なし。
4 B	塔達8.8	(塔)0.80	(塔)0.44	0.08	不定形		黒灰色粘土層				遺物なし。
4 B	塔達9.9	(塔)0.74	(塔)0.54	0.09	不定形		黒灰色粘土層				遺物なし。
4 B	塔達10	(塔)3.68	(塔)1.56	0.09	不定形		黒灰色粘土層				遺物なし。
4 B	塔達11	1.46	1.08	0.15	不定形		暗灰色粘土層	黒茶色粘土層	灰白色粘土層		遺物なし。
4 B	塔達12	1.49	0.53	0.06	不定形		黒灰色粘土層				遺物なし。
5 B	塔達13	5.12	1.23	0.07	楕長(粗面)している。		黒口から塔の内面まで 遺物層である。	黒灰色粘土層			土器片、木片が出土する。
5 B	塔達14	(塔)3.68	(塔)0.80	0.04	不定形		暗灰色粘土層				木の切削片が出土する。
5 B	塔達15	1.19	0.92	0.10	不定形		暗灰色粘土層				木の切削片が出土する。
6 B	塔達16	(塔)7.60	(塔)2.40	0.10			暗灰色粘土層	灰色粘土層			遺物が出土する。
7 B	塔達17	1.22	1.01	0.16	不定形		黒灰色粘土層				遺物なし。
7 B	塔達18	0.53	0.09	0.09	不定形		黒灰色粘土層				遺物なし。
7 B	塔達19	0.96	0.90	0.04	不定形		黒灰色粘土層				遺物なし。
7 B	塔達20	0.67	0.07	0.07	不定形		黒灰色粘土層				遺物なし。

(塔) はトレンチ内の法面である。

第5表 弥生時代前期 柱列1・2計測表(1)

ピット番号	柱径(cm)	柱高(cm)	掘方深さ(cm)	掘方幅(cm)	掘方深さ(cm)	掘方幅(cm)	備考(柱横形跡)
P-1	7	64	10	9			㊦ あまり先端はとがらず、むしろ鈍角に近い角度を作る。
P-2	6.2	8.3					㊦ あまり中心部は尖らず、全体的に浅く削る。
P-3	6.2	19.6	23	14	19		㊦ 先端は切断時のさきくれ立った平面をなす。
P-4	6	14	23	14	19		㊦ 片側から削り、横斜した面を作る。
P-5	4.2	18.2					㊦ 先端は平面をなし、切断した時のさきくれが残る。
P-6	3.8	21.4					㊦ 少し高い位置から削り出すが、中心部大半は平坦である。
P-7	4.8	16.3	14	13	12		㊦ 主に二方向から削り、あとは浅く削る。
P-8	7	13	21	16	11		㊦ 一方から、斜めに切断したままである。
P-9	7	52	12	9	5		㊦ やや実り気味である。
P-10	5.5	27	21	17	12		㊦ 一部分は鋭く削るが他の部分では少し削る、不ぞろいな形態を示す。
P-11	5.5	14.4	18	17	7.5		㊦ 先端は一方から削り出すが、中心部は平坦面である。
P-12	6.5	30					㊦ 柱は黒曲している。
P-13	10	36					㊦ 先端は少し高い位置から削り出すが、下端は平らになる。
P-14	8	5					㊦ 非常に遺存長は短い、先端はほぼ水平である。
P-15	9.2	21.5					㊦ 全く四角から削り出していない平坦面をなす。
P-16	5.0	7.5					㊦ 先端は少し丸みを帯びる。
P-17	7.3	11.2	15	13	5		㊦ 少し四方から削り出しているが先端は平坦である。
P-18	8.2	6.2	19	14	5		㊦ 先端は二方向から少し高い位置より削り出しているが、先端は少し平坦面を作る。
P-19	5.8	23	15	9	2		㊦ 一方から削り出して、中心部はさきくれ立った平坦部が残る。
P-20	6		10	8	3		
P-21			28	10	10		
P-22			62	32	22		深い部分は22cmを示し、深い部分が4穴存在する。
P-23			23	8	5		
P-24			30	18	12		
P-25			23	17	6		
P-26			19	18	6		
P-27			16	15	4		
P-28			19	11	6		
P-29	7.2	42.5	52	33	24		㊦ 四角から少し削るが、中心部はほぼ水平に近い。
P-30	10.1	34.2	52	33	24		㊦ 木を切断した時のままのように、四方から浅く削る。
P-31	7.8	23	32	20	10		㊦ 一方から高い位置より削り、残りは四角から削る。
P-32	6.8	31.8	32	20	10		
P-33	5.6	42	15	12	3		㊦ 先端は平坦面をなす。
P-34	9.9	24.5	27	22	13		㊦ 一方から高く削り、他は低い位置から削り出している。
P-35	9.4	25.2	19	16	10		㊦ 二方向から少し削り込んでいる。
P-36	5.8	19					㊦ やや削り込んでいるが直角三角形ほど鋭くならない。
P-37	4.5	23					㊦ 二方向から高く削り、刃部が途中で停止した所からは取っている。
P-38	6.5	17	15	15	9		㊦ 周囲は少し削るが、中心部は切断時のさきくれ立った状態のままである。
P-39			14	13	10		
P-40	6	20	30	18	7		㊦ 先端は一方に斜めに削り出された平面をなす。その傾斜はゆるやかである。
P-41	4	13	30	18	7		㊦ やや実っているが、先端部は丸くなる。
P-42	5.4	12.4					㊦ 周囲は少し削るが中心部はほぼ水平に切断している。
P-43	7.6	47.5	13	9	10		㊦ 西方から少し削り込んでいる。そして一方のみ高い位置から削る。
P-44	8	25	54	42	38		
P-45	4.7	17.6					㊦ 先端はほぼ水平である。
P-46	10	50.7					㊦ 先端は丸みを帯びつつ少し削り出す。
P-47	5.7	30	28	18	25		㊦ 先端は周囲を少し削り、中心部は水平面を作る。
P-48	5.8	30	20	14	13		㊦ 片面は直径の高さから削り出し、平削りにし、裏面は少し先端部が傾斜している。
P-49	8	20	30	13	4		㊦ ほぼ先端は水平である。
P-50	7	20	30	13	4		㊦ 少し四角から削り出している。
P-51	6	8	20	16	6		㊦ 少し削り出している。
P-52	7	20	16	15	15		㊦ 直径程度の高さから削り出しているが、先端は平らである。
P-53	6	19	17	18	14		㊦ 二方向から削り込んでいる。
P-54	4	13	36	21	7		㊦ 先端は丸くなる。
P-55	6	34	36	21	7		

第5表 弥生時代前期 柱列1・2計測表(2)

ピット 番 号	柱根 径(cm)	柱根 幅(cm)	根方 長さ(cm)	根方 幅(cm)	根方 厚(cm)	備 考(柱根形態)
P-56	8	33	36	21	7	㊦ 周囲から削り込んでおり、先端は丸みを帯びる。
P-57	8	7	14	13	2	㊦ 先端は全く削り出しを施さず、平坦である。
P-58	7	38	45	21	24	㊦ 先端は平らで鈍角であるが、削り出す位置は少し高い。
P-59	6	8	16	15	5	炭化物の集積。
P-60			25	16	26	
P-61			16	12	9	
P-62			26	20	16	
P-63			14	9	4	
P-64			17	13	25	
P-65			19	18	18	
P-66			27	21	16	
P-67			26	17	16	
P-68			22	20	17	
P-69			15	12	14	
P-70			25	15	10	
P-71			20	19	8	凡例
P-72			25	10	12	㊦ 柱根先端が鈍角をなすもの。また、先端が水平でも全体が鈍角であればこれに含む。
P-73			19	17	16	㊦ 柱根先端が直角程度の鋭さを有するもの。
P-74			15	12	16	㊦ 柱根先端が鋭角をなすもの。
P-75			16	12	13	
P-76			36	20	40	
P-77			24	20	15	
P-78			16	14	7	
P-79			9	7	12	
P-80			38	22	24	
P-81			33	20	20	
P-82			15	8	12	
P-83			22	22	22	
P-84			22	16	20	
P-85			25	14	20	
P-86			16	10	23	
P-87			17	14	26	
P-88			22	17	12	
P-89			16	11	4	
P-90			16	10	7	
P-91			30	23	26	
P-92			28	15	26	
P-93			14	15	16	
P-94			18	15	16	
P-95			38	20	33	
P-96			18	7	8	
P-97			14	6	4	2孔あり。もう一つは12×10×4
P-98			30	30	(24)	
P-99			27	26	(21)	
P-100			13	9	10	
P-101			23	20	7	
P-102			12	12	9	
P-103			18	14	9	
P-104			18	10	3	
P-105			17	14	12	
P-106			10	7	9	
P-107			14	9	15	
P-108			13	10	6	
P-109			16	11	4	
P-110			38	30	11	

第6表 弥生時代前期 柱列3針測表

ピット 番	柱根 直径 (cm)	柱根 厚さ (cm)	掘方 長さ (cm)	掘方 幅 (cm)	掘方 深さ (cm)	備 考 (柱根形態)
P-1	8.8	43.2	22	18	4	㊦ 一方は少し高い位置から削り、他は浅い削りである。中心部は平坦である。
P-2	8.9	15.4	13	11	2	㊦ 四方から浅く削り込むが中心部はほぼ平坦面をなす。
P-3	5.4	9.6				㊦ 一方から削り切断了時の切れ残りがとび出ている。
P-4	6.6	12.3				㊦ 縁に削り出し、先端は突出部が二カ所ほど存在する。
P-5	6.6	29				㊦ 少し先端を削り出し、また下部近くには枝が出ており、非常によくらんでいる。
P-6	5.4	13.5				㊦ 全くの平坦面をなし、少しも削り込んでいない。
P-7	7.3	26.2				㊦ 少し削り込んでいるが先端は平坦である。
P-8	7.9	19.6				㊦ 先端は鈍い形で削り出す。
P-9	9.4	28.6				㊦ 四方から削り出すが、一方は高い位置から削り出す。先端としては高い位置からの削り出しのみである。他は浅く削り出す。また下部近くには枝が出ており、非常によくらんでいる。
P-10	6.5	32				㊦ 一方から高い位置より削り出す。
P-11	5	28				㊦ わずかに四方から削り出す。
P-12	6	21				㊦ 一方の方向の高い位置と低い位置から削り出している。
P-13			22	12	8	
P-14			16	12	9	
P-15			24	25	13	
P-16			14	13	9	
P-17			24	18	12	
P-18			18	12	10	
P-19			12	8	12	
P-20			16	9	6	
P-21			11	8	6	
P-22			30	25	6	
P-23			14	8	4.5	
P-24			21	12	5.5	
P-25			12	11	21.5	
P-26			14	9	13	
P-27			10	10	9.5	
P-28			22	14	8.5	
P-29			12	11	4.5	
P-30			11	11	9	
P-31			15	14	10	

第7表 弥生時代前期 柱列4針測表(1)

ピット 番	柱根 直径 (cm)	柱根 厚さ (cm)	掘方 長さ (cm)	掘方 幅 (cm)	掘方 深さ (cm)	備 考 (柱根形態)
P-1			30	19.5	22	
P-2			24	16	30	
P-3	7.8	12	29	19	12	㊦ 先端は切断了時のさきくれが残る。
P-4			21	19	23	
P-5	6.7	24.4	18	17	9	㊦ 先端はやや鋭く削り出し、中心部まで鋭い。
P-6	7.8	32	29	20	18	㊦ 先端は少し水平面から傾斜を持った面を作る。
P-7			53	34	15	
P-8			25	15	37	
P-9			23	20	19	
P-10			19	18	19	
P-11			11.5	9	6	
P-12			31	19	11	
P-13			15	14	12	
P-14			11	9	19	
P-15	8.1	21.5	18	13	11	㊦ 二方向からのみ削り出す。
P-16			19	16	20	
P-17			29	20	17	
P-18			17	15	11	
P-19			15	13	15	
P-20			26	18	21	

第7表 弥生時代前期 柱列4 計測表(2)

ピット 番	柱根 直径 (cm)	柱根 埋存長 (cm)	側方 長径 (cm)	側方 短径 (cm)	側方 深さ (cm)	備 考 (柱根形態)
P-21			29	20	19	
P-22			22	20	27	
P-23			22	16	7	
P-24			22	15	21	
P-25	6.2	14.8	19	16	9	㊤ 非常に狭くわずかに削り出している。と言うか伏拝した時の切取痕のままか。
P-26			17	11	12	
P-27			13	11	12	
P-28	5.5		35	20	17	
P-29			17	14	4	
P-30			16	13	5	
P-31			10	8	5	
P-32			10	10	19	
P-33	6.4	16.2	33	22	23	㊤ 周面から狭く削り出すが先端部は水平面を作る。
P-34	7.0	14.4	15	13	6	㊤ 先端部は水平面を作り、全く削り出さない。
P-35			10	6	12	
P-36			22	10	7	
P-37			20	15	19	
P-38			19	11	16	
P-39	7.5	25.5	28	26	19	㊤ この柱も周面は少し削り出すが先端は丸く作る。
P-40			19	17	9	

第8表 弥生時代前期 その他の柱列・柱根計測表

	柱根 直径 (cm)	柱根 埋存長 (cm)	側方 長径 (cm)	側方 短径 (cm)	側方 深さ (cm)	備 考 (柱根形態)
1B柱列7	2.5					
	3.5					
5B柱列10	5.7	9.0				㊤ 先端は少し鋭い角度を持って削り出す。
	6.0	26.8				㊤ 柱根先端部は少し屈曲しており、その先端部はやや丸くおさめている。
7B柱列11	4.7	25				㊤ 片削り材使用。先端は切筋したままで、鋭くする事は全くない。
	3.5	14				㊤ 片削り材使用。先端は一方のみ少し削り出している。
1B柱1	3.5					
2B柱2	5.8	17	22	17	15	㊤ 少し高い位置から削るが、中心部は平坦面をなす。

第9表 弥生時代前期 柱列・方位一覧表

柱列1	北東側長軸列 横行長軸列 南西側長軸列	(P-20)-(P-16) (P-1)-(P-13) (P-2)-(P-12)	N48°5'46"W N46°28'46"W N48°5'46"W (トランシット計測値)
柱列2	北東側長軸列 横行長軸列 南西側長軸列	(P-59)-(P-47) (P-58)-(P-47) (P-29)-(P-46) (P-30)-(P-46) (P-31)-(P-43) (P-32)-(P-43)	N44°19'46"W N45°20'56"W N46°13'16"W N47°4'11"W N43°53'36"W N45°6'16"W (トランシット計測値)
柱列3	北東側長軸列 南西側長軸列	(P-1)-(P-8) (P-12)-(P-10)	N44.8°W N47.2°W (図面上計測値)
柱列4	北西側長軸列	(P-6)-(P-17) (P-5)-(P-17)	N28.9°E N28.5°E (図面上計測値)
柱列7 柱列10 柱列11			N74.7°W N9.9°E N9.5°E (図面上計測値)

(注) (1) 主に柱根の遺存しているものを選び、柱根中心点で計測した。

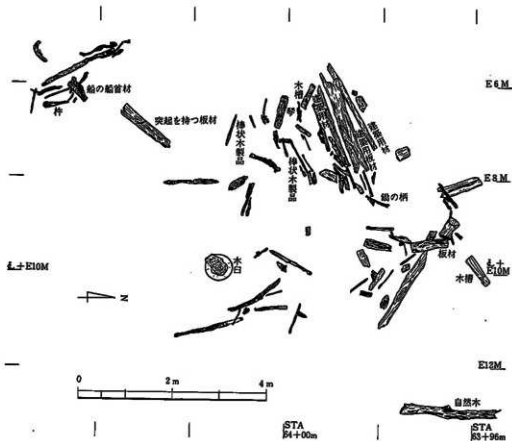
(2) トランシット計測値は天測によるものではない。

(3) 参考までに述べると新家遺跡使用の地区はほぼ真北に近い値であるが、N1°29'54"Eの若干の振れを有している。

[4] 弥生時代後期

この時代は、おおよそⅥ層が堆積し続ける期間に該当するが、遺構はほとんど認められず、堆積作用の途上の人々の足跡をみとめ、遺物では河に流され漂着した木器群を検出した程度である。

1) Ⅵ-1層 灰色粘土層から出土した木器 (挿図6・33~57 図版33・34・50~64 付図4) A~F地区まで全般に出土した。このうち1A・2Eトレンチでは集中して出土した。2Eトレンチでは南西から北東へ流れる河道の岸部に上流から押し流されて来た大量の木器群が出土したが、これらは木臼、板材、琴状木製品、木槽、杵等であり、生活用品や建築用材が主である。これらについては第5節、遺物篇で詳述する。



第6図 弥生時代後期 2Eトレンチ 木製品出土状況平面図 (1/80)

2) Ⅵ-2層 灰緑色シルト層から出土した遺物 (付図4)

Bトレンチ南端とCトレンチとの間に東西方向に流れる河道がある。河道は氾濫をくり返し、両岸に堆積層を自然堤防状に積み上げてゆくが、この層中に完形品かもしくは完形品に近い土器群が埋没していた。高杯、甕類が主である。遺物は遺構に伴わずに、小さな自然堤防上に放置されたまま埋没しているかの様な検出状況である。これらの遺物は後に述べる。

〔5〕古墳時代前期

当時期においては一時的に土砂の流入は弱まり、わずかに河道底面に壓らしきもの、また主にB地区に足跡等の遺構を認めたとどまる。この後再びA・B地区にはⅣ層灰黄色砂層が推積する。

1) 堰

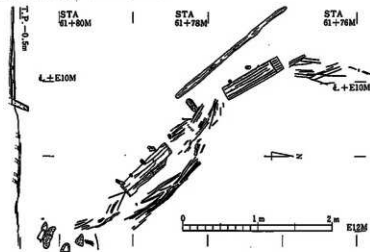
流路を少し変える為に作られた極めて簡単なもので、2基検出した。

6Bトレンチの堰 (挿図7、図版35)

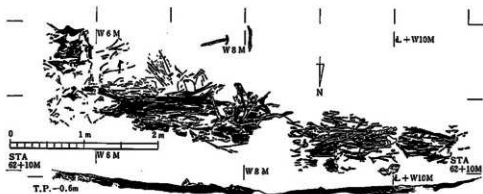
河岸から少し中央寄りの位置の河道底面上に上流側に傾けて打ち込まれた細い木の杭が数本あり、下流側に植物遺体を芯に上部に土を盛り上げ、上面に板材を置いたものである。

7Bトレンチの堰 (挿図8、図版35)

河岸と直交方向に植物遺体を一列に置いて芯を作り、その上に土を盛り上げる。中央付近を窪ませ、水が流出する様に作っていたらしい。



第7図 古墳時代前期 6Bトレンチ 河道底面堰平面図・見透し図 (1/50)



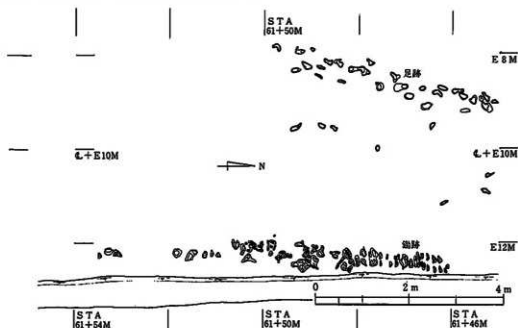
第8図 古墳時代前期 7Bトレンチ 河道底面堰平面図・見透し図 (1/50)

2) 鋤跡

何故にこのような鋤跡が、Ⅵ層河床に検出されるか不思議である。4Bトレンチから検出した。

4Bトレンチの鋤跡 (挿図9、図版36)

Ⅵ層は、当該トレンチでは薄い層でこの上面内河床から検出された。鋤跡は縦に2列、平行に並ぶ。鋤跡列は全長7.5m、幅0.7mであり、鋤跡内にⅥ層の砂が堆積した為、遺存したものと考えられる。鋤跡個々の計測表は第17表に示す。



第9図 古墳時代前期 4Bトレンチ 鋤跡平面図 (1/80)

3) Ⅵ層 灰黄色砂層出土遺物 (挿図58・59、図版64)

Ⅵ層河道の堆積層中から、土器片、木片等を出土した。これらは激しい流れの為、磨耗痕が認められた。土器片では庄内式甕、酒津式甕等が出土し、木製品では、杓子、木杭等が出土した。

〔6〕古墳時代中期

この時期では、掘立柱建物、土埴、溝等がA・B地区を中心に認められ、集落の一端らしい様相がうかがえる。

1) 掘立柱建物 (第10表)

建物1 (図版36、付図7) 東西に細長い建物構造を呈し、梁間二間以上、桁行一間と思われる。周囲には建物1に伴うと思われる遺構は認められず、単独で存在していたかの様である。

建物2 (付図7) 正方形に近い形態を呈し、三方を溝でかこまれる。北東に隣接して土埴が、西側には少し離れて落ち込み6があり、この時代の中心的な遺構が集中する。

2) 溝 (第11表)

B地区を中心に溝が縦横に掘られる。これらのうち主要な溝を説明し、他の溝については一覧表を参照されたい。

溝5、溝7、溝8 (付図7) これらの溝は、ほぼ平行関係か、同一線上にある。これらの溝の間に建物2が存在するが、これらの溝、建物の方位はほぼ近い値である。またこれらの溝は、土埴2、落ち込み6をつなぐ役割をはたしているが、落ち込み6では馬歯、白玉、土埴2では製塩土器、骨角器を出土し、性格的にも注意すべきものを出土した遺構を、それぞれ結ぶ役割をはたしている。

溝9 (付図8) B地区北端を東西に流れる。この南側に落ち込み6が存在する。

溝14、溝16、溝17 (付図8) これらの溝は一連の水系をなす。溝16から流入した水は、沼地に滲水し、その後、溝14、溝17から流出する。

溝18、溝20、溝25、溝27 (付図8) これらの溝は互いにほぼ平行関係にあり、直線である事や幅等も近似しており、非常によく似た溝である。それぞれの間隔は、北から13m、15m、11mを測る。

溝19、溝22 (付図8) これらの溝は同一かあるいは、別のものでも途中で合流するかで、互いに関連性があると考えられる。

3) 土埴 (付図7・8、第12表)

人為的な作為の認められる窠みである。形状では大きさに較べてやや深く、粘土層を堆積し、遺物が出土する場合が多い。

土埴2 (図版16・65) 全体的には不定形で、肩口からゆるやかに降りる。出土遺物は須恵器杯、製塩土器、甗、骨角器を出土した。下層には粘土層が堆積する。

4) 落込

落込6を例外として、人為的な作為をあまり認めないか、自然の可能性が強い窠みである。大きさに較べて浅いものが多く、粘質土層が砂層を埋土とし、遺物はあまり出土しない。

落込6 (図版16・17・38・39)

この遺構は極めて複雑な構造を示し、落込内に土器溜、土埧等が認められる。掘られた順序は次のとおりである。

- ①Ⅵ-2層に落込6が掘り込まれる。落込6は基本層序Ⅳ-2層の地積層が厚く、Ⅴ層に被われていない地盤のしっかりした箇所を選定している。
- ②落込内に灰黄緑色粘質土が堆積する。
- ③灰黄緑色粘質土層が少し堆積した時点で、落込内に土埧が開削される。
- ④土埧内に加工した木片、土器片、馬の首の骨を埋没過程で廃棄する。
- ⑤土埧内埋没がほぼ経終する時点で土器が廃棄され、土器溜1・2が形成される。
- ⑥この後、落込全体が埋没する。

5) 沼沢地

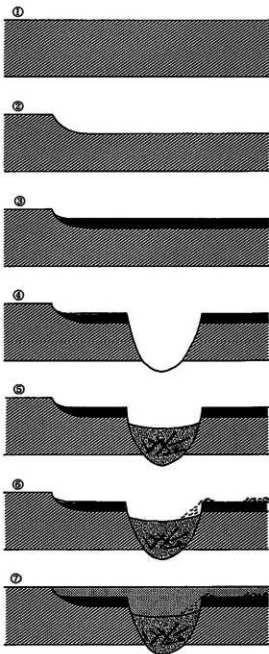
湿地的様相を呈し、かつ幅広く、大きいものである。

A地区沼沢地 (付図7) 古墳時代中期の遺構が全面に展開する北端にあり、深さはさほどなく、ゆるやかに底面に至る。遺物はごくわずかに散見される。

C地区沼沢地 **B地区**南端の河道より南から**D地区**の北端まで広がると考えられる。Ⅵ層堆積時にバックマーシュとして残り、そのまま、Ⅴ層堆積時にも水没した状態であったと考えられる。ごくわずかの遺物が見られる。

6) D・E地区の遺構 (付図9)

当時期の遺構は主にA・B地区に集中するがD・E地区にもわずかにあるが土埧、落込等を検出する。遺物もごく少量出土した。



第10図 古墳時代中期 落込6 模式図

第10表 古墳時代中期 孤立柱建物一覽表

遺跡名	遺跡番号	東西		南北		柱間寸法	建物面積	建物の方向	主軸方位		形状	規模		備考	
		長さ(m)	幅(m)	長さ(m)	幅(m)				長さ(m)	幅(m)		長さ(m)	幅(m)		
4 A	遺跡1	2	5.20	2	4.20	2.60	21.84	ほぼ南北	N-17°-E	南北方向	N-17°-E	0.60-0.84	0.58-0.72	0.07-0.25	周囲に溝3・6・7が認められる。
A	遺跡2	2	3.40	2	3.14	1.70	10.68	東西	N-78°-E	南西方向	N-78°-E	0.70-0.75	0.60-0.65		

第11表 古墳時代中期 溝一覽表

遺跡名	遺跡番号	検出深さ(m)	幅(m)	長さ(m)	深さ(m)	平面形状	断面形状	土質	備考
A	溝1	4.30	0.35		0.03	Y字型		暗灰色砂質土	Y字型に分かれる。
A	溝2	5.00	0.40			直線			
A	溝3	3.30	0.30	0.15		直線	U字型		N-11°-W
A	溝4	4.40	0.25	0.11		直線	U字型	暗灰色粘土層	
A	溝5	5.68	1.00			直線		暗灰色粘土層	N-78°-E
A	溝6	5.40	1.10			直線			N-5°-E
A	溝7	10.7	1.20			直線			N-70°-E
A	溝8	1.40	0.55			直線			N-70°-E
B	溝9	(測)9.75	(測)3.24			直線		暗灰色粘土層、暗灰色粘土層、暗灰色砂質土層	溝7・8は同一の溝と考えられる。
B	溝10	0.54	0.32-0.54	0.12		直線	開口から側面に、断面は曲線。		
B	溝11	1.44	0.38	0.10		直線	U字型		
B	溝12	2.78	0.38	0.17		直線	U字型		
B	溝13	0.90	0.25			直線			溝10・11・12は同一の溝の可能性あり。
B	溝14	(測)10.4	1.20-2.40			少し蛇行			土底面に切られ、南端に溝17に連なる。
B	溝15	3.30	0.20			直線			
B	溝16	1.04		0.10			浅いU字型		溝16の一部分に連なる。
B	溝17		3.00	0.30					溝17と合流する。
B	溝18	18.4	1.32-1.68	0.80					溝11の水が溝18に流入し、溝14・17から流出する。
B	溝19	(測)9.80	5.72-11.00						
B	溝20	(測)9.80	0.50-0.74			直線			
B	溝21	(測)4.80	1.44			直線			2本に枝分かれする。
B	溝22	9.04	2.20			直線			溝20と平行である。
B	溝23	(測)4.20	0.42			直線			
B	溝24	(測)4.80	0.78-0.88			直線			

第11表 古墳時代中期 溝一覽表

溝の番号	溝の長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	平面形状	断面形状	埋土	備考
B 溝25	(測)3.60	(約)0.65	—	直線	N-80°W	暗褐色粘質土層、暗青灰色砂層	
B 溝26	(測)18.5	0.92-1.72	—	直線	N-78°W	灰褐色粘質土層	
B 溝27	5.60	0.64-1.04	0.10				

第12表 古墳時代中期 土坑一覽表

土坑の番号	土坑の長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	平面形状	断面形状	埋土	備考
A 土坑1	(約)1.40	(約)1.20	—	長方形	開口からゆるやかに落ち込む。	暗褐色粘土層	溝5が注ぎ込み、溝込へも進入する。 須原型、杯、割堀土器、甌、香内器
A 土坑2	(測)3.24	(測)3.08	(測)0.6	不定形		灰色粘土、灰褐色シートのフロッグ層	溝8を切る。須原型長頸瓶、須原砂瓶
A 土坑3	1.40	0.88	0.20	A		暗褐色粘土層	須原砂瓶、土師器、杯
A 土坑4	3.04	2.44	0.62	A		灰色粘土	土師砂瓶を少量
B 土坑5	2.10	1.50	0.50	円形	開口は急傾斜で落ち込む深い深溝。	暗褐色粘土、暗灰色砂まじり粘土	土師砂瓶を少量
B 土坑6	1.72	1.82	0.28	楕円形	楕円形の土坑。	暗褐色粘土	溝14を切る。
B 土坑7	0.72	0.70	0.20	長方形			
B 土 8	2.04	1.48	—	長方形			

第13表 古墳時代中期 溝込一覽表

溝込の番号	溝込の長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	平面形状	断面形状	埋土	備考
A 溝込1	1.00	0.60	—	楕円形			
A 溝込2	1.36	1.20	—	不定形			
A 溝込3	1.44	1.24	—	不定形			
A 溝込4	5.60	3.60	—	不定形			
A 溝込5	4.04	2.10	—	不定形			
A 溝込6	—	—	—	不定形			
内側の土層	3.55	1.90	1.50				土師器の1・2、土底をもつ。 一段のクラスを作る。
A 溝込7	18.2	2.34-6.72	0.20-0.30		開口部と中心部との傾斜の部分が均一。	青灰色粘土層、灰色粘土層	溝込10に連なる。須原型、土師砂瓶を抽出する。
A 溝込8	2.60	0.90	0.40			暗褐色粘土層	灰化陶器、須原型、土師砂瓶。
A 溝込9	2.00	1.20	0.20	不定形		暗褐色粘土層、黄褐色粘土層	土師砂瓶を少量抽出する。

第13表 古墳時代中期 塔込一覽表

塔名	座標名	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	平面形	断面形	土	備考(出土遺物等)
B	塔込10	1.90	0.95	0.10	—	—	暗灰色粘土層	土師器、竇口埴器を出土する。
B	塔込11	1.40	1.04	—	いびつな楕円形	—	—	—
B	塔込12	2.30	1.06	—	楕円形	—	—	—
B	塔込13	3.90	1.50	—	不定形	—	—	—
B	塔込14	2.90	1.88	—	不定形	—	—	—
B	塔込15	5.60	2.40	0.15	—	東端が強くゆる。	暗灰茶色中砂層	須恵器、杯舟、土師器を出土する。
B	塔込16	2.60	0.70	0.08	—	—	暗灰色粘土層	土師器、甕を出土する。
B	塔込17	(約)16.0	(約)14.0	0.40-0.60	—	—	—	—
B	塔込18	2.24	1.38	—	楕円形	—	—	—
B	塔込19	2.04	1.40	—	楕円形	—	—	—
B	塔込20	1.84	1.70	—	隅丸方形	—	—	—
B	塔込21	2.66	0.76	—	細長い楕円形	—	—	—
B	塔込22	1.20	0.98	0.28	楕円形	—	—	—
B	塔込23	1.80	1.60	0.12	—	北面はゆるやかである。	—	—
B	塔込24	1.60	0.60	0.14	—	—	暗茶褐色粘質土層	—
B	塔込25	1.44	0.72	—	不定形	—	—	—
B	塔込26	1.08	1.04	—	不定形	—	—	—
C	塔込27	1.90	0.60	—	不定形	—	—	—
C	塔込28	1.40	1.00	—	ハート型	—	—	—
D	塔込29	(測)1.45	(測)0.80	—	半円形	—	—	—
D	塔込30	(測)1.65	(測)1.00	—	不定形	—	—	—
D	塔込31	(測)2.00	(測)1.85	—	隅丸方形	—	—	—
D	塔込32	2.50	2.10	—	—	—	—	—
D	塔込33	(測)3.20	(測)0.75	—	細長い形状	—	—	—

第14表 古墳時代中期 沼沢地一覽表

塔名	座標名	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	平面形	断面形	土	備考(出土遺物等)
A	沼沢地	(測)26.6	(測)21.0	—	—	東西	暗灰色粘土、灰色粘土	土師器、須恵器、高杯
C	沼沢地	—	—	—	不明	不明	C地区全体に広がる。	C地区全体に広がる。

(7) 中・近世、近代の遺構 (付図10)

基本層序Ⅳ層以降が当時期に該当する。この時期で確認し得たものは、井戸、溝、鋤跡、足跡等である。

1) 井戸

6基の井戸を確認し、井戸枠を持つものから、素掘りのものまで認められた。

井戸1 (挿図11、図版40) 2Aトレンチにあり、上部構造が撤去された後埋めもどされ、この下に四角に組んだ木枠を主体とした下部構造だけ遺存していた。上方から見れば、四隅に柱材を立て、これに横梁で連結し、補強する。次に外側材には竹を半裁したものを使用し、外皮を外側に、すき間が生じない様に張りつけている。下部構造の上端面は約1m弱の円孔を作り、板材を張りつけている。井筒内部から井戸瓦を数枚と鉄鎌の刃部を出土した。上部構造は井戸瓦を使用していた可能性がある。下部構造の高さ1.75m、幅1.21mを測る。湧水源はⅢ層中に含まれる地下水である。

井戸2 (挿図11、図版40) 3Aトレンチにあり、上、中、下の3段構造をなす。上段は木板をおけの側板状に組み、外側は竹のたがで締めている。中段は四隅柱と横梁からなる井戸枠に外側板を張りつけ、下段は再び、おけの側板状に組んだものを使用している。中段埋土中から井戸瓦が出土し、このうち一枚には「山本新田」と陽刻されていた。法量は、深さ3.16mを測り、上段径0.75m、中段幅1.35m、下段径0.76mを測る。湧水源は弥生時代前期河道を流れる地下水である。

井戸3 (挿図11、図版41) 2Bトレンチにあり、井戸4が近接している。曲物の大小を上下に使用している。曲物内から瓦器柄を抽出した。上段径43cm、下段径34cmを測る。

井戸4 (挿図11) 曲物の井筒を一段分Ⅳ層の砂層中に置いただけである。径37cmを測る。

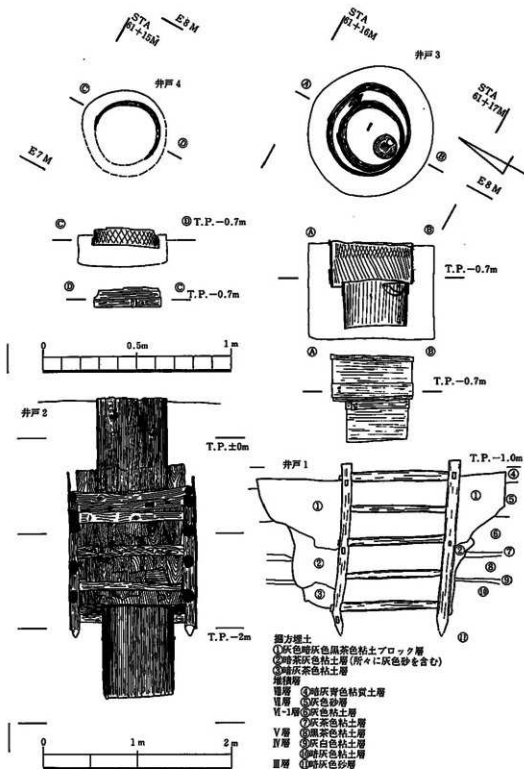
井戸5 (挿図12、図版41) 4Eトレンチで抽出した素掘りの井戸である。壁面には開削時の鋤跡が整然と認められた。深さ2.73m、長径3.18m、短径2.05mの楕円形を呈す。埋土から瓦が出土した。

井戸6 (挿図12) 5Eトレンチにあり、旧地表面から掘り込まれている。上下2段構造をもち、上段は四隅に支柱と横梁を入れ、外側板で囲い、下段はおけ状に板材を丸く組み合わせている。出土遺物はガラスビン等であり、径0.77mを測る。Ⅲ層の地下水を湧水源とする。

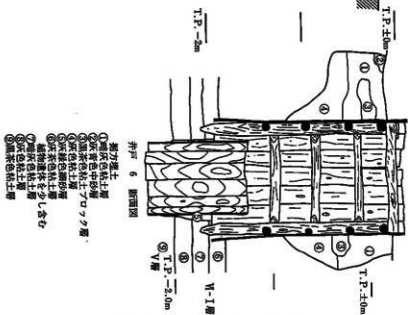
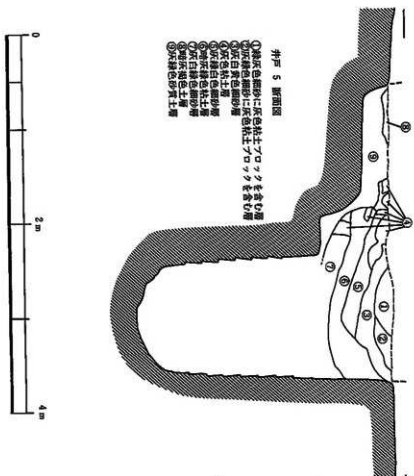
2) 鋤跡

良好な条件下で遺存した遺構と考えられ、A地区の一部のみで検出する。

3Aトレンチの鋤跡 (挿図13、図版42) Ⅳ層を除去した下層のⅣ層上面で認められたもので、Ⅳ層灰黄色砂層上面に暗灰青色粘質土層が三日月形あるいは半円形に埋没し、比較的整然と認められた。三日月形あるいは半円形の埋土を除くと半月形に窪んでおり、Ⅳ-1層あるいはさらに上層で鋤を使用して掘削した時に下端がⅣ層に達する事によって作られたものと思われる。



第11図 中近世 井戸 1・2・3・4 平面図・断面図(井戸 1・2 (1/40) 井戸 3・4 (1/20))



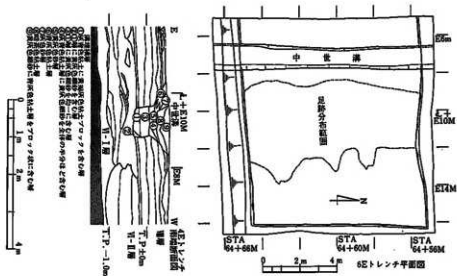
第12図 中津市井戸 5・6 平面図・断面図 (1/40)



第13図 中近世 3Aトレンチ 鋪路平面図 (1/100)

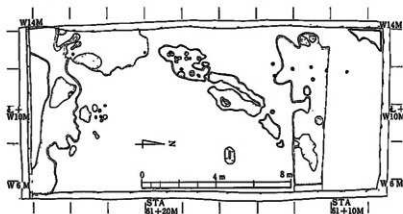
3) 溝

4・6Eトレンチの溝 (挿図14) 覆層上面から切り込む溝を一条認めた。検出したのは4E、6Eトレンチである。上部の幅0.6m、底部幅0.4m、深さ0.8mを測る。この東側からは足跡を検出した。



第14図 中近世 6Eトレンチ 溝平面図 (1/200)・断面図 (1/100)

1 Bトレンチの溝 (挿図15) Ⅳ-4層はBトレンチ北西側に認められ、層中から古墳時代中期の須恵器から瓦器柄の破片まで出土する。この上面に不定形な円弧を描く溝を確認した。深さは浅く、形状も極めて不定形であり、性格は全くわからない。検出長4.4m、幅1.1m、深さ0.1mを測る。



第15図 中近世 1 Bトレンチ 溝平面図 (1/200)

(8) ま と め

1) 縄文時代晩期

Ⅱ-2層より滋賀里Ⅲ期に比定し得る縄文式土器片、約20片を検出した。これらの遺物は流水堆積層中より出土した。土器片は断面も磨耗していない状況で出土した。至近距離からはセタシジミの生息していた層を認めた。

2) 弥生時代前期

遺構は多くなく散在しており、柱列11・柱2・土壇13・落込20を検出した。柱列では主軸方位と同じくする2群が認められるし、土壇、落込は柱列と重複する事はほとんど無い。土壇および落込の総数はさほど多くない。遺構の分布範囲は南北約100mの範囲内にあり、この南端、北端にはそれぞれ河道が存在しており、河道にはさまれ、遺跡は存在しているようである。

3) 弥生時代中期

遺跡は中期初頭まで継続し、その後廃絶する。この後には中期中葉、後葉の遺構、遺物とも全く認められない。

4) 弥生時代後期

遺構に伴わないが、完形品もしくは完形品に近い遺物が、自然堤防内埋土から出土した。このほか自然河道の岸部に流れついた木製品、木器を主にA・E地区から大量に出土した。

5) 古墳時代前期

遺構はほとんど認められず、堰を2基河道底面に設けていたのと、鋤跡を検出した程度である。

6) 古墳時代中期

遺構では集落の一端を示す様な遺構をA・B地区において認めた。主要な遺物は5世紀後半から6世紀初頭に集中するが、一部は6世紀後半のものも認められる。

7) 古墳時代後期

遺構はほとんど認められない。

8) 奈良時代

遺構、遺物ともわずかに検出した。また、奈良時代遺構面の上層覆層堆積層からも若干の遺物を検出した。

9) 平安時代

遺構、遺物とも全く認める事ができない。

10) 鎌倉、室町時代

遺構は水田の畔と足跡、および井戸を検出した。遺物では瓦器、磁器類を出土した。

11) 安土桃山、江戸時代

遺構では井戸を数基検出した。その他、遺物も少量出土している。

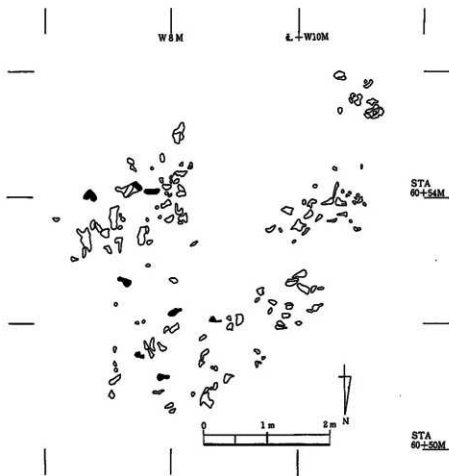
〈補足〉弥生時代前期、4Bトレンチでは遺構を切って筋掘りを入れた図面を描いている。これは筋掘りを入れた時に始めて遺構を検出し、横に拡げ、遺構を調査した為にこの様な図になっている。

第三節 足跡

当遺跡には各時代の足跡の遺存していた例が非常に多い。これらの足跡の持つ意味は次の通りである。①個々の足跡の形状を人類学的に考察する対象として、②足跡群として行動や労働の一端の分析資料として、③足跡の認められる遺構面としてである。このうち、当遺跡の足跡には人類学的考察に耐え得る良好な資料がほとんど認められなかった。それゆえ以下の文章では、遺構面として足跡を主に行動等の資料を一部つけ加える形で報告したい。

〔1〕 弥生時代前期

河道底面の足跡 (挿図16、図版43) 3Aトレンチの屈曲した河道の凸部にあたる河床に認められた。河道底面からさらに足跡部分が窪み、その中に細砂層が堆積する。足跡の原型を保つ痕は無く、すべて崩れており、人および動物のいずれの足跡とも判別し得ない。



第16図 弥生時代前期 3Aトレンチ 河道底面足跡平面図 (1/60)

〔2〕 弥生時代後期（付図6）

足跡はⅤ-1層堆積時に人が活動し、Ⅴ層上面にまで達して形成したものである。分布範囲は主にB地区に限定される。足跡の分布には非常に差が認められ、非常に密集した部分と、ほとんど認められない部分、少し認められる部分に分けられる。一例として1Bトレンチを示す。

1Bトレンチの足跡（挿図17、図版43） 北西部は空白、北東部はまばらに分布し、南半分は密集している。この様な状況が他のBトレンチとも認められた。足跡の数は非常に多く、どの様な行動の結果こうなったかはわからない。（参考、図版45）

〔3〕 古墳時代前期の足跡

Ⅴ-2層堆積終了後、Ⅵ層が堆積する部分に認められる。Aトレンチ南半分、Bトレンチのほぼ全域に認められる。ただこの時代の足跡は、散在している傾向を持つ。

5Bトレンチの足跡（挿図18、図版44） Ⅴ-2層があまり堆積しておらず、地形的に窪み、河道底面に位置する場所に認められる。足跡は散在しており、埋土がシルト層である為、足跡の識別は困難である。この上部にⅥ層を被る。

〔4〕 中近世の足跡

Ⅵ層上部黄色砂層下に、人および牛の足跡が認められた。分布範囲は、Bトレンチを中心に一部Aトレンチ、またEトレンチにも広がる。Bトレンチでは足跡とともに畦畔をも確認した。

4Bトレンチ足跡（挿図19、図版44） トレンチやや中央西側に南北に高まりが認められるものが畦畔であるが、その両側にも足跡が認められる。足跡は人および牛が混在していたが、動作作業等についてはわからない。

〔5〕 足跡の計測表

各時代の足跡を人類学的観点から分析する為、以下計測した資料を提示する。ただ同一の足跡を認定し得る資料が限定されている為、あまり有意性は高くはないと思われる。古墳時代前期の足跡は第15表に、中近世の足跡は第16表に示す。

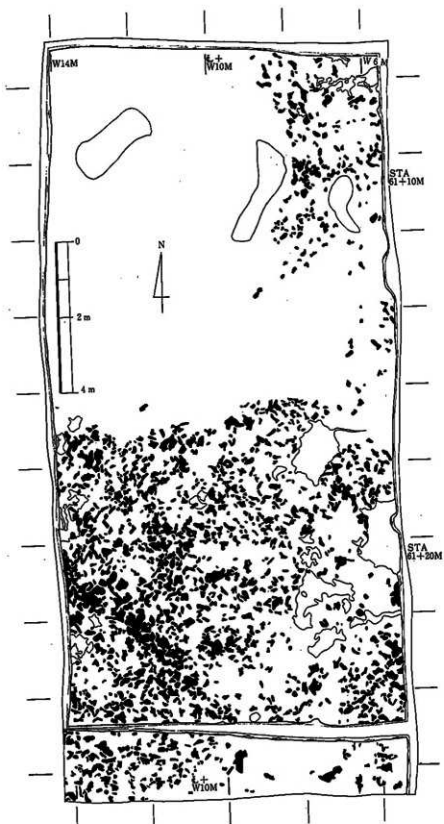
〔6〕 ま と め

弥生時代前期では、河道底面から人および動物とも判断し得ない足跡を検出する。

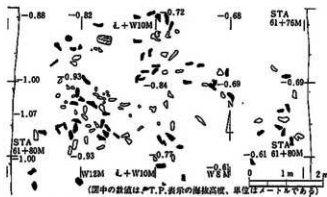
弥生時代後期では、B地区に足跡が集中しており、この中でも非常に分布の差が認められた。

古墳時代前期では、河道底面に散在した足跡を検出した。

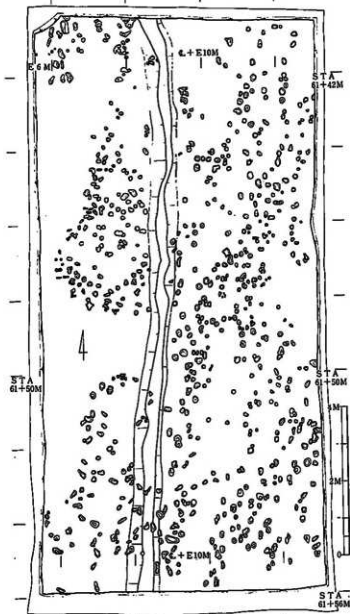
中近世では、洪水の砂層を被った下に人および牛の足跡を検出した。



第17図 弥生時代後期 1Bトレンチ足跡平面図 (1/100)

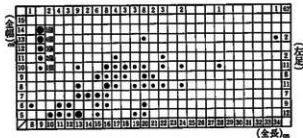
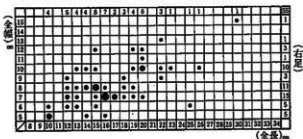


第18図 古墳時代前期 5Bトレンチ足跡平面図 (1/100)

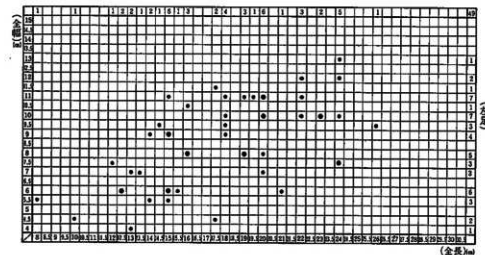
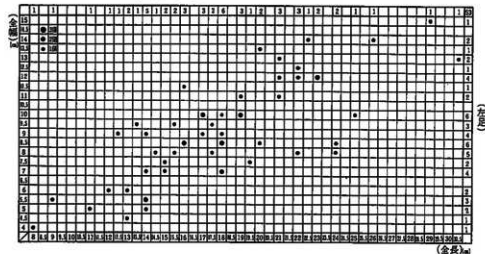


第19図 中近世 4Bトレンチ足跡平面図 (1/100)

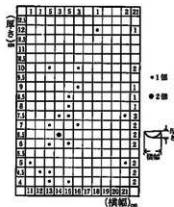
第15表 古墳時代前期 2 B トレンチ足跡計測表



第16表 中近世 4 B トレンチ足跡計測表



第17表 古墳時代前期 4 B トレンチ
簡跡計測表



第四節 陸地化への過程(プロセス)

当遺跡では、これまで述べた遺構や足跡のほかにも、海底から三角州そして湿地、最後に陸化する過程が土層断面から観察し得る。この節では層序をおって河内湾から河内平野の形成に至るまでを概略したい。なお、本文中では各層の基本層序名を使用するが、挿図ではさらに細分化した土層名を使用している。

(1) 縄文時代晩期前後の様相 (挿図3・20・21、図版18)

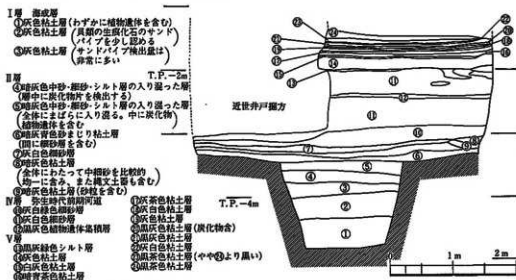
基本層序Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ層に相当するが、この時期に当該地付近の環境も大きく2回の変化が認められる。それは、Ⅰ層上部からⅡ層へと、Ⅱ層からⅢ層にかけてである。

Ⅰ層はエドザクラが生息していたきめ細い灰色粘土の海成層であるが、この層の上部ではサンドパイプが数多く認められるし、層中にも砂粒が増加し、植物遺体も増加する。この層は細分化すれば挿図第2図のごとく3層に分層し得る。

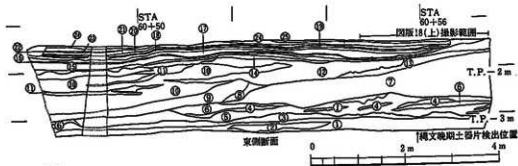
Ⅱ-1層では木の葉、焼けた木の破片等の植物遺体を含むとともに、堆積層自体、暗灰色粘土シルト、中砂の入り混った層に変わる。

Ⅱ-2層では粘土層中に砂層を幾層かに別れて含み、最下端から縄文晩期の土器片を出土した。また隣接したトレンチでは、口を閉じたままのセタシジミの貝殻を多数検出した。貝殻を検出した層は上下2層あり、下層が先に述べたⅡ-2層中、上層はⅢ層中に認められ、貝殻はⅡ層中よりは少ない。

Ⅲ層の灰白色砂層は南からAトレンチ南部付近まで認められるが、Aトレンチの大半の部分では認められない。この場所ではⅡ-2層に直接Ⅳ層が堆積する。Ⅲ層中には植物遺体を多量に含み、漸次粒子が細かくなりつつⅣ層に至る。



第20図 縄文時代晩期以前 3Aトレンチ北壁断面図 (1/60)



- Ⅱ層
- ① 緑灰色砂多じり粘土層(中に細砂層を含む)
 - ② 緑灰色砂層
 - ③ 緑灰色粘土層(全体的に中細砂を含む)
 - ④ 灰黄色中細砂層
 - ⑤ 緑灰色粘土層(中細砂を含む。この層中から縄文土器を出土する)
 - ⑥ 緑灰色粘土層(細砂を層状に含む)
- Ⅲ層
- ⑦ 緑灰色粘土層(均一な土質)
 - ⑧ 緑灰色粘土に少し灰色細砂を含む層(足跡の埋没した断面である)
 - ⑨ 灰白色細砂層
 - ⑩ 灰白色砂層(植物遺体を含む)
 - ⑪ 植物遺体集積層
 - ⑫ 灰白色砂層(植物遺体を多く含む)
 - ⑬ 緑灰色細砂層

- V層
- ⑭ 緑灰色シルト層
 - ⑮ 灰色粘土層(上層、下層に分かれ、下層は色調が薄い)
 - ⑯ 灰白色粘土層
 - ⑰ 緑灰色粘土層(⑯層より少し茶色が薄い)
 - ⑱ 灰黄色粘土層(植物遺体が多い)
 - ⑲ 灰白色粘土層(植物遺体を少し含む)
 - ⑳ 緑灰色粘土層(炭化した植物を多く含む)
 - ㉑ 灰黄色粘土層(炭化より少し茶色が薄い)
 - ㉒ 灰白色粘土層(厚さ5mmほどの粘土層)
 - ㉓ 緑灰色粘土層(水平に層位の区切りが認められる為に別けたもので土質の差はほとんど認められない)
 - ㉔ 緑黄色粘土層
 - ㉕ 緑灰色粘土層(……)間に5mmほどの灰色粘土層は含まない

第21図 縄文時代晩期 3 Aトレンチ東壁断面図 (1/80)

[2] 弥生時代前期 (挿図22、図版18・19)

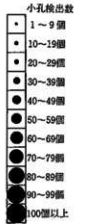
Ⅳ層およびⅣ層上面の遺構の時期に相当する。Ⅳ層は均一な粘土であり、植物遺体もほとんど含まない。Ⅳ層上面に遺構が存在する。弥生時代前期河道が発達し、Aトレンチの北側とBトレンチ南端に認められた。Ⅳ層が堆積終了のちに、弥生時代前期河道が流れ、Ⅳ層を削る。このほかⅣ層上面には小孔がBトレンチを中心に数多く認められた。直径2~4cm、深さ20cm以上あり、途中で折れ曲がり、クロベンケイと呼ばれるカニの巣と思われる。⁽¹⁾このカニの巣孔の分布頻度を挿図22に示す。生息範囲は中等潮位より上である。

[3] 弥生時代中期 (図版19)

ヨシ、アシ等の水生植物が繁り、所々に樹木が生育しているが、半ば水没した遠浅の湿地的様相を示し、V層に相当する。植物遺体層が厚さ0.6m~0.25mまで堆積し、間層には灰色粘土層が1~5mmの厚さをもって、幾枚が入る。この段階ではⅣ層形成時に存在した地表面の凹凸はそのまま残存している。

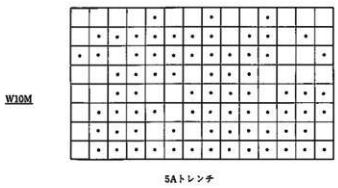
[4] 弥生時代後期 (挿図23、図版19)

V層上面にⅥ-1層灰色粘土層およびⅥ-2層灰緑色シルト層が被る時期である。場所によって堆積状況は異り、Ⅵ-1層は当遺跡全域にわたって堆積するが、Ⅵ-2層は、B地区の一部、D・E・F地区に限って認められる。これはトレンチ内に2本の河道が発達しつつ幾度か氾濫し、土砂を周囲に堆積して形成したらしく、河道から離れた場所では堆積していない。2本の河道はB地区南端D・E地区に認められ(付図4)、V層堆積時に非常に窪んでいた部分に発達している。これらの河道の河岸に相当するよどみの部分から多量の木器を出土している。



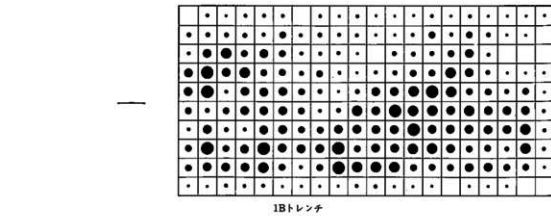
(解説)
この図は、弥生時代前期の遺構面で検出した小孔を1ポに何個検出したかを
黒い丸印の大ききで示し、なおかつ全体的な位置関係の中に、すなわちトレンチ
の存在する位置に距離を合わせて、配列し直してある。
この図を見ると、遺構を検出した場所では集中してあらわれ、遺構を検出しない
所では非常に少ない数しか検出しない事と、この集中した部分が、どうも
ドーナツ状に広がっている様に考えられる点に気付く。

(注1) この図で注意しなければならないのは、2Bトレンチ南半分
4Bトレンチ南端り部である。それぞれ理由があって本来検出されるべきと思われる
小孔数を検出していない。これらの点をよまえて、この分布図を読み取られる事を
希望します。
(注2) また、遺構内において検出した小孔は遺構に伴うものか判断
し難いため、数の中には一切含まない。



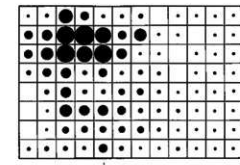
W10M

STA
60+80M

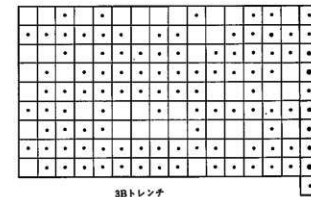


STA
61+50M

E10M

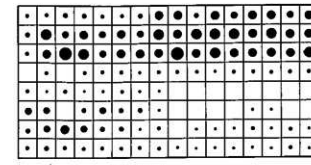


2Bトレンチ

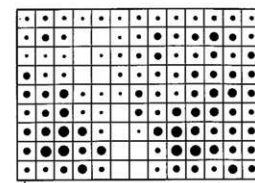


3Bトレンチ

STA
61+50M

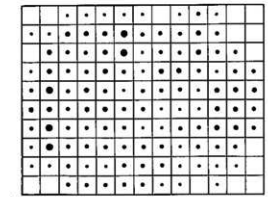


4Bトレンチ

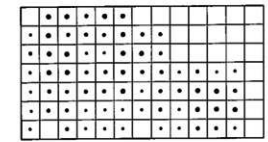


5Bトレンチ

STA
62+00M



7Bトレンチ



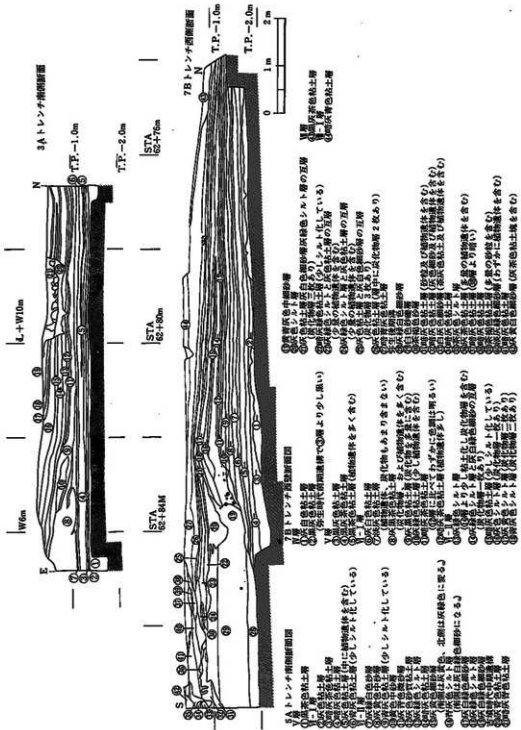
8Bトレンチ

W10M

STA
62+30M

E10M

第22図 弥生時代前期 A・Bトレンチ カニ孔検出数分布図

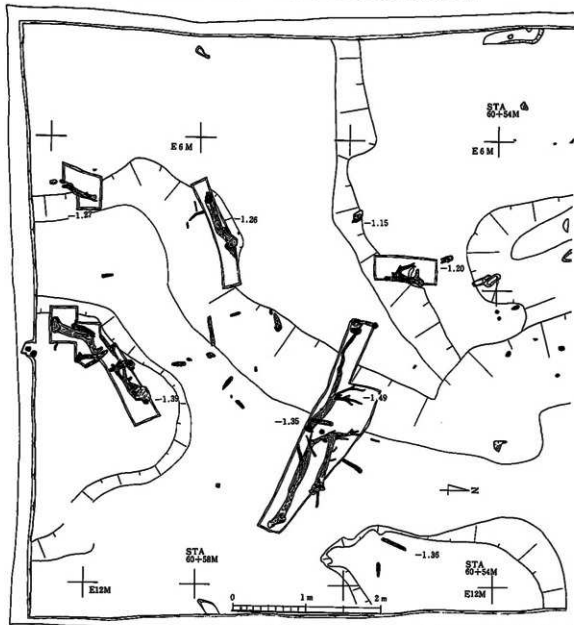


第23図 弥生時代後期 5Aトレンチ・7Bトレンチ断面図 (1/80)

〔5〕古墳時代前期 (挿図24、図版19)

Ⅴ層の堆積していた時期にほぼ相当するが、Ⅴ-2層堆積終了時から、Ⅴ層の堆積開始時まで若干の時間があつたものと思われる。3 Aトレンチで検出した立木がこの経過を示すと思われる。径10cm前後にまで生長した樹木が時間の経過を物語り、この間の人々の痕跡が足跡であり、塚状遺構である。

Ⅴ層自体には幾度かの切り合いがあり、埋没作用のくりかえしで平坦化したものと思われる。この堆積作用の結果、C地区を除く、A～F地区までほぼ平坦化し、陸化した。



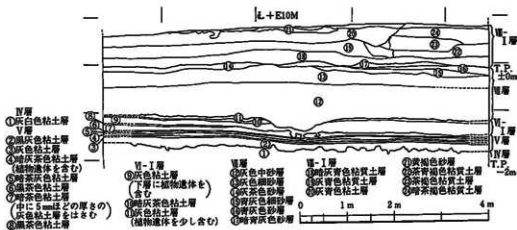
第24図 古墳時代前期 4 Aトレンチ 立木平面図 (1/50)

〔6〕古墳時代中期～奈良時代 (図版19)

これらの時代では新たな堆積は認められず、当時の地表面は依然としてVI-2層とⅤ層であり、この上面に集落等が存在した。

〔7〕平安時代

この時代については、遺構・遺物とも認められず、確かな事はわからない。



第25図 鎌倉時代以前 2Bトレンチ南壁断面図 (1/80)

註1) クロベンケイについては以下の資料を参考とした。なお、資料及び生息地への案内等については、梶山彦太郎氏に大変お世話になった。記して深謝したい。

『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』14号

「クロベンケイ *Sasarma (Holometopus) dehaani* の生態と生痕—生痕の生物学的研究・そのⅩ—」歌代 勲他、生痕研究グループ 1969年

『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』25号

「再びクロベンケイ *Sasarma (Holometopus) dehaani* H. MiLiNE-EDWARDS の生態と生痕について—生痕の生物学的研究・そのXXI—」歌代 勲他、生痕研究グループ 1981年

註2) 河内湖の水位の上昇については、奈良時代から平安時代にかけて郷名が減少する事が例証としてあげられよう。また、史蹟調査委員会報 第二号「河内の古代」喜田貞吉氏の講演中にも同様な観点から語り、結論としては水害の為に人口が減少したのではないかとしている。「人口が2割減少している」ますます水害が多くなって、はては郷の数も、人口の数も、2割あまり減って来る事になったと思われる。平安朝に於て已に然り、夫れから段々年代が経って従って此の傾向は益々ヒドクなった事であろうと思います。」と語っている。

この様な資料からであるが、河内湖の残存部、後の深野池に相当する部分が、再び水位上昇する事を示すと考えたい。

この考えは、大阪府教育委員会、技師、佐久間貴士氏からご教示を得た。

[9] ま と め

1) I層 層中を含む貝類は海水産で海成層と判断し得る。I層上部にはサンドパイプが認められ、一層堆積の終了時にはこれまでに比べると水深は比較的浅くなっていると考えられる。植物遺体の木の葉、木の枝等も増加するがしかし、河口から離れた海中に当該地は存在していた。

2) II層 大きな変化が急激におとずれ、広葉樹の葉、木の枝等を含む流水堆積と、セタジミの生息する堆積層が認められる。II層は三角州の底置層と思われ、河口が近接している事をうかがわせ、水質も淡水化している。水深についてはわからない。

3) III層 B地区中央まで三角州が発達し、B地区北端では三角州前置層を認め、これより北側A地区ではIII層は認められない。水面はIII層の上端付近にあったものと考えられる。

4) IV層 この層はIII層の発達しない所ではII層の上面に直接堆積し、A～F地区全体に均等に存在する。これは再び水位が上昇して、ゆるやかに時間をかけてこの層が堆積したのではないかと考えられる。IV層の堆積が停止した後、一時期さほど長くはない期間であるが、江線が大幅に後退し、弥生時代前期河道の深さ約1.5mが示すよう干潮時には1.5mは下ったと思われる。

5) V層 水位は再び上昇し、植物が繁茂する一面の遺浅で低湿地の様相を示している。ヨシ、アシ、ガマ等の水辺に生育する植物と時にはこの間に樹木も生育していたと考えられる。この時期には河口とその堆積物の影響は全く受けていない。

6) VI層 植物の繁げる地層に河口の方向が当該遺跡に向きを変えたのか、水位が上昇したのかどちらかわからないが、再び堆積層が除々に厚く認められる。この傾向はVI-1層では全域に認められるが、VI-2層では、部分的に厚く堆積する。F・E・D地区はD・E地区の河道によってVI-2層が堆積し、A・B地区では旧河道の周辺にのみVI層が堆積し、残りの地は窪み、全体を総観すれば凹凸の激しい風景が想定される。

7) VII層 VI層の堆積終了からVII層の堆積に至るまでに少し期間があったと考えられ、立木の生長がその期間を示すと考えられる。VI層の堆積しなかった自然堤防の背後の窪地的な所が新たな河道となり、ここにVII層が堆積したと考えられる。ただC地区の窪みのみはVII層が堆積せず、窪んだ低湿地の様相を残している。VII層は幾度かの堆積作用の結果、埋没したのと考えられる。

8) VIII層 3層に細分化し得るが、これ以上は別かれなない。この層の上面には畦および足跡が認められ、洪水による堆積層と思われる砂層が足跡の上に被る。VIII層は、ある時期に河内湖の水位が上昇したか、あるいは別の原因で堆積したと考えられる。

第五節 遺物

遺物としてここに取り扱うのは、土器・石器および木器である。

新家遺跡から出土した遺物は、縄文時代から、近・現代にまでおよぶ。出土した土器は、コンテナ(43.5×33.5×15.0cm)に約50杯分であり、その大半は須恵器が占めている。他には、縄文土器、弥生土器、土師器、陶磁器、瓦器、近世陶磁器等がある。石器には、弥生時代前期の不定形刃器、古墳時代中期の紡錘車、それ以降の砥石等がわずかにある。木器では、弥生時代後期の包含層から大量に農具、容器類等が出土しており、他には、中・近世の曲物等がある。

これらの遺物は、遺跡内よりまんべんなく出土するのではなく、地区によって、また、時代によっても多寡がある。土器は、A・B地区に集中しており、C地区以南では極端に減少する。反面、木器はE地区で大量に出土しており、A地区が次いで多く、他地区は少量である。これらのことは、当遺跡が河内湖に面しており、各時期の汀線と深いつながりをもっているからであろう。

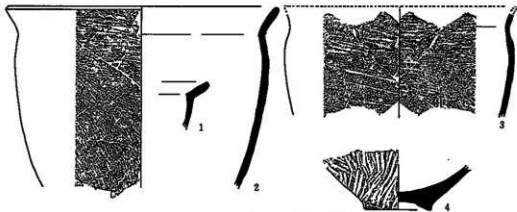
以下、各時期毎に記述してゆく。

1 縄文時代晩期の遺物

縄文時代晩期の遺物は、A地区拡張部の筋掘時に、地表下4.3m(T.P.-3m30)の暗灰色粘土層より、土器片を少量確認、検出した。同一層からは、セタジミ貝が出土している。

土器は、遺構に伴うものではなく、包含層より、第26図に示すような深鉢を検出している。他の器種は出土していない。

(1)は、深鉢の口頸部および体部上端の破片である。口径は、小破片のため不明である。現存高は、5cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は面をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲し、頸部内面に明確な稜をなす。外面の調整は横方向のヘラケズリ状のナアを施し、内面の調整は横方向のヘラミガキ様のナアを施している。外面には、口縁端面を除き煤が付着している。胎土は、0.1~0.3cmの角閃石、石英、金雲母等を多量に含んでいる暗褐色をした生駒西麓産の土器である。(2)は、口頸部および体部上半を残す深鉢である。口頸は28.6cm、腹径は26.8cm、現存高



第26図 縄文時代晩期包含層出土土器

は19.3cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は面をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲し頸部内面に稜をなす。体部は上端にわずかなふくらみもち、裾すばまりになる。外面の調整は、口頸部および体部上端が横方向、以下が斜方向の巻貝調整を施している。内面の調整は、口頸部が横方向、体部が斜方向のナデを施している。口縁部内外面および体部外面にわずかな煤が付着している。胎土は、0.1~0.6cmの角閃石、石英、黒雲母等を多量に含んでいる暗緑褐色をした生駒西麓産の土器である。(3)は、口頸部および体部上半を残し、口縁端部を欠失した深鉢である。現存高は11.0cm、推定口径は24.6cmを測る。頸部は「く」の字形に屈曲し、体部上端がややふくらみをもつ(2)と同様の器形である。体部外面の調整は横方向のヘラケズリを施し、内面の調整は横方向の二枚貝調整を施している。口頸部内外面の調整は、表面が磨滅しているため不明である。外面の体部上端に粘土紐の継目を2本残している。胎土は、0.1~0.6cmの角閃石、石英等を多量に含んでいる茶褐色をした生駒西麓産の土器である。(4)は、深鉢の体部下端および底部破片である。底径は6.9cm、現存高は4.8cmを測る。底部は凹底である。外面の調整は、体部および底側部が二枚貝調整を施し、底部がナデである。内面の調整は、斜方向のヘラ状のナデを施している。底部外面を除き内外面に煤が付着している。胎土は、0.1~0.5cmの角閃石、石英等を多量に含んでいる暗緑褐色をした生駒西麓産の土器である。

他には、深鉢の体部破片と思われるものが5片出土している。そのうちの2片は、淡黄褐色をした土器である。1片は、外面の調整が二枚貝調整か巻貝調整である。もう1片は外面の調整がヘラケズリを施し、内面の調整がナデである。前者は0.1~0.4cmの石英等を多量に含み、後者は0.1cm前後の石英等を多く含んでいる。残りの3片は、暗褐色および暗緑褐色をした生駒西麓産の土器である。内外面の調整が巻貝調整を施すもの、外面の調整が巻貝調整を施し、内面の調整がナデであるもの、外面の調整が二枚貝調整とヘラケズリを施し、内面の調整がナデであるもの等である。

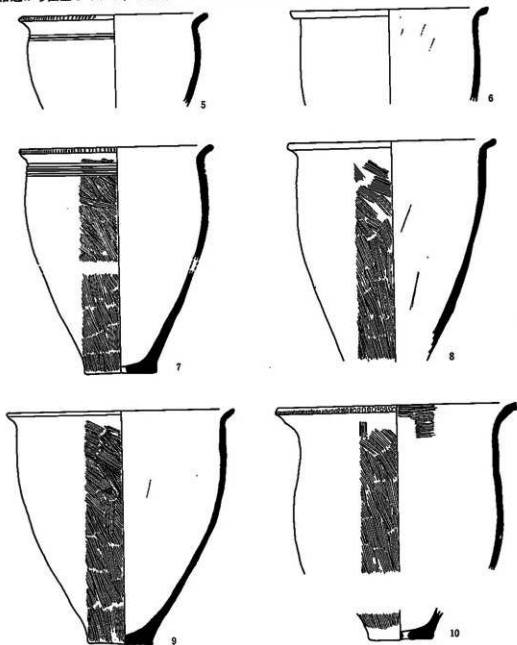
以上の縄文晩期の土器は、形態・技法・調整等から滋賀Ⅲ式に属するものである⁽¹⁾。深鉢のみが出土しており、浅鉢等の別器種は出土しておらず、完形品もない。しかしながら、これらの土器は、ほとんど磨滅しておらず、残りも良いことから、新家遺跡からさほど遠くない周辺の低湿泥地にも、この時期の人々が生活を営んでいた可能性が⁽²⁾あろう。

(注) (1) 泉 拓良、屋根祥多、佐久間貴士各氏の御教示を受けた。

(2) 近年、当大阪文化財センターの発掘で、縄文後、晩期の土器が河内の低湿泥地である、若江北遺跡、山賀遺跡等から少量ではあるが出土している。これらも、遺構に伴って出土するものではないが、居住域が近くにある可能性が考えられる。

2 弥生時代前期の遺物

弥生時代前期の遺物は、B地区の拡張部で確認、検出した³¹。弥生時代前期の遺構面は、T. P. -1.4~1.7mの灰白色粘土層の上面にあり、A地区からC地区にかけては若干の起伏をもつが、D地区以南では、1m以上の比高差をつけて落ち込んでいる。遺構があるのはB地区のみで、柱列、土壇、落込等をわずかに検出している。他地区は無遺構、無遺物である。遺物は、土壇もしくは落込から出土しており、包含層である黒灰色粘土層からも出土している。



第27図 弥生時代前期 土壇1・2(6~10)・落込1(5)出土土器

以下、遺構出土の実測可能な遺物を中心に記述してゆく。

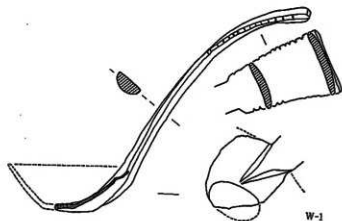
1) 土坑出土遺物

〈土坑1・2〉 1Bトレンチのほぼ中央東側で検出した細長い土坑である。出土遺物は、土器と木器がある。土器には、甕および甕蓋が出土している。

第27図6は、ほぼ完形の甕である。口径20.4cm、腹径19.4cm、底径7.7cm、器高24.0cmを測る。短く外反する口縁部に、ややふくらみをもつ倒錐形の体部をもつ。底部は、わずかに突出する平底である。口縁端部は丸味をもち、刻目を施している。体部外面の調整は、斜および縦方向の刷毛目を施し、体部内面の調整はナデである。体部上端外面に沈線紋を3条描いている。底部には、焼成後に錐で丁寧に内外より穿孔している。内外面ともに煤が付着している。(7、8、9)は、いずれも暗緑褐色もしくは暗褐色をした生駒西麓産の甕である。口径20.9cm、21.8cm、24.0cm、底径6.9cm、器高(現存高)10.0cm、23.2cm、24.8cmを測る。短く外反する口縁部に、倒錐形の体部をなし、底部はわずかに突出する平底である。体部外面の調整は、斜および縦方向の刷毛目を施し、体部内面の調整は、ナデである。いずれも、内外面ともに炭化物および煤が付着している。(10)は、体部下半が欠損した甕である。口径25.2cm、腹径22.2cm、底径11.7cm、現存高19.7cmを測る。短く外反する口縁部に、ややふくらみをもった体部である。底部はわずかに突出する平底である。口頸部外面に粘土紐を1本足すことにより、肥厚させている。口縁端部は面をもち、刻目を施している。口頸部内面には、横方向の粗い刷毛目を施し、体部外面には、斜および縦方向の粗い刷毛目を施している。体部内面の調整は、ナデである。底部内外面の調整はナデを施している。底部には、焼成後に内外面から丁寧に錐で穿孔している。内外面ともに、煤が付着している。この甕は、いわゆる「大和型」の甕で、他地域からの搬入品かと思われる。

木器には、縦形の杓子が1点出土している。身のほぼ $\frac{2}{3}$ が欠損する。柄と身は一木でつくられており、柄は身に対して、ほぼ60度の角度で斜上につくり出されている。身は平面形が円形になると思われ、復元口径は14cm、深さは約5cmを測る。底部は、楕円形をした平底で、薄手につく

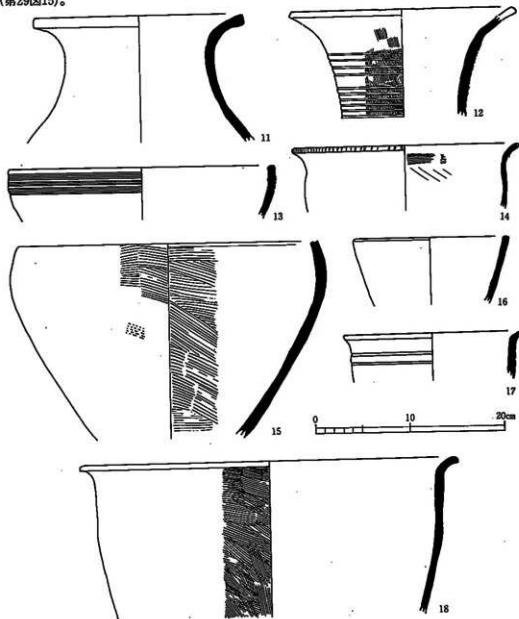
られている。柄は、上面が扁平で、下面が丸味をもち、先端はわずかに外反する。柄の長さは24.5cmを測る。柄の先端約 $\frac{1}{3}$ は段をなし撥形に広がり、器厚は薄くなる。その両側縁に刻目を施している。なお、体部の柄の付根に当たる部分は、凸帯状に削り出され、下端は尖がっている。(第28図W-1)。



第28図 弥生時代前期土坑1・2出土木器(櫛杓子)(1/4)

〈土坑3〉 2Bトレンチの中

央部東端で、約 $\frac{1}{2}$ を確認、検出した土埴である。出土遺物は、やや大形の鉢が1個体のみである。鉢は底部を欠損している。口径31.6cm、腹径37.3cm、現存高25.5cmを測る。内彎ぎみにおわる直口の深鉢で、口径より腹径が大である。口縁部上端は面をなす。外面の調整は、口縁部および体部上半が横方向の粗い刷毛目を施し、体部下半は、斜方向の粗い刷毛目の後、ナアである。内面の調整は、横および斜方向の粗い刷毛目を施している。内外面ともに黑色物質を塗布している(第29図15)。



第29図 弥生時代前期土埴3(15)・土埴5(12・18)・土埴7(16)
・土埴8(11・13・14)・落込16(17)出土土器

(土坑5) 2Bトレンチの南端部で約1/2を確認、検出した土坑である。土器は、壺と甕が出土している。壺は、口縁端部を欠失する口縁部破片である。復元口径は23.6cm、現存高は10.4cmを測る。外反する口縁部に筒状の頸部をもつ。外面の調整は、口縁部が縦方向の刷毛目の後ナデを施し、頸部が縦方向の刷毛目である。内面の調整は、表面磨滅のため不明である。頸部外面に、沈線紋を4条+6条(+)描いている(第29図12)。甕は、口頸部および体部上半を残す大型のものである。口径40.0cm、現存高16.3cmを測る。短く外反する口縁部に裾すばまりの体部をもつ。外面の調整は、横および斜方向の刷毛目を施す。内面の調整はナデである。緑褐色をした生駒西麓産の土器である。内外面ともにわずかな煤が付着している(第29図18)。

(土坑7) 4Bトレンチの南端部で約1/2を確認、検出した土坑である。土器は、体部下半を欠失した鉢が1点のみ出土している。口径16.0cm、現存高7.1cmを測る。体部から外方へ開く直口の小型の鉢である。調整は、内外面ともにナデを施している。暗緑褐色をした生駒西麓産の土器である。内外面ともに煤が付着している(第29図16)。

(土坑8) 4Bトレンチの中央部やや西側で確認、検出した土坑である。土器は、壺、鉢、甕等が出土している。壺は、口頸部を残している。口径19.7cm、現存高13.3cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部は面をなす。頸部は短い筒状である。調整は、外面が表面磨滅のため不明である。内面はナデを施している。暗褐色をした生駒西麓産の土器である(第29図11)。(13)は、直口の鉢で口縁部および体部上半を残している。口径28.0cm、現存高5.6cmを測る。体部上端外面に沈線紋を8条描いている。内外面ともに表面磨滅のため、調整は不明である。(14)は、口頸部および体部上半を残す甕である。口径23.8cm、現存高5.9cmを測る。短く外反する口縁部に、わずかにふくらむ体部をもつ。口縁端部は丸味をもち、刻目を施している。外面の調整は、表面磨滅のため不明、内面の調整はナデである。暗褐色をした生駒西麓産の土器である。内外面ともに煤が付着している。

2) 落込出土遺物

(落込1) 1Bトレンチ北東端で検出したものである。遺物は土器を1片のみ検出している。

(5)は、口頸部および体部上半を残す甕である。短く外反する口縁部に、ややふくらみをもつ体部である。口径19.8cm、現存高9.8cmを測る。口縁端部は面をなし、刻目を施している。内外面の調整はナデである。体部上端外面に沈線紋を2条描いている。内外面ともに煤が付着している。暗緑褐色をした生駒西麓産の土器である。

(落込16) 6Bトレンチの北側を東西に細長い溝状の落込である。甕の小破片が1点のみ出土している。(17)は、口径18.8cm、現存高5.0cmを測る。外反する口縁部に裾すばまりの体部をもつ。内外面の調整は、ナデを施している。体部上端外面に沈線紋を2条描いている。内外面ともに煤が付着している。暗褐色をした生駒西麓産の土器である。

その他の遺構からは、壺、鉢、甕等の小破片が、わずかに出土している。実測困難なものも多く、省略した。



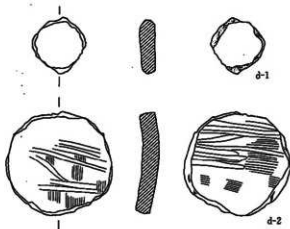
第30図 弥生時代前期包含層出土土器

3) 包含層出土遺物

弥生時代前期の包含層出土の遺物は、土器と石器がある。土器の器種構成は、壺、鉢、壺蓋、甕蓋、甕等である。壺には、口縁部の小破片や、頸部および頸部部の破片が数点出土している。頸部破片には、帯状沈線紋や多条沈線紋のものなどがある。鉢には、やはり多条沈線紋を口縁部に施す直口のもの等がある。(19)は、小形の壺蓋で、天井部が欠失している。口径10.0cm、器高2.7cmを測る。口縁部周縁に2個1組の紐孔が穿たれている。甕蓋も小破片が1片のみ出土している。甕は、以上のものと比して、完形もしくは、大破片で出土するものが多く、いずれも、煤が多く付着していることから、煮沸に使用していたものと思われる。(21)は、小型の甕で体部下半を欠損している。短く外反する口縁部に、ややふくらむ倒錐形の体部をもつ。体部の調整は、外面が横方向の刷毛目、内面が斜方向の刷毛目の後ナデである。(23)は、同じく小型の甕で、体部下半を欠損している。体部の調整は、外面が斜方向の刷毛目、内面が斜方向のナデである。いずれも、暗緑褐色をした生駒西麓産の土器である。(20、22、24~30)は、中型の甕で、無紋のものであり、口縁端部に刻目を施すぐらいである。体部の調整は、外面に斜方向か縦方向の刷毛目を施し、内面がナデである。(24、29)以外は、暗褐色および暗緑褐色をした生駒西麓産の土器である。なお、逆L字形の甕が1点、紀伊産の甕の口縁部破片および底部破片が数点出土している。

以上、遺構および包含層出土の土器は、絶対数が少なく、器種もわずかである。壺、鉢には、無紋のものや帯状沈線紋や多条沈線紋を用いるものがあり、第Ⅰ様式新段階に属するものである。(15)の鉢は、或いは、第Ⅱ様式に入るかもしれない。甕には、体部上端に沈線紋を施すものもあるが、体部がややふくらむものである。無紋の甕が多く、第Ⅰ様式終末期の無紋化側向の強いものであろう。なお、(10)の「大和型」の甕は、第Ⅱ様式から出現する土器である。

〈土製円板〉 いずれも包含層から出土している。壺の再利用用品で周囲を粗く打ち欠いただけである。両者とも、煤が付着している。(1)は、暗褐色をした生駒西麓産のものである。

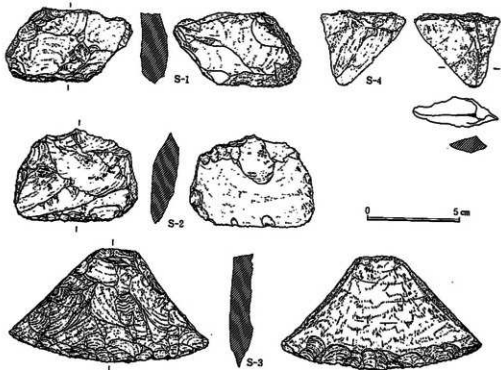


第31図 弥生時代前期包含層出土土製円板

注 (3) 『中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡の調査』1971.4
黒(褐)色有機質粘土層直下の暗灰色粘土層中T.P.-1.25mにおいて弥生前期に属する小型壺形土器1点を検出した。

(石器) 弥生時代前期の包含層から、不定形刃器が4点、剥片が6点出土した。第32図S-1は斜め平行四辺形を呈する刃器で、底辺に当る部分に極度に磨滅した幅3cm程の直線刃をもつ。刃部の先端側の側辺と上辺は、厚さ1.1~1.3cmのサヌカイト原礫面が残り、その表皮の部分は横縞状を呈し、この刃器が横縞に沿って割られていることがよく分る。なお、刃部の裏側にも原礫面が幅4cm、厚さ1cm程残っていることから、この石器の素材は小礫であったこと、刃部は決して鋭い角度を必要としなかったこと等が分る。重さ52.7g。S-2は、白い石英粒を多く含んだ粗悪質漆黒色サヌカイト剥片より作られた幅6cm程の鋭い刃部をもった刃器である。刃部は細かな刺蝟が連続して施され、若干鋸歯状を呈する。又、刃部先端側の側辺には細かな調整が施され、使用の際、指を傷つけないよう配慮されてある。重さ56.5g。S-3は、幅11cm程の外彎する鋭い刃をもったほぼ三角形の刃器である。二側縁はすべて厚さ0.5~1cmの原礫面が残り、指をかけ刃部に力を入れ易いように工夫されている。背面側は三角形の頂点の位置に打点が置かれ、一撃で石塊から剥がされた模様である。刃部はすべて調整によって作り出されたもので、下方から見ると随分ジグザグしている。重さ76.8g。S-4は、逆三角形をした剥片の先端部に極小の刃部を丸く作り出した刃器で、旧石器時代の用語で言うならエンドスクレイパーである。重さ17.1g。

その他の剥片4点は、1.6gから17.9gまでの小さい物で、未製品や剥片等である。



第32図 弥生時代後期包含層出土石器(不定形刃器(1~4))

3 弥生時代後期の遺物

弥生時代後期は、おおよそ2枚の包含層からなり、土器および木器が出土している。下層の灰色粘土は、T.P.-0.6~2.7mにある。A地区からC地区にかけて徐々に高くなり、D地区で極端に低くなり、F地区まではほぼ水平に堆積している。層厚は、0.7~4mを測り、南へ行くにつれて増す。この層の堆積途上および上面に、木器が大量に埋没している。上層の灰緑色シルトは、T.P.0.3~2mにあり、層厚は5~20cmを測る。この層からは、完形に近い土器が主にB地区南端から出土しており、C地区以南では数片を確認、検出しただけである。なお、同層からも木器を1点検出している。

以下、主な遺物について記述してゆく。

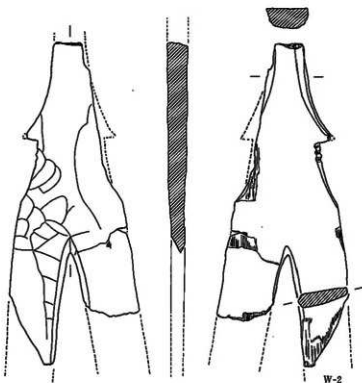
1) 灰色粘土層出土遺物

灰色粘土層からは、木器のみが自然木とともに大量に出土している。特に2Eトレンチ部では、灰色粘土層上面に集中しており、他地域の出土状況とは若干異なるため、別記する。

木器には、農具、漁具、容器類等があり、その他には、板材や木杭、用途不明の木製品等がある。大部分のものが、用途不明の木製品である。

A. 農具

農具には、鋤、広鋸、円鋸、杵が各1点ずつある。

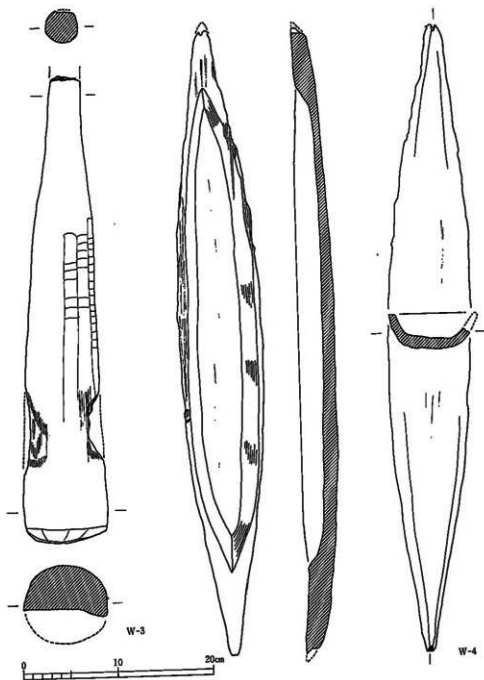


第33図 弥生時代後期包含層（灰色粘土）出土木器

〈鋤〉 頭部と刃先を欠失している。現存長は35.4cm、最大幅は13.8cm、最大厚は2.3cmを測る。平面形は茄子形をし、刃部は二股に分かれている。茄子の蒂にあたる突起直下に、太い紐状（径約5mm）のもので緊縛した痕跡を4条残しているため、着柄式のものと考えられる。上面はわずかなふくらみをもち、刃部へ行くにつれ薄くなる。下面は平坦である。上面の頭部下の側縁に面取りを施してい

る。下面は、粗削りの加工痕を残している（第33図W-2）。

〈広鍔〉 両側縁および頭部を破損している。現存長は23.8cm、現存幅は8.4cm、刃部厚は0.3cmを測る。埋没途中で、何度か乾燥したため、歪曲が著しく、器厚も薄くなっている（第35図W-6）。



第34図 弥生時代後期包舍層（灰色粘土）出土木器

(円鋳) ほぼ完形の未製品である。長径34.5cm、短径30.5cm、器高4.5cmを測る。平面形はやや縦長の楕円形である。前面は、浅く削り込んでいる。後面は、中央部から頭部寄りにゆるやかに隆起しており、周囲を薄く削り出している(第35図W-5)。

(杵) 約1/2を残存している。現存長49.3cm、最大径8.9cm、握部径3.2cmを測る。搦部と握部の境界を明確にせず、搦部から握部へ徐々に細くなる。木取りは、木芯を中心に行っている。側面の一部に、幅約1.6cmの木目と同一方向の加工痕を数本残している。先端は、約1/2が破損しているが使用により磨滅が認められる(第34図W-3)。

B. 漁猟具

漁猟具には、木弓が2点、鞘状木製品が1点、ヤス状木製品が1点、覆状木製品が1点出土している。

(木弓) 2点ともに弓身の中で折損している。現存長は37.2cm、33.3cm、最大径は2.1×1.8cm、1.7cmを測る。第35図W-12は、弓身の断面が楕円形である。弓弦は、頭部がわずかな段をもつてつくりだされ、先端から約1cmの部分に一方から「く」の字形の切り欠きを施している。また、切り欠きの反対側の面に蓋を巻いたような痕跡が約3cm間隔で残っている。第35図W-7は、弓身の断面が多角形をしており、弓弦近くでは蒲葺形である。弓身全体に、幅3～6mmの縦長の加工痕を残している。弓弦は、先端から約1cmの部分に一方から「く」の字形に切り欠きを施している。

(鞘状木製品) 下端部を欠損している。現存長は21.9cm、最大幅は4.5cm、最大厚は2.0cmを測る。先端部は段をなし、断面は蒲葺形である。上面は丸味をもち、下面は先端から1cmほど残して浅く削り込む。下方に1孔を穿っている。同様のものを2枚併せて使用したものであろう。そうすれば、内法が最大厚0.6cmとなる(第35図W-10)。

(ヤス状木製品) 完形品。全長は16.4cm、最大径は0.6cmを測る。途中で折れ曲っている。両端を鋭利に尖がらせ、全長の約1/2のところに最大径をもつため、一方がより細く鋭利につくられている(第35図W-11)。

(覆状木製品) 柄の大部分を欠失している。現存長は29.0cm、身の最大幅は9.6cmを測る。身は平面形が隅丸の長方形をし、柄とはゆるやかにつながる。片面の身から柄へ移行する部分には両側に稜がとる。反対の面は平坦である。厚さは、身の中程で0.6cmを測る。柄は、折損部が炭化しており、折損部において、2.5×1.4cmを測り、扁平である(第35図W-9)。

C. 容器類

容器類には、小型の舟形容器が2点、木槽が1点、脚付盤が3点、大型の容器の蓋が2点出土している。

(舟形容器) 2点ともに完形で出土している。第34図W-4は、全長67.1cm、幅8.9cm、器高3.7cm、底部中央厚1.3cm、深さ2.4cmを測る。平面形は、かなり細長く両端が尖がり中ふくらみの形をしている。底部は、やや丸味をもち、両端は上がりぎみにおわる。上面は、両端を8～9

cmほど水平に残して、内部も舟形に丁寧に削り込んでいる。底部内面もやや丸味をもつ。側縁端部はやや丸味をもっておわる。かなり大きな樹幹を利用し、年輪にほぼ直角に、即ち柁目に木取りをしている。第39図W-19は、全長32.0cm、最大幅10.6cm、器高4.2cmを測る。平面形は細長いやや不定形な楕円形をしている。底部は丸味をおびた平底である。先端部から約5cmを残し、平面形が長方形になるように丁寧に削っている。内面は平坦で深さは3.8cmを測る。

〈木櫃〉 一部分のみ残存する。現存長は62.6cm、現存幅は10.1cm、現存高は9.0cmを測る。底部長は42.5cm、底部の内法長は38.3cmである。底部が柁目の木取りでつくられていることからかなり大きな木から取られたものであろう（第35図W-8）。

〈脚付盤〉 3点出土しているが、いずれも破損品である。第36図W-13は、現存長69.5cm、現存幅13.9cm、現存高4.7cmを測る。一木づくりで、長さ10.6cm、幅3.0cm、高さ1.2cmの逆台形の脚を削り出している。現存するのは二脚であるが、本来は四脚付盤であったと思われる。第37図W-14は、約 $\frac{1}{2}$ が残存している。全長80.2cm、現存幅25.0cm、器高7.9cmを測る。身の平面形は長方形である。先端を約2cmほど残して浅く削っている。身の深さは0.8cmである。底部の厚さは0.9cmを測り、比較的薄くつくられている。脚は、長さ約17cm、幅約2cm、高さ約6cmを測り、身に対してやや外開きに削り出されている。これも現存するのは二脚であるが、本来は四脚付盤であったと思われる。脚には、綾杉紋状の加工痕が残っている。第37図W-15は、一部分を残している。現存長は44.4cm、現存幅は15.4cm、器高は3.2cmを測る。身の平面形は長方形とおもわれる。身は、先端を約2～3cm残して浅く削り込んでいる。身の深さは1.5cmを測る。底部は平底であるが周縁部が丸味をもっている。脚は、長さ11.5cm、幅3.2cm、高さ0.5cmに削り出されている。現存するのは一脚であるが、本来は四脚付盤であったと思われる。この盤は、身の残存部に3ヶ所、下面から穿孔されている。完成時に、何らかの目的で穿ったものか、再利用するために穿ったものかは不明である。

〈蓋〉 2点出土している。いずれも大型の容器の蓋と考えられる。第39図W-18は、約 $\frac{1}{2}$ を残している。現存長は37.2cm、現存幅は19.7cm、器高は6.4cmを測る。平面形は楕円形である。長軸の周縁から約6cmのところに、長軸と直交するように段がつくり出されている。上面には、加工痕が顕著に残っている。周縁上端は稜をなし、丸味をもっておわる。これは、盤の可能性もあるが、盤にすると丸底で安定性が悪いために、ここでは、蓋として取り扱った。第38図W-16は、一部分を欠損している。長径は49.8cm、短径は32.3cm、器高は10.4cmを測る。平面形は、楕円形をしており、断面形は笠形である。中央部が、やや厚味をもち、周縁端部に、幅約8mm、深さ約5mmの溝を一条廻らしている。その溝の内に、身の受部と思われる木片が、長さ約9cmほど残っていた。

D. その他の木製品

その他の木器には、梯子が1点、うちわの柄状木製品が1点、用途不明の木製品が約40点ある。

〈梯子〉 完形品が出土している。高さ83.7cm、幅18.0cm、最大厚7.8cmを測る。足かけ部の上

面はほぼ平坦で約3cmをほぼ垂直に残し、以下を挟んで内彎させている。横断面は、蒲葺形である。足かけ部の上面に、加工痕をわずかに認める。足かけ部は2段あり、その間隔は約30cmである(第40図W-21)。⁽⁵⁾

〈うちわの柄状木製品〉 全長は30.7cmで、両側から挟み、着合の機能をもつ上部と把手の構造をもつ下部にわけることができる。上部の片方が欠損している。上部は、長さ14.2cm、幅3~7cm、厚さ約2cmの板二葉になっており、板状の器物を挟んで着合できるようにくりぬき、その間隙を約5cmにつくっている。先端から約3cmと7cmの所に一対の小孔を穿ち、上部下端の中央部寄りに1個の小孔を穿っている。これらの小孔で、板状の器物を緊縛したものと思われる。なお、板状の外面には、わずかながら朱の痕跡があり、鋭利な刃物で薄く下描き様の線刻がなされている。上部のくりぬきは、内面が炭化しているところから、粗削り後焼き銀を入れたと思われる。柄の先端部中央に径0.7cm、深さ1.0cmの凹みがある。柄のほぼ中心が木芯になる木取りである(第41図W-27)。⁽⁶⁾

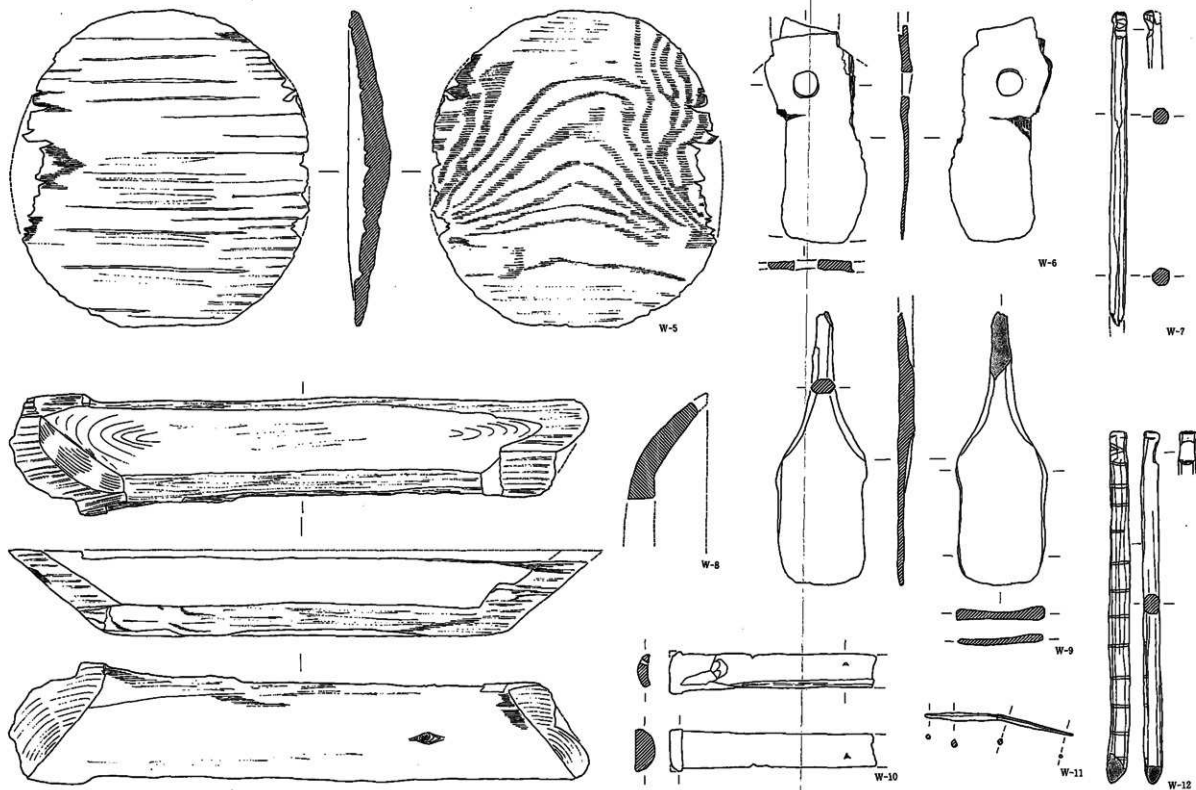
〈用途不明木製品〉 用途不明の木製品の中には、板状のもの、棒状のもの等、種々様々な形態がある。第41図W-29は、断面が楕円形の鼓形の部分と両側の柱状部とからなる。鼓形部は、長さ33.2cm、端部の長径14.9cm、短径11.6cm、中央部の長径7.0cm、短径5.8cmを測る。中央部分約幅8cmをあけて、わずかな段をもち、先端部は約2cmの平坦部をなす。この鼓形の部分全面に朱が施されている。両側の柱状部は、一方が途中で欠損しているが、片方は完形で長さ41.3cmを測る。鼓部の長軸から約60度ふつて、木目に平行もしくは直角につくり出されている。柱状部の断面形は四角形である。柱状部の鼓部から約3cmのところ、鼓部の短軸とほぼ平行に長さ約5cm、幅約2cmの孔が穿たれている。おそらく、別の部材と組み合わせて用いられたものであろう。第41図W-28は、部分的に炭化しているため、元の形は不明であるが、側面と穿孔部に朱が施されている。上述の2点は、用途は不明であるが、朱が施されていることや、形態の特異性等から、祭祀具の可能性が考えられよう。

以下、板状や棒状の木製品のものが多数ある。板状のものには、第42図W-35や第43図W-52のように、補修孔が穿たれ、葺状や木釘様のもので補修したと思われるものがある。多くのものは、柄穴や、突起部を作り出してあり、組み合わせて用いたものであろう。また、第53図W-30、32、33のように、L字型をしくりをもつものや、棒状のもので、第44図W-41~44のように、両端を作り出すもの等、種々多様なものがある。これらのものには、加工痕を残しているものが多く、加工具を考える上でもよい資料である。

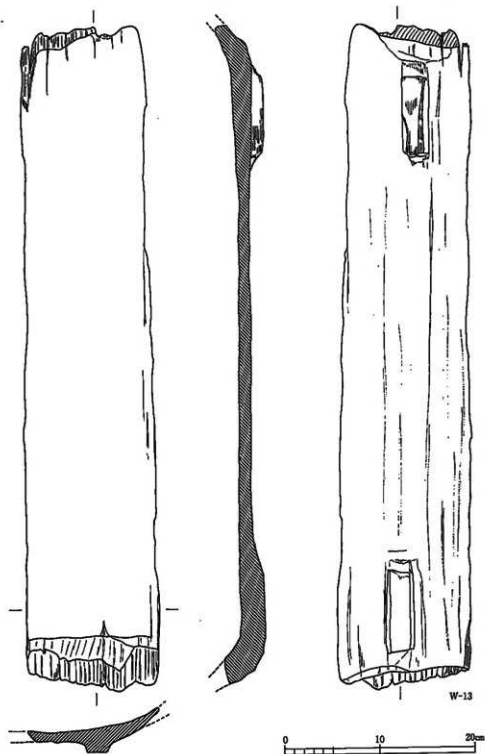
注 (4)近年、当大版文化財センターの発掘で、若江北遺跡・山賀遺跡などからも同様のものが多数出土している。

(5)彦根市小学校の東側で工事中の排土から木製の梯子が出土している。「瓜生堂遺跡」河内市教育委員会 1966。

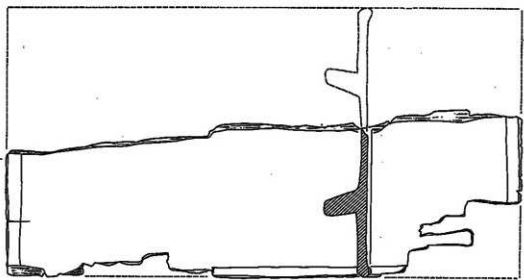
(6)同様のものが出土している。「中央南幹線下水管渠築造工事に伴う遺跡の調査」中央南幹線内遺跡調査会



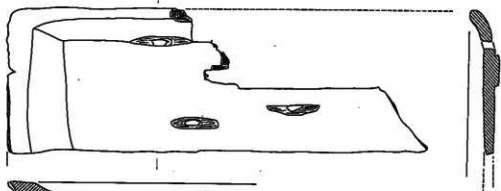
第35图 新石器时代仰光陶器 (灰色粘土) 出土木器



第36図 弥生時代後期包含層（灰色粘土）出土木器

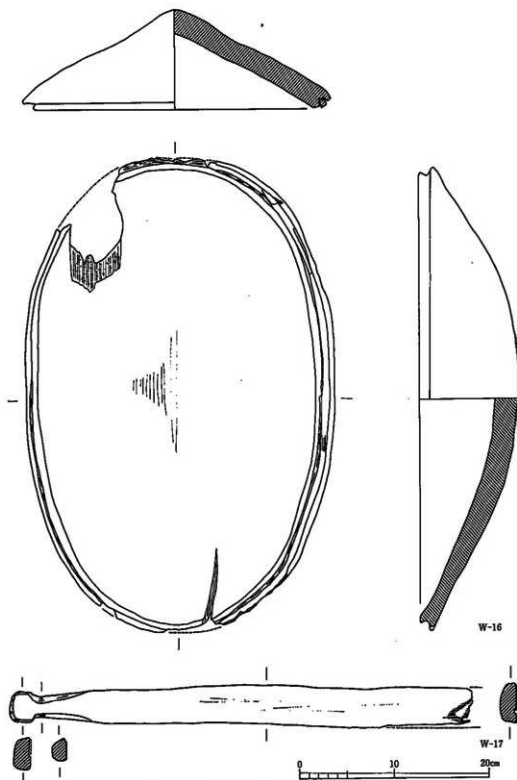


W-14

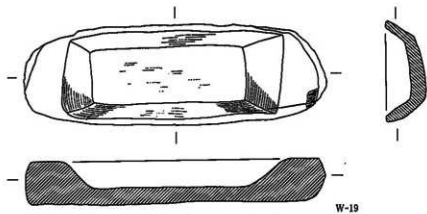
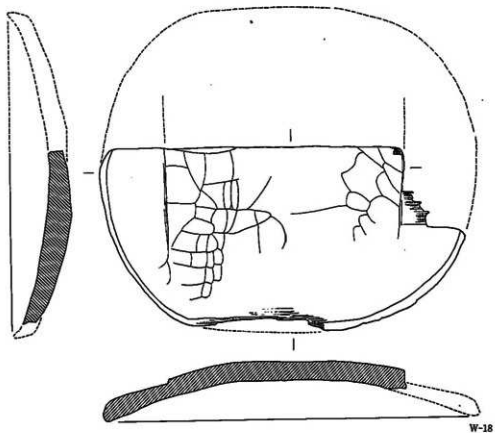


W-15

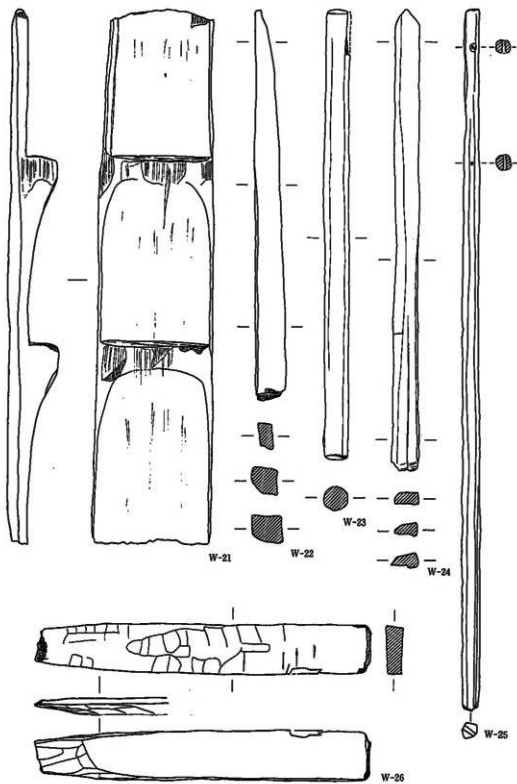
第37圖 弥生時代後期包含層（灰色粘土）出土水器



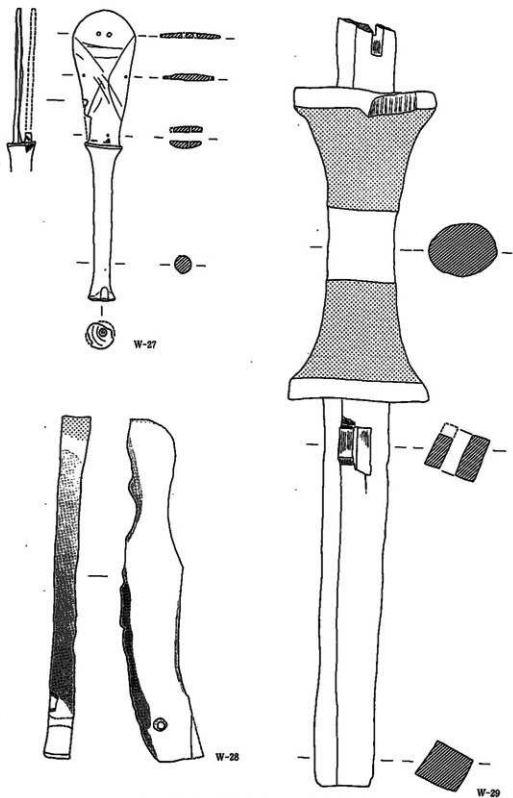
第38図 弥生時代後期舍層（灰色粘土）出土木器



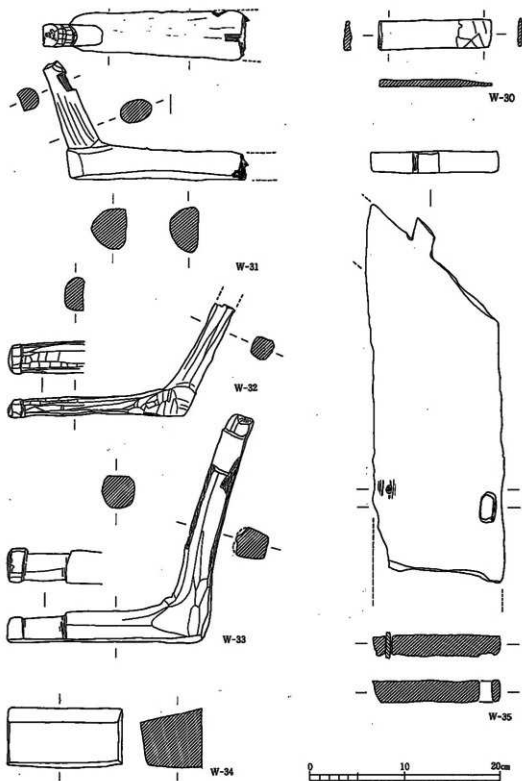
第39圖 弥生時代後期包含層(灰色粘土)出土木器



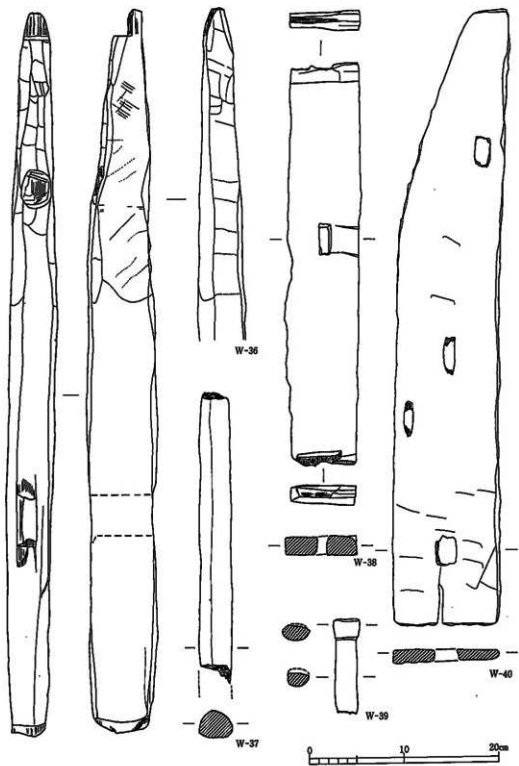
第40図 弥生時代後期包含層（灰色粘土）出土木器



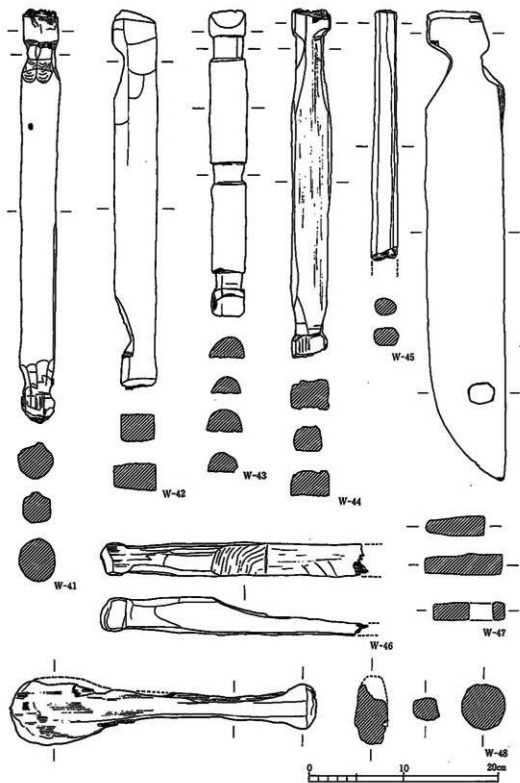
第41图 弥生時代後期包含層（灰色粘土）出土木器



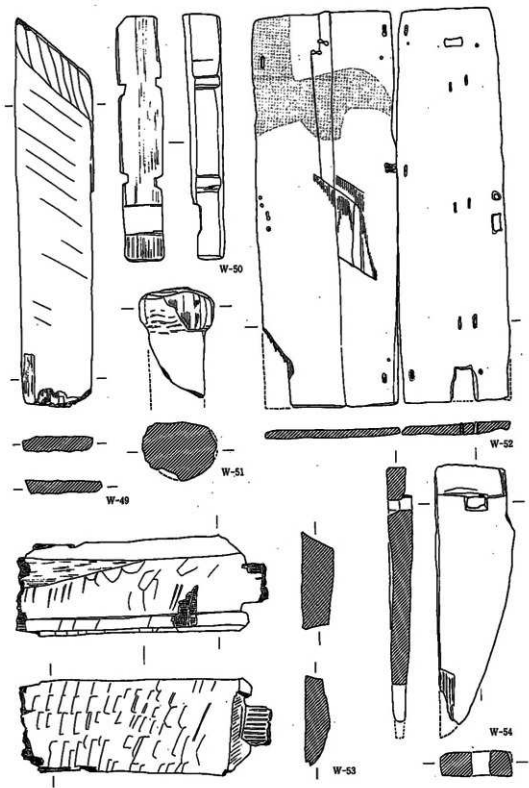
第42図 弥生時代後期包含層（灰色粘土）出土木器



第43図 弥生時代後期包含層（灰色粘土）出土木器



第44图 弥生時代後期包含層（灰色粘土）出土木器



第45图 弥生時代後期包含層（灰色粘土）出土木器

2) 灰色粘土層上面出土遺物

灰色粘土層上面からは、2 Eトレンチ部で大量の木器が集積している。その種類は、農具、漁猟具、容器類等である。その他のものには、琴、梯子、椅子状木製品、枕状木製品、用途不明の木製品等がある。

A. 農具

農具には、杵、臼が各1点ずつ出土している。

〈杵〉 約1/2が残存している。現存長は58.0cm、最大径10.8cm、握部径3.4cmを測る。握部と握部の境界を明確にせず、握部から握部へ徐々に細くなる。握部先端は、使用のためわずかに磨滅している。木取りは、木芯を中心としている。折損後、握部端部を再加工して槌として再利用しているために、握部の一部がわずかに平坦面をつくっている（第50図W-65）。

〈臼〉 ほぼ完形で出土している。口縁部径は58.0cm、くびれ部径は31.2cm、底部径は60.4cm、器高は43.8cm、鉢部の深さは約25cm、底部からくびれ部までの高さは20.5cmを測る。底部は円錐状に上げ底になっており、中央部では約10cmを測る。口縁部と台部の外面端部に約5～6cmの面取りが施されている。鉢部は腐蝕が著しく、特に、内面は加工面を全く残していない。中央部は腐蝕のため欠落してしまっている。全体形は鼓形をしているが、口縁部径や底部径が器高に比して大きく、横長な器形である。一木から削り出してつくられ、木芯を中心としている。材は、クスノキを用いている（第49図W-61）。

B. 漁撈具

漁撈具には、舟が1点のみ出土している。舳先もしくは艫の先端部を残している。現存長は54.1cm、最大幅は20.5cm、現存高は10.2cmを測る。先端は、わずかに丸味をもつ。先端から約8cmを残し深く削り込んでいるが、中心線が片側に寄っているために左右対称とはならない。大型の舟形容器の可能性も考えられる（第50図W-64）。

C. 容器類

容器類には、木槽と盤が各々1点ずつ出土している。

〈木槽〉 約1/2が残存している。全長は71.2cm、最大幅は14.7cm、器高は7.2cmを測る。一木づくりで、先端を約5cm残し、逆台形状に丁寧に削り込んでいる。底部内面長は50.1cm、深さは約6cmを測る。底部を木芯に向けた木取りをおこなっている。底部端に加工痕を残している（第47図W-56）。

〈盤〉 縦位の一部分のみを残存している。現存高は90.8cm、最大幅は5.5cm、器高は3.5cmを測る。全体形は不明であるが、浅くゆるやかに削り込んでいる。身の深さは1.4cmを測る。脚の有無も不明である（第54図W-82）。

D. その他の木製品

その他の木製品には、楽器としての琴、梯子、椅子状木製品、枕状木製品、用途不明の木製品等がある。

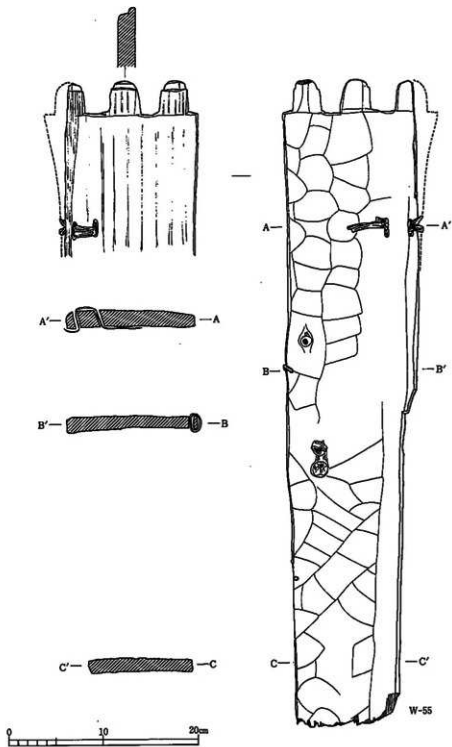
〔琴〕 槽作りの琴で、槽を欠失し琴面のみをとどめる。琴面は、頭部が欠損している。現存長は68.4cm、現存幅は14.1cm、最大厚は1.8cmを測る。琴面の側縁は、一階にひろげ、尾部を最も広く厚くつくり、頭部へゆくにつれて狭く薄くつくれる。面は直平に仕上げられている。尾部の突起は3本残っており、先端は円味をもち、裏面の先端から約1cmのところ段をつくり、先端部を0.7cmの厚さに削り出している。尾部の突起は5本であれば幅約27cm、6本であれば幅約32cm程になる。突起は同様の大きさのものが並ぶと思われる。一度破損したものを補修したものか、径4mm程の小孔が3ヶ所あり、その内の1つには、萁が残っている。琴面の表面は、保存状態が悪く、突起を作り出すための細い刃傷を残す程度である。琴面の裏面は、保存状態も良く加工痕を残している。尾部の側縁に2個1対の小孔を穿ち、その小孔には萁が残っていることから、磯板にかけられた同様な孔を通じ、琴面と槽を結縛していたと思われる。なお、側縁にそうように槽の痕跡が認められるが、小口板の痕跡は認められない(第46図W-55)。

〔梯子〕 ほぼ完形に近いものがある。高さは97.2cm、幅25.8cm、最大厚6.2cmを測る。足かけ部の上面はほぼ平坦で、約5cm程を垂直に残し、以下を抉ってつくり出している。横断面形は蒲鉾形である。板部の厚さは、下方が厚く(2.6cm)、上方が薄く(1.7cm)つくり出されている。足かけ部は2段あり、その間隔は約34cmを測る(第51図W-67)。

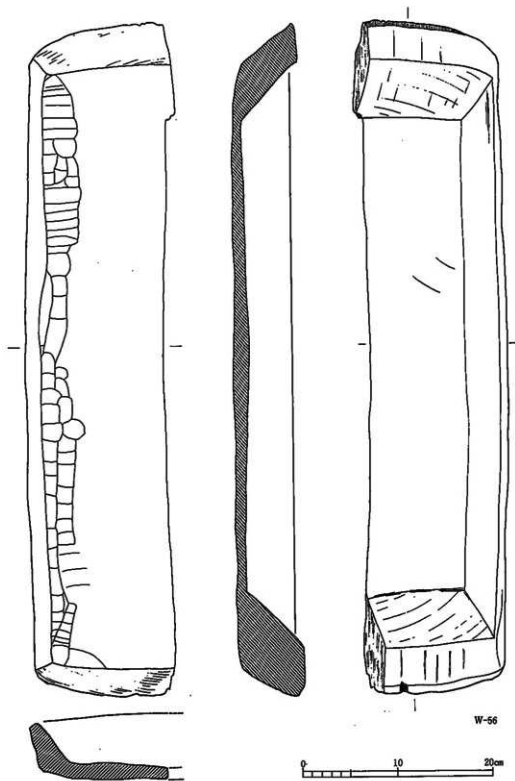
〔椅子状木製品〕 2点出土している。第48図W-57は、約 $\frac{1}{2}$ を残している。全長53.8cm、現存幅10.4cm、最大厚3.8cmを測る。平面形は長方形をしており、上面は平坦で、下面は側縁部をやや薄く仕上げている。先端から約4cmのところに、幅約3cmの長方形の孔を1対穿っている。第48図W-58は、全長63.4cm、最大幅21.5cm、厚さ4.1cmを測る。上下面ともに平坦で、上面周縁は面取りを施している。両端は幅14cmと狭くなり、中央部が幅広く円味をもつ。先端から約6cmのところに、長さ4cm、幅3cmの孔を1対穿っている。いずれも、孔に脚部を挿入し、椅子として使用したものか、別の用途に使用したものかは不明である。

〔杖状木製品〕 2点出土している。いずれも芯材を用いている。第51図W-68は、全長106.0cm、径5.4×5.0cmを測る。頭部は丸く加工し、頭部から約5cmのところに、深さ3cmの袢りを入れている。先端は、五角形に細く削られている。地面に打ち込んで、袢り部に横材を組み合わせて使用したと思われる。第51図W-69は、全長45.6cm、径4.2cmを測る。頭部は粗く削り落としている。先端は、相対する2方から削り出している。先端部には打撃痕が残っているが、頭部にはない。杖として用いられたものかは不明である。

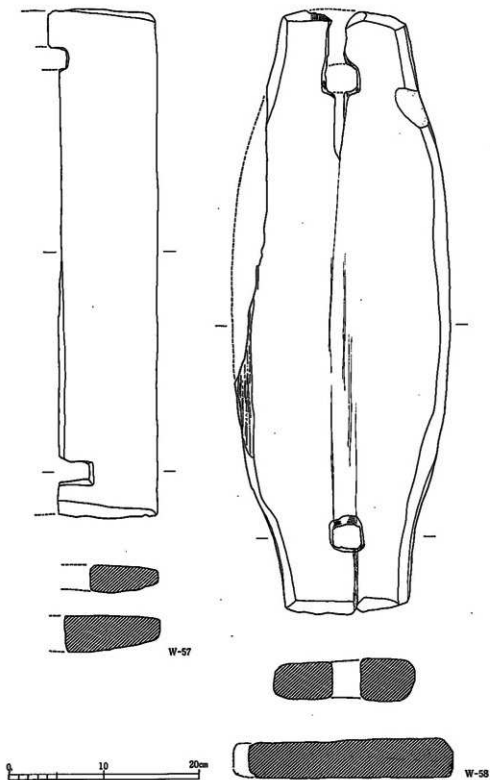
以下、板状のものや、棒状のもの等の用途不明の木製品がある。板状のものには、小孔を穿ったものが多く、第53図W-79のように小孔に釘を残しているものがある。いずれも、建築部材に使用したものか、別の用途があるものか不明のものである。なお、これらの灰色粘土層上面から出土した木器類は、粘土面に密着していた部分は、保存状態が良く、上層の灰緑色シルトに密着していた部分は、保存状態が悪いものである。



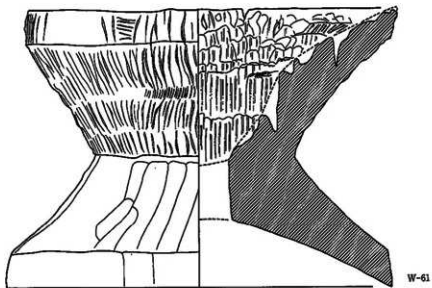
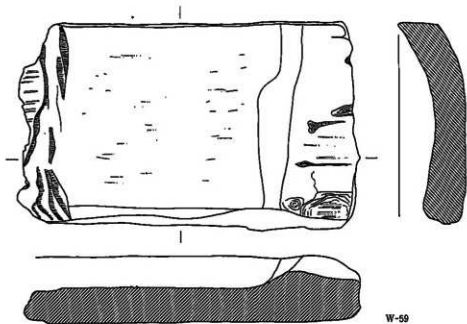
第46図 弥生時代後期包含層（灰色粘土上面）出土木器



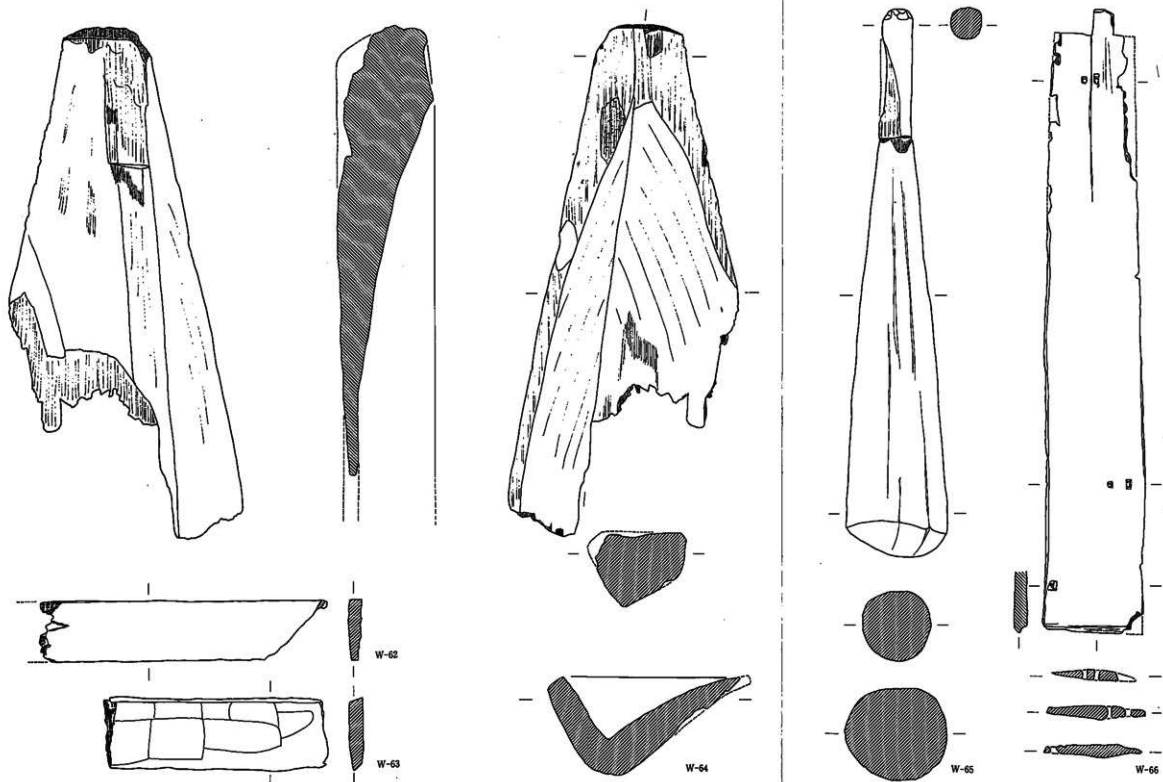
第47图 弥生时代後期包含層(灰色粘土上面)出土木器



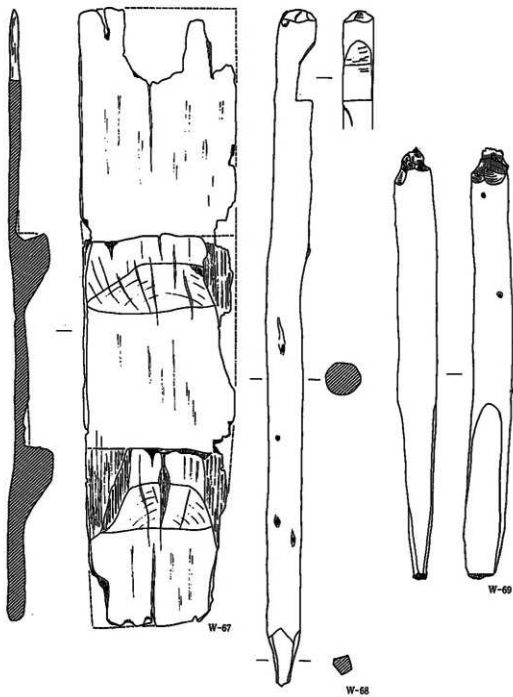
第48図 弥生時代後期包舎層 (灰色粘土上面) 出土木器



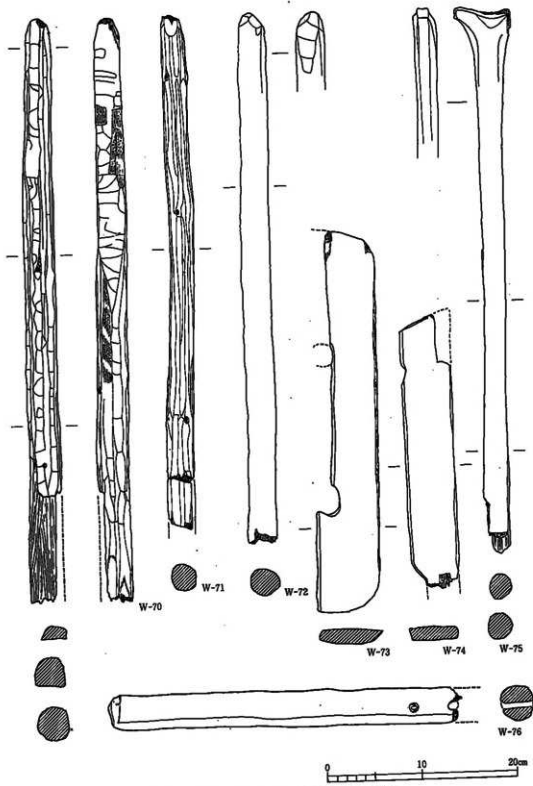
第49圖 弥生時代後期包含層（灰色粘土上面）出土木器



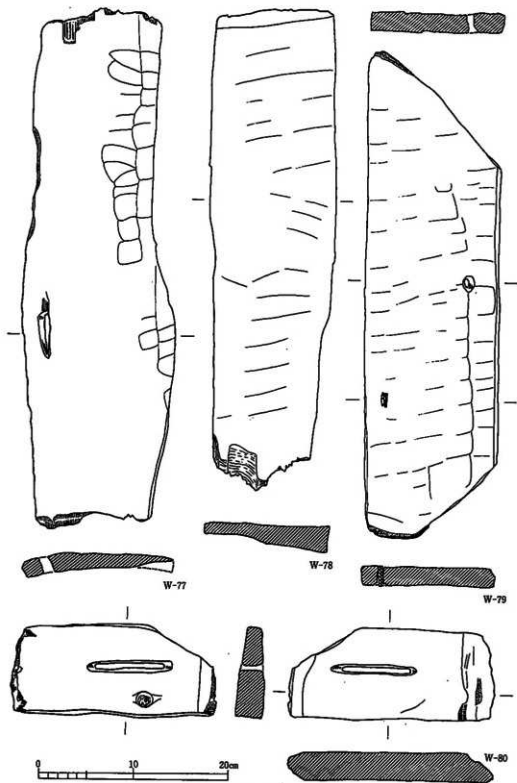
第50図 弥生時代後期包含層（灰色粘土上面）出土木器



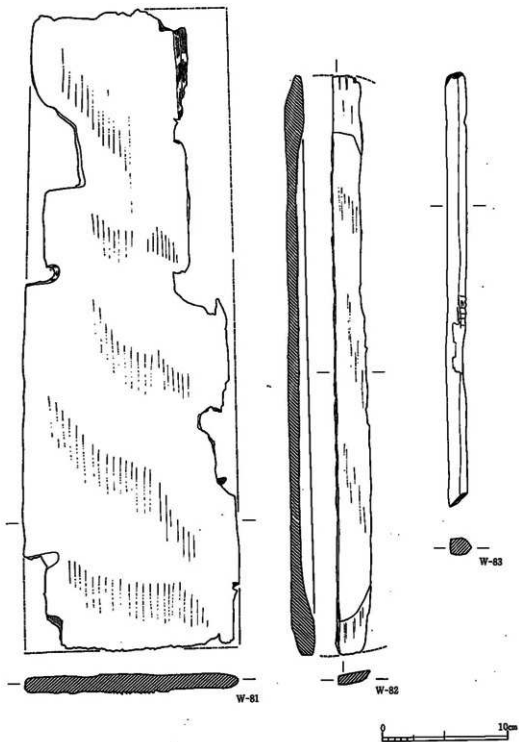
第51図 弥生時代後期包含層（灰色粘土上面）出土木器



第52图 弥生時代後期包含層(灰色粘土上面)出土木器



第53図 弥生時代後期包含層出土木器



第54圖 弥生時代後期包含層（灰色粘土上面）出土木器

3) 灰緑色シルト層出土遺物

灰緑色シルト層から出土した遺物は、土器および木器である。土器は、B地区南端から一括して出土しており、完形品が主にある。他には、A地区で数個体を確認、検出している。木器は、E地区から1点のみ出土している。

A. 土器

出土した土器の器種は、壺、鉢、高杯、甕が全体の過半数を占める。

壺には、広口壺(第55図31、32)と細頸壺(33)がある。(31)は、口頸部破片である。口径12.0cm、現存高6.2cmを測る。体部から屈曲して立ち上がる頸部に、わずかに外反する口縁部をなす。(32)は、同じく口頸部破片で、口径12.7cm、現存高12.2cmを測る。口縁部は短く外反し口縁端部は面をなす。頸部は短い筒状である。口縁部端面に、凹線紋状の沈線紋を2条施している。(33)も、口頸部破片で、口径7.9cm、現存高12.2cmを測る。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は尖りぎみにおわる。頸部は長い筒状である。外面は丁寧に縦方向のヘラミガキを施し、内面には紋目を残している。いずれも、暗褐色をした生駒西麓産の土器である。(39、40)は、口縁部を欠失した壺である。腹径は23.9cm・33.0cm、底径は9.8cm・9.6cm、現存高は20.6cm・33.8cmを測る。(39)は、体部外面を丁寧にヘラミガキ調整を施しているが、体部下半に叩目をわずかに残す。(40)も、体部外面の調整は、ヘラミガキである。(39)は淡黄褐色の土器で、(40)は、茶褐色をした生駒西麓の土器である。

鉢には、小型のものが2点ある。(37)は完形品で、口径14.6cm、底径4.6cm、器高7.2cmを測る。口縁部は体部から斜外方へ直線的に開き、口縁端部は尖りぎみにおわる。底部は突出し上げ底である。内外面の調整はナデを施している。(38)も完形品で、口径12.3cm、底径3.7cm、器高7.4cmを測る。口縁部は体部から内彎ぎみに伸び、口縁端部は丸味をもつ。底部はわずかに突出し平底である。内外面の調整はナデを施している。暗褐色をした生駒西麓産の土器である。

高杯には、杯部が屈曲し外反する口縁部をもつものが3点ある。(34)は、完形品である。口径22.0cm、底端径12.5cm、器高14.2cmを測る。杯部は、斜上方に伸び、屈曲してさらに外反する。口縁端部は面をもつ。杯部外面の屈曲部は明確な稜をなす。脚柱部はわずかに裾広がりになり、屈曲して、脚台部へと続く。脚台端部は、面をもち、下方へわずかに垂下する。杯部内面の調整は、縦方向のヘラミガキを施している。外面全体および、脚台部内面はナデ調整である。脚柱部内面に紋目痕を残している。脚台部に円孔を4ヶ所に穿っている。(35)は、脚台端部を欠失している。口径20.8cm、現存高13.8cmを測る。杯部は、内彎ぎみに斜上方に伸び、屈曲してさらに外反する。口縁端部は丸味をもつ。杯部外面の屈曲部は稜をなす。脚柱部はわずかに裾広がりになる。杯部内外面の調整は、縦方向のヘラミガキを施し、脚部外面も縦方向のヘラミガキ、内面はナデである。脚台部に透孔が数ヶ所に穿たれている。(36)も、脚台端部を欠失している。口径21.5cm、現存高12.6cmを測る。杯部は、内彎ぎみに斜上方に伸び、屈曲してさらに外反する。口縁端部は、上方へわずかに立ち上がり面をなす。脚柱部は、棒状で屈曲して脚台部へ続く。口

縁部内面の調整は斜方向、杯部内面は縦方向のヘラミガキを施している。外面の調整は杯部および脚部ともに、縦方向のヘラミガキである。

壺には、小型のもの(44~48)と、中型のもの(41~43、49~55)がある。(44)は完形品である。口径14.5cm、腹径12.9cm、底径4.7cm、器高13.6cmを測る。口縁部は短く外反し、体部はややふくらみをもつ。底部は突出し平底である。口径が腹径より大である。体部外面の調整は、上半がナデ、下半が叩目の後ナデを施している。体部内面の調整は、上半が横方向、下半が縦方向の刷毛目である。(45)は、体部下半を欠失している。口径15.2cm、腹径13.7cm、現存高10.6cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は面をなす。体部はややふくらみをもつ。口径が腹径より大である。体部外面の調整は、叩目の後ナデを施している。体部内面の調整はナデである。

(46)は完形品である。口径13.0cm、腹径14.2cm、底径4.2cm、器高13.0cmを測る。口縁部は短く外反し、体部は球形に近い。底部はわずかに突出し上げ底である。体部外面の調整は、上半が左下がりの叩目、下半が左下がりの叩目後右下がりの叩目を施している。体部内面の調整はナデである。(47)は完形品である。口径16.3cm、腹径14.9cm、底径4.2cm、器高12.4cmを測る。口縁部は短く外反し、体部はわずかなふくらみをもつ。底部は突出し平底である。体部外面の調整は、上半が叩目、下半が叩目後ナデを施している。体部内面の調整はナデである。(48)は完形品である。口径13.6cm、腹径13.8cm、底径3.6cm、器高15.5cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は面をもつ。体部はわずかなふくらみをもつ。底部はわずかに突出し、中央部がやや凹んでいる。体部外面の調整は、上半が叩目、下半が叩目後ナデを施している。体部内面の調整は、上半が斜方向の刷毛目、下半がナデである。暗緑褐色をした生駒西麓産の土器である。

(41)は、口頸部および体部上半の破片である。口径16.9cm、現存高8.8cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は面をなす。体部はややふくらみをもつ。体部外面の調整は叩目、内面はナデを施している。暗緑褐色をした生駒西麓産の土器である。(42)は完形品である。口径18.3cm、腹径20.4cm、底径4.5cm、器高23.2cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は面をなす。体部はややふくらみをもつ。底部は突出し平底である。体部外面の調整は、上半が叩目、下半が叩目後ナデを施している。体部内面の調整は、斜方向の刷毛目である。(43)は、体部下半を欠失している。口径15.7cm、腹径20.7cm、現存高17.9cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部はわずかに立ち上がる。体部は球形に近い。体部外面の調整は、叩目を施している。体部内面の調整は、上端が縦方向の指ナデ、以下が斜方向の刷毛目である。(49)は、体部下半を欠失している。口径15.7cm、腹径18.8cm、現存高16.0cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は面をなす。体部はふくらみをもつ。体部外面の調整は叩目、内面はナデである。(50)は完形品である。口径12.9cm、腹径15.9cm、底径4.3cm、器高19.6cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は丸味をもつ。体部はややふくらみ、突出した底部に続く。体部外面の調整は、叩目を施している。体部内面の調整は、上半が斜方向の刷毛目、下半がナデである。(51)は完形品である。口径14.5cm、腹径16.6cm、底径3.6cm、器高19.8cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は丸味をもつ。

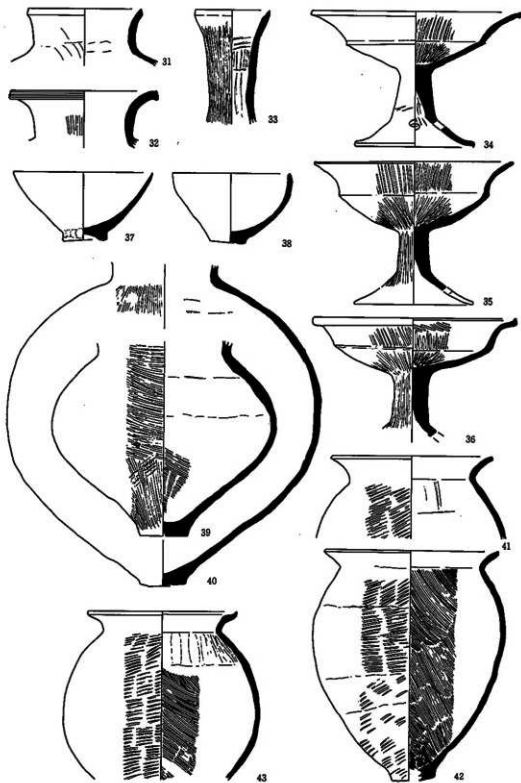
体部はややふくらみをもつ。底部はやや突出しわずかな上げ底である。体部外面の調整は、叩目を施している。体部内面の調整は、上半がナデ、下半が縦方向の刷毛目である。体部内面下半に、炭化物が付着している。(52)は完形品である。口径14.7cm、腹径18.0cm、底径4.0cm、器高21.2cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は面をなす。体部はふくらみをもつ。底部はやや突出し、中央部がわずかに凹む。体部外面の調整は、叩目を施している。体部内面の調整は、上半がナデ、下半が炭化物付着が著しいために調整は不明である。茶褐色をした生駒西麓産の土器である。(53)は完形品である。口径13.2cm、腹径15.3cm、底径3.7cm、器高20.3cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は丸味をもつ。体部はわずかにふくらみをもつ。底部はやや突出し、中央部がわずかに凹む。体部外面の調整は、叩目を施している。体部内面の調整は、表面磨滅のため不明である。(54)は完形品である。口径14.3cm、腹径16.4cm、底径3.6cm、器高20.8cmを測る。口縁部は短く外反し、部分的に肥厚している。口縁端部は丸味をもつ。体部は卵形にふくらむ。底部はやや突出し、中央部がわずかに凹む。体部外面の調整は、叩目を施し、内面は表面磨滅のため不明である。(55)は、完形品である。口径13.9cm、腹径17.3cm、底径4.0cm、器高22.3cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は尖り気味におわる。頸部内面に稜をなす。体部は卵形にふくらむ。底部は突出し平底である。体部外面の調整は、叩目を施している。体部内面の調整は、表面磨滅のため不明である。

以上の土器は、形態・技法等から、弥生時代後期後半に属するものである。なお、個体数は、そう多くはないが、完形品が多く出土することや、土器の磨滅がそれほどないこと等を考えあわせれば、そう遠くないところで、この時代の人々が生活を営んでいた可能性がある。

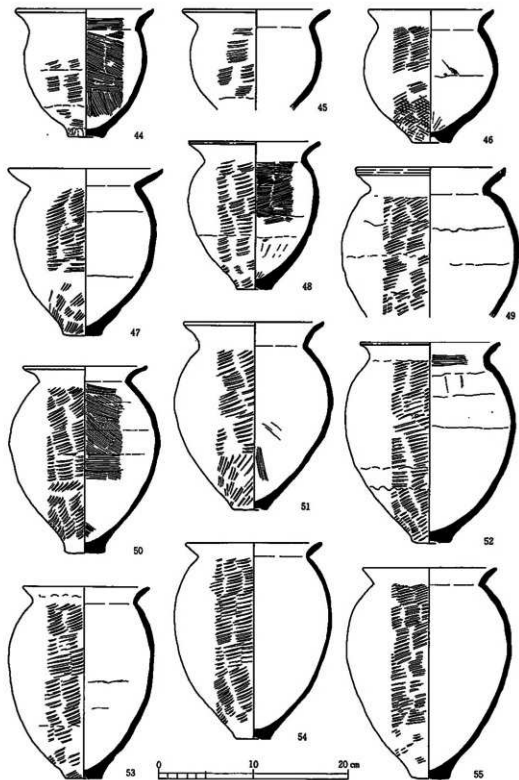
B. 木器

この層から出土した木器には、容器類の脚付盤が1点のみある。この盤は、一部分のみを残存していた。現存長は31.3cm、現存幅は13.4cm、器高は8.4cm、底部厚は1.7cm、深さは6cmを測る。かなり大きな盤と思われる。脚は、長さ9cm、幅5.6cm、高さ0.3cm程の逆台形に削り出している。かなり大きな樹幹を利用し、底部を木芯に向けた木取りがなされている(第57図W-84)。

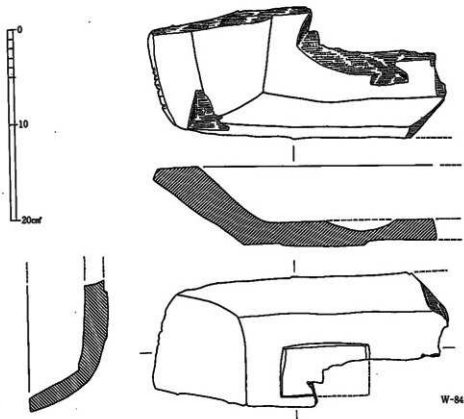
注7) 大型で横長の白は、静岡県有東遺跡から出土している。



第55図 弥生時代後期陶器層（灰緑色シルト）出土土器



第56図 弥生時代後期包含層（灰緑色シルト）出土土器



第57図 弥生時代後期包含層（灰緑色シルト）出土木器

注⑧ 類例としては、福岡県辻田遺跡、滋賀県服部遺跡、大阪府巨摩遺跡から出土したものがあり、古代学の研究については、水野正好「埴の誕生とその展開」『考古学雑誌第66巻第1号』1980で集大成されている。

4. 古墳時代前期の遺物

古墳時代前期の遺物は、包含層である灰色砂から、わずかな土器と木器を確認、検出した。

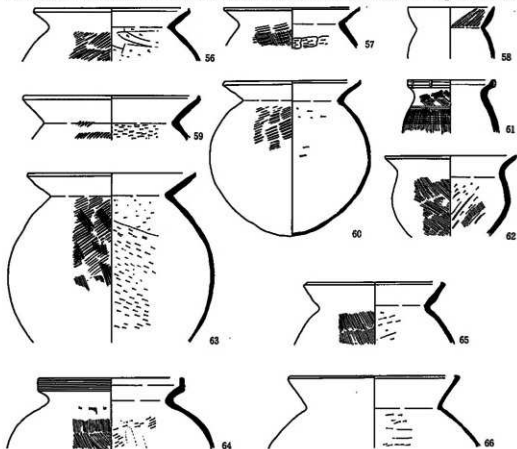
A. 土器

土器には、B地区から出土した庄内式並行期のもの（第58図56～64）と、布留式並行期のもの（第58図65・66）がある。両者が同一層より出土している。

〈庄内並行期の土器〉 庄内並行期の土器には、埴と甕がある。

埴は1点のみ出土している。（58）は、体部下半を欠失している。口径9.0cm、腹径9.2cm、現存高5.4cmを測る小型のものである。口縁部は内彎ぎみに斜上に伸び、口縁端部は尖りぎみにおわる。頸部は「く」の字形に屈曲し、腹径はわずかに口径より大である。体部の調整は、内外面ともに表面磨滅のため不明である。口縁部外面の調整は、ヨコナデを施している。口縁部内面の調整は、ヨコナデ後、部分的に斜方向の細いヘラミガキを施している。

甕には、いわゆる庄内式甕（56、59、60、63）と、そうでないもの（57、61、62、64）がある。（56）は、口頸部および体部上半の破片である。口径16.4cm、現存高5.6cmを測る。口縁部は斜上に外反し、口縁端部は上につまみ上げられ、明瞭な外端面をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲



第58図 古墳時代前期出土土器

し、頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面が左下がりの細い叩目、内面が斜方向のヘラケズリである。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデである。外面頸部直下に弱いヨコナデが認められる。(59)は、口頸部および体部上端の破片である。口径18.8cm、現存高4.7cmを測る。口縁部は斜上に外反し、口縁端部は上につまみあげられ明瞭な外端面をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲し、頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面が左下がりの細い叩目、内面が横方向のヘラケズリである。口縁部の調整は、外面が左下がりの叩目後ヨコナデ、内面はヨコナデである。外面頸部直下に弱いヨコナデが認められる。(60)は完形品である。口径14.4cm、腹径16.9cm、器高16.5cmを測る。口縁部は斜上に外反し、口縁端部は上につまみ上げられ、明瞭な外端面をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲し、頸部内面に鋭い稜がある。体部は球形で、底部は丸底である。体部の調整は、外面上半が左下がりの細い叩目、内面上半が横方向のヘラケズリである。体部下半内外面ともに、表面磨滅のため調整不明である。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデである。外面頸部直下に弱いヨコナデが認められる。(63)は、底部を欠失している。口径17.9cm、腹径21.4cm、現存高17.8cmを測る。口縁部は斜上に伸び、外面がわずかに肥厚する。口縁端部は、明瞭な外端面をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲する。体部は球形に近い。体部の調整は、外面上半が左下がりの細い叩目の後部分的に斜方向の刷毛目、外面下半がナデである。内面は、横および斜方向のヘラケズリである。

(57)は、口頸部および体部上半の破片である。口径20.4cm、現存高4.3cmを測る。口縁部は斜上に外反し、口縁端部は上にならずにつまみあげられ、明瞭な外端面をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲し、頸部内面に稜がある。体部の調整は、外面が左下がりの叩目の後縦方向の刷毛目を施し、内面が横方向の約3cm間隔のヘラケズリである。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデである。(61)は、口頸部および体部上半の小型の破片である。口径9.2cm、現存高5.7cmを測る。口縁部は短く斜上に外反し、口縁端部は上につまみ上げられ、明瞭な外端面をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲し、体部はわずかなふくらみをもつ。体部の調整は、外面上端が斜方向の刷毛目である。体部上半は、縦方向の刷毛目の後横方向の刷毛目を2条施している。体部内面の調整は、指頭瓦痕を残している。口頸部の調整は、内外面ともにヨコナデである。口縁端部は、強いヨコナデを施した後に、棒状浮紋を数ヶ所に施している。暗褐色をした生駒西麓産の土器である。(62)は、底部を欠失している。口径14.0cm、腹径12.6cm、現存高8.5cmを測る。口縁部は斜上に外反し、口縁端部は明瞭な外端面をもつ。体部は扁平で口径が腹径より大である。体部の調整は、外面が斜方向の刷毛目、内面が斜方向の刷毛目の後斜方向のヘラケズリである。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデである。(64)は、口頸部および体部上半の破片である。口径15.2cm、現存高7.4cmを測る。口縁部は短く外反し、さらに上方へ立ち上がる。口縁上端部と立ち上がり部は、明瞭な面をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲する。体部の調整は、外面が斜および縦方向の刷毛目、内面が斜方向のヘラケズリである。体部内面に縦方向の指ナデを残す。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデである。外面体部上端に弱いヨコナデが認められる。口縁部

端面には、擬凹線様の帯描直線紋が1条施されている。山陽系の甕である。

(布留式並行期の土器) 布留式並行期の土器には、甕のみがある。

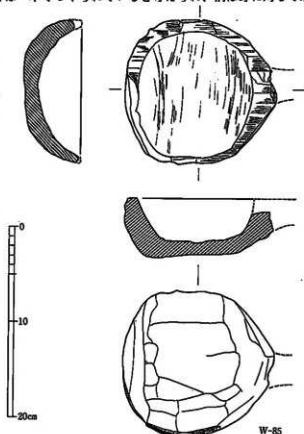
(65) は、口頸部および体部上半の破片である。口径は14.8cm、現存高は6.5cmを測る。口縁部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部外面をわずかに肥厚させる。口縁端部は面をもち、内方へわずかに突出させる。頸部は、「く」の字形に屈曲する。体部の調整は、外面が斜方向の刷毛目、内面が斜方向のヘラケズリである。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデである。頸部外面に強いヨコナデが認められる。胎土は、0.1~0.4mmの緑色片岩、石英等を多量に含んでおり、淡黄灰色をした、紀伊産の土器である。(66) は、口頸部および体部上半の破片である。口径は18.0cm、現存高は7.6cmを測る。口縁部は斜上方に伸び、口縁端部はわずかに肥厚し、やや内方へ突出する。頸部は「く」の字形に屈曲し、頸部内面に稜をなす。体部外面の調整は、外面が縦方向の刷毛目様のナデ、内面が横方向のヘラケズリである。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデである。

B. 木器

木器には、椀形の杓子が1点のみ出土している。柄を欠損しており、現存長は16.2cm、最大幅は15.2cm、器高は6.2cmを測る。柄と身は一本でつくられていると考えられ、柄は身に対して水平につくり出されていると思われる。

身の平面形は、ほぼ円形をしている。身の深さは、最大で4.6cmを測り、柄の方へゆくとつれ、わずかに浅くなる。体部は斜外方に開き、口縁部上端は面をもつ。底部は周縁がやや丸味をもった平底である。身の割り込みは、深く粗削りされ、細線状の加工痕を多数残している。底部外面にも、面取り状に加工痕を残している。柄がつくと思われる部分は、わずかに尖りぎみになっている。身の器壁も厚く、加工も粗削りなため、杓子の半未製品である可能性も考えられよう(第59図W-85)。

この木器は、B地区から(第58図64)と共同して出土しており、庄内式並行期のものかと思われる。



第59図 古墳時代前期出土木器

5. 古墳時代中期の遺物

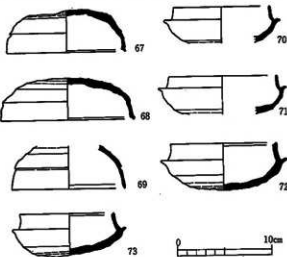
古墳時代中期の遺物は、新家遺跡で最も多く出土している。包含層である暗灰色粘土層から出土する遺物が大半を占めている。その他には、土城、溝等の遺構から出土するものがわずかにあり、5 A トレンチ部の土器溜からは、一括して出土している。遺物は、土器がほとんどで、他に、石製紡錘車等がある。

1) 土城出土の遺物

〈土城2〉は、6 A トレンチ部の北西隅で約片を確認、検出したものである。遺物は、須恵器の完形品が2点出土している。第60図67、68は、ともに蓋杯の蓋である。(67)は、口径12.6cm、器高4.5cmを測る。口縁部は外寄ぎみに垂下し、口縁端部は内傾する段をなす。天井部との境の稜は断面三角形で端部は鈍い。天井部は高くほぼ平らである。天井部の全体片を回転ヘラケズリで、他は回転ナデ調整である。(68)は、口径14.3cm、器高4.5cmを測る。口縁部はほぼ垂下し、口縁端部は内傾する段をなす。天井部との境の稜は断面三角形で鈍い。天井部は高く平らである。天井部の片は回転ヘラケズリを施し、他は回転ナデ調整である。

2) 溝出土の遺物

〈溝22〉は、5 B トレンチ部の北端中央から西南に流れる溝である。遺物は、須恵器の蓋杯が出土している。(69)は、蓋の破片で口径10.0cm、現存高4.5cmを測る。口縁部は外方へ下り、口縁端部は丸い。天井部との境の段は断面三角形をなし稜は鈍い。天井部約片は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(70~73)は、蓋杯の杯身である。(72)は、口径11.2cm、受部径13.4cm、器高5.0cmを測る。たちあがりは内傾後垂直に伸び、口縁端部は内傾する平面をなす。受部は上外方へ伸び、端部は丸い。底部は深く丸い。底部外面約片は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整である。底部外面に✕の宛記号有り。(73)は、口径9.9cm、受部径12.0cm、器高4.6cmを測る。たちあがりは内傾後垂直に伸び、端部は内傾する平面をなす。受部は上外方へ伸び、端部は丸い。



第60図 古墳時代中期土城3 (67・68)
溝22(69~73)出土土器

底部は深く丸い。底部外面片は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整である。

3) 土器溜出土の遺物

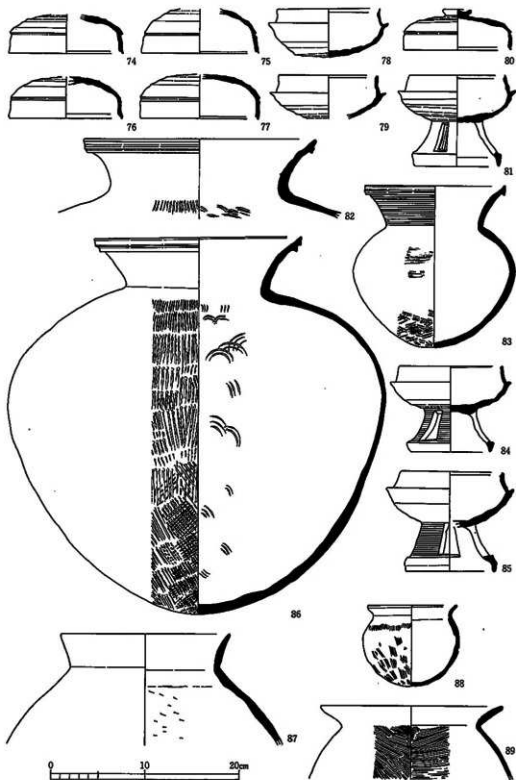
土器溜は、5 A トレンチ部で2ヶ所確認、検出した。(土器溜1)は、トレンチ部北端の東側で、ほぼ全面を検出し、(土器溜2)は、土器溜1の西側に隣接しており、どれだけの大きさかは、トレンチ部外へ続いたため、不明である。

〈土器溜1〉 土器溜1出土の土器は、口縁部を含む破片もしくは完形品を1個体とすれば、47個体出土している。その

うちわけは、土師器が7個体、須恵器が40個体である。

須恵器には、蓋杯の蓋・身、有蓋高杯の蓋・身、壺、甕等がある。(74)は、口径9.1cm、現存高3.2cmを測る。口縁部は外彎ぎみに垂下し、端部は内傾する段をなす。天井部との境に断面三角形の稜をなし、端部は鈍い。天井部は高く平らである。天井部の全体が以上を回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(77)は、口径9.3cm、現存高3.5cmを測る。口縁部はほぼ垂下し、口縁端部は内傾する段をなす。天井部との境に断面三角形の稜をなし、端部は鈍い。天井部は高く平らである。天井部の外は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(78)は、口径10.8cm、受部径12.8cm、器高5.0cmを測る。たちあがりは内傾後垂直に伸び、端部は内傾する段をなす。受部は上外方へ伸び、端部は鈍い。底部は深く丸い。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(79)は、口径10.4cm、受部径12.3cm、現存高4.6cmを測る。たちあがりは内傾後垂直に伸び、端部は丸い。受部は上外方へ伸び、端部は鋭い。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(80)は、口径11.3cm、つまみ径3.0cm、器高4.2cmを測る。口縁部は外彎ぎみに垂下し、口縁端部は内傾する段をなす。天井部との境に断面三角形の稜をなし、端部は鈍い。天井部は高く平らである。天井部の中央に上面凹状のつまみを付ける。天井部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。つまみは貼り付けている。(81)は、口径10.2cm、受部径12.6cm、脚部径9.0cm、器高9.7cmを測る。たちあがりは内傾ぎみに伸び、口縁端部は内傾する段をなす。受部は上外方へ伸び、端部は鈍い。脚部は杯部と約120度をなし下外方に伸び、端部近くで内傾ぎみに垂下する。端部はやや丸い。脚部に長方形の透しを3方に穿つ。杯部外面以上は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。脚部は貼り付けている。(85)は、口径11.8cm、受部径13.6cm、脚部径9.4cm、器高10.5cmを測る。たちあがりは内傾後垂直に伸び、口縁端部は内傾する段をなす。受部は上外方へ伸び、端部は鈍い。脚部は杯部と約120度をなし下外方に伸び、端部近くで段をなし外彎後内傾する。脚台端部はやや丸い。脚部に長方形の透しを4方に穿つ。杯部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ、脚部外面はカキ目調整、他は回転ナデ調整である。(83)は、口径14.9cm、腹径17.2cm、器高17.2cmを測る。口縁部は斜上に外反し、口縁端部はわずかに垂下し2条の凹面をなす。頸部は「く」の字形に屈曲し、肩部のやや張る体部へと続く。底部は丸い。外面の調整は、口縁部がカキ目調整、体部上半がカキ目調整の後ナデ、体部下半および底部が平行叩目である。内面の調整は、底部がナデ、他は回転ナデである。(82)は、口径24.6cm、現存高7.8cmを測る。口縁部は斜上に外反し、口縁端部はやや垂下し2条の凹面をなす。体部の調整は、外面が平行叩目、内面が青海波叩目である。口縁部の調整は、内外面ともに回転ナデである。(86)は、口径21.8cm、腹径39.9cm、器高40.0cmを測る。口縁部は斜上に外反し、口縁端部近くで断面三角形の凸帯を有し、口縁端部はわずかに立ち上がり凹面をなす。体部は肩が張り、やや尖りぎみの丸底へと続く。体部および底部の調整は、外面が平行叩目の後に部分的にスリケシを施し、内面が青海波叩目の後にナデである。口縁部の調整は、内外面ともに回転ナデである。

土師器には、壺、小型甗、高杯、甕等がある。



第61图 古墳時代中期土器溜1出土土器

(87) は、壺の口頸部および体部上半の破片で、口径17.9cm、現存高11.8cmを測る。口縁部は斜上方へ伸び、口縁端部は尖りぎみにおわる。頸部は「く」の字形に屈曲し、ふくらみをもつ体部へ続く。体部の調整は、外面が表面層滅のため不明、内面が横方向のヘラケズリである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。(88)は充形品で、口径9.5cm、腹径10.3cm、器高8.5cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部はわずかにつまみあげられ、外端面をなす。体部は肩部が張り、底部は丸底である。体部および底部の調整は、外面が縦方向の細い刷毛目、内面がナデである。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデである。(89)は、口頸部および体部上半の破片で口径19.4cm、現存高8.0cmを測る。口縁部は斜上方に伸び、口縁端部は明瞭な外端面をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲する。体部の調整は、内外面ともに斜方向の刷毛目である。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。

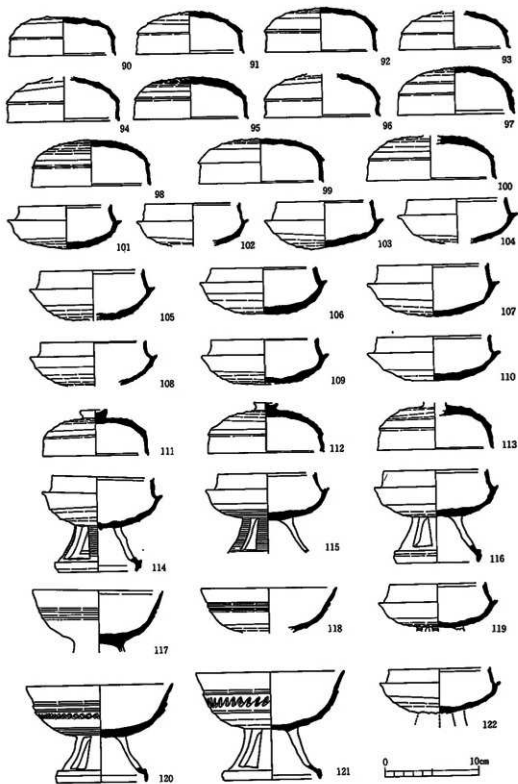
〈土器溜2〉 土器溜2出土の土器は、須恵器73個体、土師器27個体、製塩土器1個体である。

須恵器には、蓋杯の蓋・身、有蓋高杯の蓋・身、無蓋高杯、甕、短頸壺、甌、甕等がある。

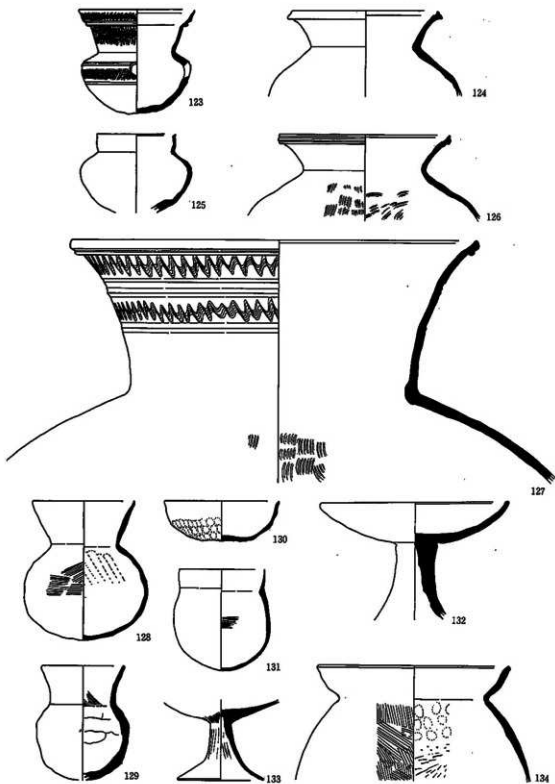
(90) は、口径11.2cm、器高4.1cmを測る。口縁部はほぼ垂下し、口縁端部は内傾する段をなす。天井部との境の稜は鈍い。天井部は高く平らである。天井部の $\frac{1}{4}$ は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(93)は、口径11.8cm、現存高4.0cmを測る。口縁部は外彎ぎみに垂下し、口縁端部は内傾する段をなす。天井部との境に断面三角形の稜をなし、端部は鈍い。天井部の $\frac{1}{4}$ は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(95)は、口径12.2cm、器高4.4cmを測る。口縁部は外彎ぎみに垂下し、口縁端部は内傾する段をなす。天井部との境に断面三角形の稜をなし、端部は鈍い。天井部は平らである。天井部の $\frac{1}{4}$ 以上は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(99)は、口径13.2cm、器高4.6cmを測る。口縁部はほぼ垂下し、口縁端部は内傾する段をなす。天井部との境に断面三角形の稜をなし、端部は鈍い。天井部は高く平らである。天井部の $\frac{1}{4}$ は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(101)は、口径9.6cm、受部径13.2cm、器高4.6cmを測る。たちあがりは内傾後垂直に伸び、口縁端部は内傾する段をなす。受部は上外方へ伸び、端部は鈍い。底部は深く丸い。底部外面の $\frac{1}{4}$ は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(103)は、口径10.0cm、受部径12.5cm、器高5.0cmを測る。たちあがりは内傾して伸び、口縁端部は内傾する段をなす。受部は上外方へ伸び、端部は鈍い。底部は深く丸い。底部外面の $\frac{1}{4}$ は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(106)は、口径11.0cm、受部径13.3cm、器高4.9cmを測る。たちあがりは内傾後垂直に伸び、口縁端部は内傾する段をなす。受部は上外方へ伸び、端部は鈍い。底部は深く丸い。底部外面の $\frac{1}{4}$ 以上回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(107)は、口径11.7cm、受部径14.1cm、器高5.5cmを測る。たちあがりは内傾後垂直に伸び、口縁端部は内傾する段をなす。受部は上外方へ伸び、端部は鈍い。底部は深く丸い。底部外面の $\frac{1}{4}$ は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(110)は、口径11.3cm、受部径13.3cm、器高4.8cmを測る。たちあがりは内傾後垂直に伸び、口縁端部は内傾する平面をなす。受部は上外方へ伸び、端部は鈍い。底部は深くほぼ平らである。底部外面の $\frac{1}{4}$ は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(112)は、口径12.2cm、つまみ

径2.6cm、器高5.3cmを測る。口縁部は外彎ぎみに垂下し、口縁端部は内傾する段をなす。天井部との境に断面三角形の稜をなし、端部は鈍い。中央上面凹状のつまみを付ける。天井部の刃は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。つまみは貼り付けである。(114)は、口径10.8cm、受部径12.7cm、脚部径8.2cm、器高10.2cmを測る。たちあがりは内傾後垂直に伸び、口縁端部は内傾する平面をなす。受部は上外方へ伸び、端部は鈍い。脚部は杯部とほぼ90度をなし下外方に伸び、脚台端部近くで段をなし、垂下後内傾する。脚台端部はやや丸い。脚部に長方形の透しを3方に穿つ。杯部外面の刃は回転ヘラケズリ、脚部外面はカキ目調整、他は回転ナデである。脚部は貼り付けである。(117)は、口径13.7cm、現存高6.8cmを測る。杯、口縁部は上外方に伸び、中位で断面三角形の凸線を2条有する、口縁端部は尖りぎみにおわる。底部はやや深く丸い。全面、回転ナデである。(120)は、口径15.5cm、脚部径9.4cm、器高10.3cmを測る。杯、口縁部は上外方に伸び、中位で断面三角形の凸線を2条有し後、外反する。口縁端部は尖りぎみにおわる。脚部は杯部とほぼ100度をなし下外方に伸び、脚台端部近くで段をなし垂下後内傾する。脚台端部は尖りぎみにおわる。底部はやや深く丸い。凸線下に1条6本の波状紋を施す。脚部に長方形の透しを3ヶ所に穿つ。杯底部カキ目調整、他は回転ナデである。(121)は、口径15.6cm、脚部径10.0cm、器高11.4cmを測る。杯、口縁部は上外方に伸び、中位に断面三角形の凸線を有して後外反し、口縁端部は丸い。凸線下に1条6本の波状紋を施す。杯底部は深く丸い。脚部は杯と120度をなして内彎ぎみに下外方へ伸び、端部近くで段をなし垂下する。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(123)は、口径12.4cm、腹径11.6cm、器高11.2cmを測る。口頸部は斜上方に伸び、口縁端部近くで断面三角形の凸線を有して後、さらに斜上方に伸びる。口縁端部は尖りぎみにおわる。頸部は「く」の字形に屈曲し、肩部の張った体部へ続く。底部は丸底である。口縁部および頸部に1条十数条の波状紋を施し、肩部下に凹線紋2条間列点紋を施している。最大径付近に円孔透し(径1.4cm)を穿つ。底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ、他は回転ナデである。(125)は、口径8.2cm、腹径11.7cm、現存高8.3cmを測る。口縁部は外彎ぎみに垂直に伸び、口縁端部は内傾する平面をなす。頸部は「く」の字形に屈曲し、肩の張る体部へ続く。外面体部下半は回転ヘラケズリ後回転ナデ、他は回転ナデである。(126)は、口径17.8cm、現存高9.2cmを測る。口縁部は斜上に外反し、口縁端部はやや垂下し、わずかに立ち上がり、2条の凹面をなす。頸部は「く」の字形に屈曲する。体部の調整は、外面が平行叩目、内面が青海波叩目である。口縁部の調整は、内外面ともに回転ナデである。(127)は、口径43.8cm、現存高24.5cmを測る。口縁部は斜上に外反し、口縁端部はやや垂下し、丸味をもちわずかに立ち上がり凹面をなす。頸部は「く」の字形に屈曲する。口縁部外面に1条6本の波状紋、凸線2条、波状紋、凸線1条を施す。体部の調整は、外面が平行叩目後スリケシ、内面が青海波叩目である。口縁部の調整は内外面ともに回転ナデである。

土師器には、壺、小型埴、埴、鉢、高杯、甕等がある。(128)は完形品で、口径10.9cm、腹径13.1cm、器高14.6cmを測る。口縁部は内彎ぎみに斜上に伸び、口縁端部は尖りぎみにおわる。



第62図 古墳時代中期土器溜2出土土器(1)



第63圖 古墳時代中期土器壺2出土土器(2)

頸部は「く」の字形に屈曲し、やや扁平な体部へ続く。底部は丸底である。体部の調整は、外面が刷毛目の後ナデ、内面が指ナデである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。(129)は先形品で、口径8.6cm、腹径9.8cm、器高12.1cmを測る。口縁部は斜上に外反し、口縁端部は丸味をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲し、やや肩の張る球形の体部へ続く。底部は丸底である。体部の調整は、外面が表面磨滅のために不明、内面がナデである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。頸部内面は斜方向の刷毛目である。体部内面に3本の粘土紐の継ぎ目を残す。

(130)は先形品で、口径12.0cm、器高4.2cmを測る。口縁部は外彎ぎみに伸び、口縁端部は丸味をもつ。底部はほぼ平らである。体部の調整は、外面が指頭圧痕を残し、内面がナデである。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデである。(132)は脚台端部を欠失し、口径18.7cm、現存高12.4cmを測る。杯部は皿状をなし、口縁端部は丸味をもつ、脚部はやや握ひろがりに伸びる。調整は、内外面ともにヨコナデである。(133)は口縁部を欠失し、脚径9.2cm、現存高8.3cmを測る。脚部はやや握ひろがりに伸び、さらに外反する。脚台端部は面をなす。杯部の調整は、外面が縦方向の刷毛目、内面が表面磨滅のため不明である。脚柱部の調整は、外面が縦方向の面取り、内面が絞り目を残す。脚台部の調整は、外面が表面磨滅のため不明、内面が横方向の刷毛目である。(134)は口頸部および体部上半の破片で、口径20.4cm、現存高12.0cmを測る。口縁部は内彎ぎみに斜上に伸び、口縁端部は丸味をもち、内面に段をなす。頸部は「く」の字形に屈曲する。体部の調整は、外面が縦および斜方向の刷毛目、内面上端が指頭圧痕を残し、内面上半が、横および斜方向のヘラケズリである。

(131)は、先形の製塩土器である。口径9.0cm、腹径10.2cm、器高10.7cmを測る。口縁部は内彎ぎみに伸び、口縁端部は尖りぎみにおわる。体部はわずかに張り、底部は丸底である。調整は内外面ともに表面磨滅が著しく、体部内面に平行叩目を認めるのみである。淡桃褐色をした薄手の土器である。

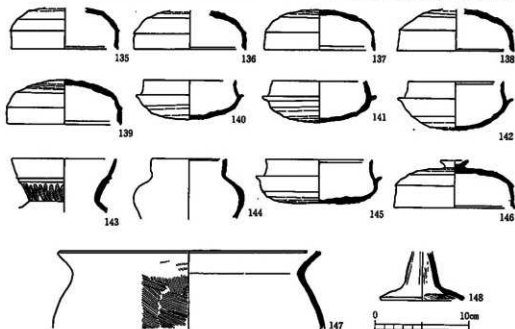
〈土器溜上層〉 土器溜上層出土の遺物は、〈土器溜1〉および〈土器溜2〉の最上層のものでどちらか区別がつかないため、別個に記述する。

土器溜上層出土の土器は、土師器16個体、製塩土器1個体、須恵器38個体の計55個体である。

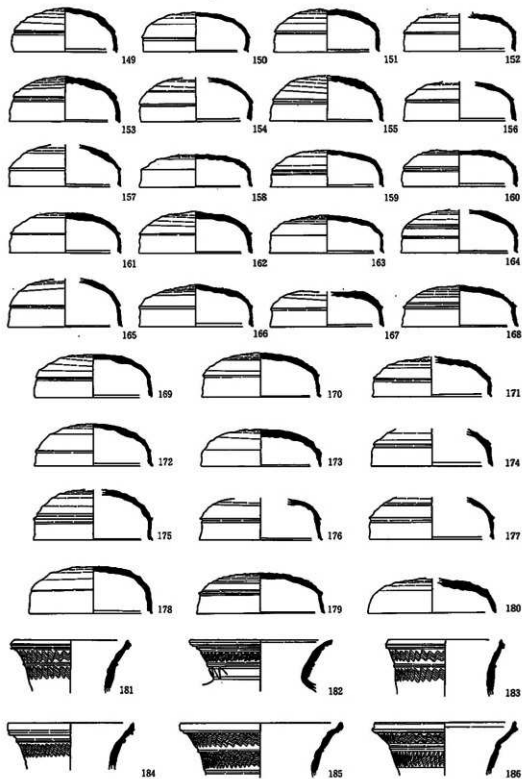
須恵器には、蓋杯の蓋・身、有蓋高杯の蓋、無蓋高杯、壺、短頸壺、甕、甕等がある。(137)は、口径11.6cm、現存高4.2cmを測る。口縁部は外傾ぎみに垂下し、口縁端部は内傾する段をなす。天井部との境は鋭く、直下に沈線紋を1条施す。天井部は高くほぼ平らである。天井部の外は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(139)は、口径11.8cm、器高4.7cmを測る。口縁部は内彎ぎみに垂下し、口縁端部は内傾する平面をなす。天井部との境に断面三角形の稜をなし、端部は鈍い。稜直下に沈線紋を1条施す。天井部は高くほぼ平らである。(141)は、口径10.0cm、受部径12.0cm、器高4.4cmを測る。たちあがりは内傾し、口縁端部は内傾する平面をなす。受部は上外方に伸び、端部は丸い。体部は稜をなし、底部はやや丸味をもつ。底部外面外に幅の狭い丁寧な回転ヘラケズリ、底部内面は不整方向のナデ、他は回転ナデである。(142)

は、口径10.2cm、受部径12.4cm、器高5.2cmを測る。たちあがりは内傾後垂直に伸び、口縁端部は内傾する段をなす。受部は上外方へ伸び、端部は鋭い。底部は深く丸い。底部外面の丸は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(145)は、口径11.3cm、受部径13.4cm、器高4.6cmを測る。たちあがりは内傾後垂直に伸び、口縁端部は内傾する段をなす。受部は上外方に伸び、端部は鈍い。底部は深く平らである。底部外面丸は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。(143)は、口径11.0cm、現存高5.2cmを測る。口頸部は斜上に伸び、途中で断面三角形の凸線を2条有して後、内彎ぎみに伸びる。口縁端部は尖りぎみにおわる。頸部は「く」の字形に屈曲する。凸線下に1条16本の波状紋を施す。内外面の調整は、回転ナデである。(146)は、口径8.0cm、腹径11.7cm、現存高6.4cmを測る。口縁部は内彎ぎみに垂直に伸び、口縁端部は内傾する段をなす。頸部は「く」の字形に屈曲し、肩部の張る体部へ続く。内外面の調整は、回転ナデである。(148)は、口径13.8cm、つまみ部径3.0cm、器高5.0cmを測る。口縁部は下外方へ垂下し、口縁端部は内傾する段をなす。天井部との境に断面三角形の稜をなし、端部は鈍い。天井部の中央に上面凹状のつまみを付ける。天井部の丸は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。つまみは貼り付けている。

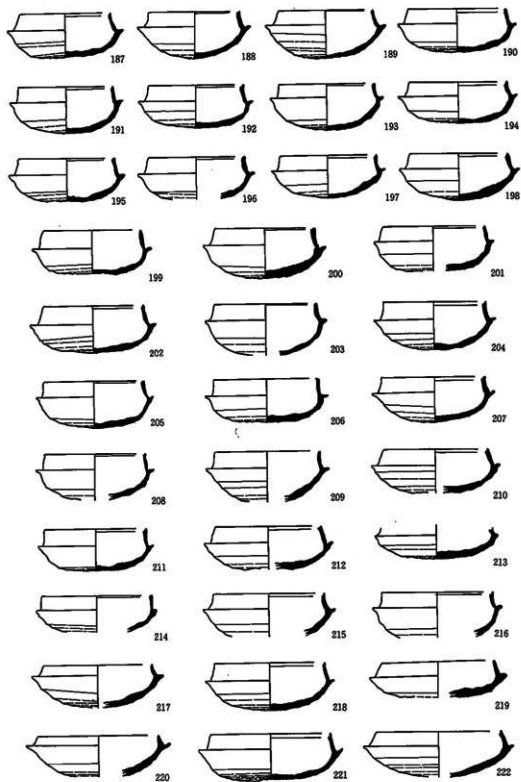
土師器には、壺、鉢、甕等がある。(147)は、口頸部および体部上半の破片で、口径28.0cm、現存高8.4cmを測る。口縁部は斜上に伸び、口縁部上端は面をなし内方へわずかに突出する。頸部は「く」の字形に屈曲する。体部の調整は、外面が縦および斜方向の刷毛目、内面が斜方向のナデである。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデである。(150)は、高杯の脚部破片で、脚部径8.8cm、現存高5.2cmを測る。脚柱は下外方へ伸び、さらに屈曲して伸びる。脚台端部は面



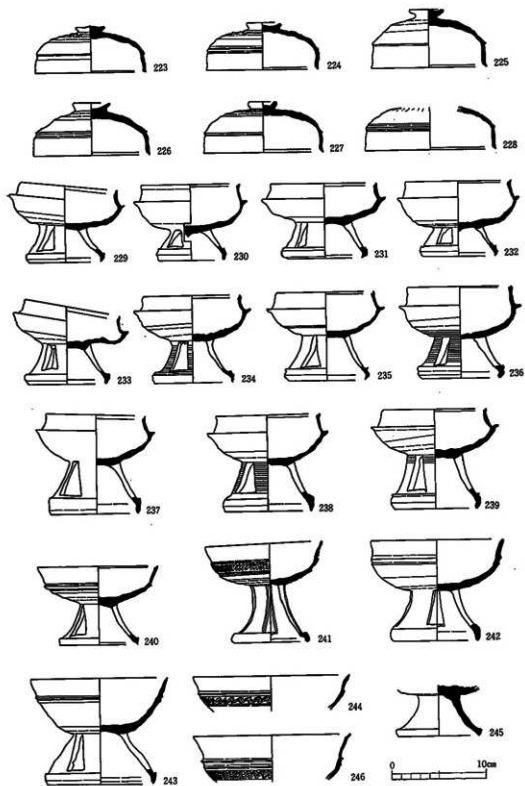
第64図 古墳時代中期土器壺上層出土土器



第65図 古墳時代中期包含層出土土器(1)



第66图 古墳時代中期包含層出土土器(2)



第67図 古墳時代中期包含層出土土器 (3)

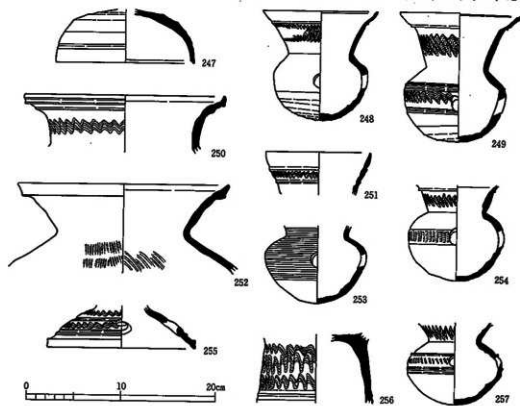
をなす。外面の調整は、脚柱部が面取り、脚台部がヨコナデである。内面の調整は、脚柱部が絞り目を残し、脚台部が斜方向の刷毛目である。他は、小破片で実測困難であるため、省略した。

製土器は、小型で丸底のものであり、乳白色で、叩目を残すものである。

古墳時代中期の包含層から出土した遺物は、A・B両地区に集中しており、土器がほとんどであり、他に、石製紡錘車等がわずかにある。土器には、土師器と須恵器があり、ほとんどが須恵器で占めている。

須恵器には、蓋杯の蓋・身、無蓋高杯、有蓋高杯の蓋・身、壺、甕、器台、甕等が、多々出土している。なかでも、蓋杯の出土量が多く、次いで高杯、甕がある。壺、器台、甕等は、破片のものであり、完形品になるものはない。

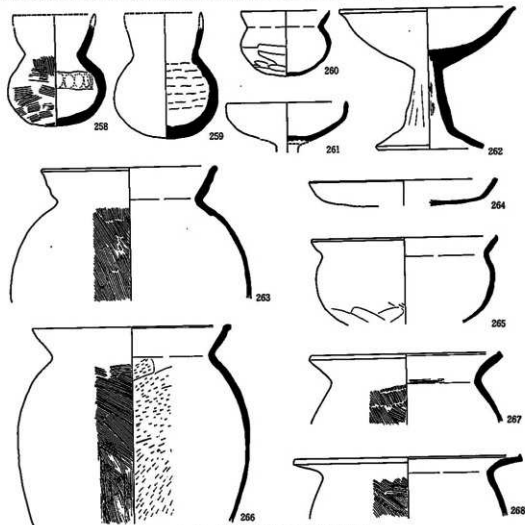
蓋杯の蓋には、主に、口縁部が外傾ぎみに垂下し、口縁端部が内傾する平面をなすものと段をなすものがある。天井部との境の線は、断面三角形をなすものとやや退化するものがある。器高は比較的高く天井部はやや丸い。天井部外面の調整は回転ヘラケズリである。なお、(180)のように蓋の線の痕跡がなくなり、全体が丸味をもち、口縁端部も丸く仕上げるものがわずかにある。杯身には、主に、たちあがり比較的高く、わずかながら内傾し、端部は蓋と同様に内傾する平面をなすものと内傾する段をなすものがあり、他に、丸味をもつものもある。いずれも杯底部は深く丸い。全体の片前後を回転ヘラケズリで仕上げている。なお、(220)のように、たち



第68図 古墳時代中期包含層出土土器(4)

あがり部が短く内傾し、口縁端部が丸く、底部も丸く安定性に欠けるものがわずかにある。

高杯には、有蓋のもの、無蓋のものがある。無蓋高杯には、三者があり、その一は、杯部が浅く、口縁部は上外方に伸び、口縁端部が内傾する段をなし、杯底部との境に断面三角形の凸線を2条施す。脚部はハの字形に外反し、端部は段をなし垂下する。三方に三角形の透しを穿つ。その二は、杯部が浅く、口縁部は外反し、口縁端部は丸い。体部外面に1条ないしは2条のやや退化した凸線を巡らし、波状紋を施すものもある。脚部は、ハの字形に外反し、端部は段をなすものとささないものがある。脚部の透しは、長方形のものを3方ないしは4方に穿っている。その三は、二同様の蓋杯の蓋を反転した杯をもつが、脚部は長脚化し、脚台端部は丸味をもって垂下する。透しは台形のものを4方に穿ち、その周囲に幅約2mmの面取りを施している。有蓋高杯には、前述した蓋杯の杯身に脚部をつけたものである。脚部には、やや短いものと普通のものがあり、ハの字形に外反し、端部が段をなし、二、三の凹面をもつものがある。いずれも三方に長



第69図 古墳時代中期包含層出土土器(5)

方形ないしは三角形の透しを穿っている。また、これに伴う蓋は、蓋杯の蓋につまみを付けたもので、つまみが高いものと比較的低いものの二者がある。

壺には、小型のものがあり、外反する口頸部は端部近くでさらに外方へ屈曲させており、その屈曲部には凸線が走る。口縁端部は丸味をもつ。口径が腹径より大になり、体部は球形に近く、器高の約 $\frac{1}{2}$ である。頸部外面に波状紋を施すものが多く、体部上面には、上下2本の沈線によって囲まれた波状紋あるいは刺突紋が施されている。なお、文様帯の代わりにカキ目調整を施すものもある。文様帯上に、上外方から下内方に向けて円形の孔が穿たれている。

壺は、口頸部破片のみが出土しており、全体形は不明である。口頸部が斜上にわずかに外反するものと、外反し広がった形状をなすものがある。口頸部外面の凸線は断面三角形をなすものと、退化し稜になるものがある。口縁端部は、外傾し凹面をもつ。口頸部間外面に波状紋を1帯ないしは2帯施している。なお、短頸壺の蓋も出土している(274)。

壺台は、台部のみが出土している。脚柱部破片である(256)は、やや下外方へ伸びるもので、外面に波状紋3帯と凸線を2条以上施している。長方形の透しがつくと思われる。(255)は、脚台部破片で、外彎ぎみに裾広がりになり、端部は段をなし垂下する。外面に凸線を1条巡らし、波状紋を2帯施している。4方に円形の孔を穿っている。

甕は、口頸部破片あるいは体部破片が出土しているが、完形になるものはなく、全体形は不明である。口頸部が外反し、口縁端部はわずかに上下方に伸びる。口縁端部に断面三角形の凸線を1条巡らすものもある。口縁端部は凹面をなす。頸部外面に波状紋を施すものもあり、文様帯に代わるものとしてカキ目を施すものもある。体部内外面の調整は、外面には平行叩目、内面には同心円または円弧叩目を施している。なお、その後、外面には部分部に回転カキ目調整や、不整方向の刷毛目調整を行っている例もある。口縁部内外面の調整は、回転ナデである。

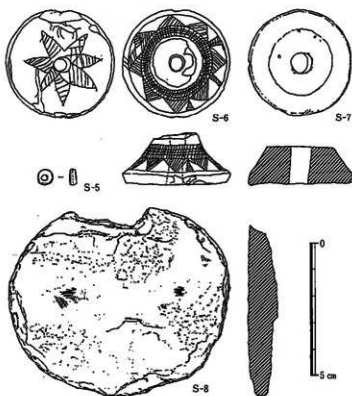
土師器には、壺、小型埴、高杯、鉢、甕等がある。壺には、小型のもので口頸部が外上方に伸び、体部が球形のものがある。体部外面の調整は指ナデが粗い刷毛目を施し、内面には粘土紐の雜ぎ目を残すものが多い。厚手で粗雑な作りのものである。高杯には、小型で杯部が壺形のものとして、わずかに口縁部が外反するものがあり、前者は茶褐色をした精製粘土で作られ、後者は3mm前後の砂粒を多量に含む暗褐色をした生駒西麓産のものである。甕には、口縁部が内彎ぎみに上方へ伸びるものと、外反するものがあり、いずれも長胴形と考えられる。両者ともに体部外面の調整は斜方向の刷毛目である。体部内面の調整は、前者がヘラケズリ、後者がナデである。前者が茶褐色をした生駒西麓産の土器で、後者は淡黄褐色をした土器である。その他、小型埴、鉢等が出土しているが、それらの占める割合は少ない。

以上の土器に加えて、製壺土器が数十個体ある。小型で丸底の乳白色をしたものである。

4) 古墳時代石製品

第70図S-5は、古墳時代中期の土器溜2から土器片に混じって出土した滑石製白玉である。重さ0.18g。S-6は、古墳中期の土器溜上層から単独に出土した暗灰緑色滑石製の紡錘車であ

る。ほぼ円形で（径3cm）、厚さは1.9cmと厚い。中央には表・裏両面からの穿孔による穴があく。側面には圈線を6条巡らし、その間隙に鋸歯線や梯子形の紋様等を埋めている。また、この側面には刻線で描かれた紋様の下に幅2～3mmの稜線が縦位に多数残存することから、このような紡錘車外面のスロープは恐らく鉄のナイフ等で削って作られたものであることが判明した。背面には七つ星形の紋様の一面に馬と思われる四足の動物が描かれている。重さ33.3g。S-7は、古墳時代の包含層中から単独に出土した暗灰緑色滑石製紡錘車で、外面に無数の擦り傷等があり、相当使用された形跡がある。重さ28.3g。S-8は、同じく包含層から出土した灰緑色の結晶片岩製円盤である。周縁と表裏面の一部が磨かれている。重さ98.1g。



第70図 白玉(S-5)、紡錘車(S-6・7)、円板(S-8)実測図

6. その他の遺物

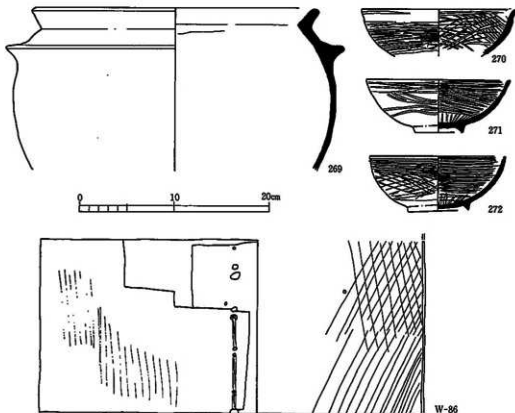
その他の遺物には、鎌倉、室町時代の井戸等から、羽釜、瓦器坑等に加わえて、曲物が出土している。その他、陶磁器片や近世陶磁器片等がわずかに出土している。

〈井戸3〉 井戸3は、2Bトレンチ部の北西端にあり、上部は後世の開削のために消失している。羽釜1個体と瓦器坑2個体を検出している。(269)は底部を欠失しており、口径30.2cm、胴径35.6cm、現存高17.0cmを測る。口縁部は短く斜外方へ伸び、口縁端部は丸味をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲し、丸味のある体部へ続く。体部外面上端に断面三角形の鈎を付ける。体部の調整は、外面がヘラケズリの後ナデ、内面がナデである。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデである。(272)は完形品で、口径14.4cm、高台径6.6cm、器高6.0cmを測る。口縁部は内彎ぎみに斜上に伸び、口縁端部は丸味をもち、端部内面に沈線紋を1条巡らす。高台は粘土紐を1本断面三角形に貼り付けている。

W-86は、A地区から出土している。平面形は楕円形をしており、短径46.0cm、長径60.4cm、現存高27.2cmを測る。内面曲部に斜方向の細線を刻み込み、曲げやすくしている。継ぎ目は、1cm前後の小孔を穿ち、桜の皮で編み込んでいる。井戸枠に使用されたものと思われる。

以上、新家遺跡出土の主な遺物について述べた。

(森屋美佐子)



第71図 鎌倉時代以降出土遺物(曲物のみ)

〈Ⅴ層出土遺物〉 Ⅴ層から瓦器、羽釜、白磁とともに、匙、埴輪、土師器高杯等を出土した。

これらの遺物のうち (273) ~ (277) に述べる遺物はⅤ—1層より出土したものである。

(273) は瓦器埴である。炭素吸着が少なく土師器の様に見える。底部付近が遺存し、高台断面形は三角形状をなし、その尖端をつまむ。高台基底部幅1.2cm、高台高0.4cmを測る。体部外面には指頭圧痕が認められる。(274) も瓦器埴である。粘土紐を貼り付けた高台は、基底部幅9.9cm、高台高0.15~0.2cmである。内面には0.7~1.1cm間隔に平行な暗文が認められ、体部外面には指頭圧痕が認められる。(275) は白磁埴である。体部は高台より斜め外上方に伸び、高台は外側を垂直に、内側を斜めに削り出し、体部外面下半はヘラ削りを施している。釉は黄白色を呈し、外側高台付近は露胎である。横田氏、森田氏の編年によれば白磁Ⅱ—1に該当すると考えられる。(276) は瓦器埴で、底部のみ遺存する。高台は端部を平坦に、両横を張り出した形状を呈し、高台基底部幅0.9cm、高台高0.3cmを測る。埴内面の暗文は0.9~1.0cmの間隔をもって施す。(277) は同じく瓦器埴高台付近である。高台断面は三角形状を呈し、底部内面の暗文もなく高台基底部幅0.6cm、高台高0.2cmを測り、極めて退化した高台である。これらのⅤ—1層出土遺物のうち (277) が最も新しい時期を示す。

Ⅴ—1層中には、下層のⅤ層、Ⅵ—2層上面の遺構を削平し、この中の遺物は上層のⅤ層中から出土した。これらの遺物の中で注目すべき遺物について以下述べる。

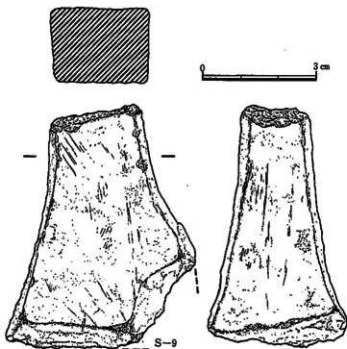
(278) は須恵器匙の体部上半の破片である。体部に斜め方向の刺突文が施され、この文様帯の中に小さな孔が離れて2個認められた。孔の周囲には径2cmほどの粘土を貼り付けた痕跡が認められる。これは、子の匙が孔の部分に乗っていた痕跡と考えられる。ただ破片が小さい為、全体の形状についてはわからない。次にⅤ—1、2層より出土した遺物について述べる。

(279) は形象埴輪のうち下端部が直線をなすものである。表面は風化し、外面は灰白黄色を示し、内外面とも左上りの指ナデである。茶灰色粘土を呈し、黒斑もなく器形もわからない。この埴輪の胎土は菅田白鳥の埴輪に類似している事が指摘し得る。(280) は土師質の羽釜であり、焼成は良好である。口縁外側には四条の凹線を施し、鋤以下の体部外面にはヘラ削りを施す。内面は横ナデである。鋤上面に内側に傾斜した孔を一個設けている。胎土は灰白色を呈し、粒子は非常に細い。次に述べる遺物はⅤ層から出土した遺物である。

(281) は瓦器埴底部である。高台は極めて退化しており、粘土紐を貼り付けただけである。高台基底部幅は1.2cm、高台高0.1cmを測り、埴内面に一条の円形の暗文を認めた。(282) は青磁である。体部はやや立ち上がり気味に外に伸びる。高台は外側を垂直に内側を斜めに削り出し、中央部は円錐状に少し突き出ている。内底面には見込みの圈線を認められる。胎土は淡灰色を示し砂粒をほとんど含まない。釉薬は薄い黄緑色のガラス質である。高台には施釉していない。施文は内面にヘラ状工具により花文を描き、クシ状工具で開きの狭い扇状文を施し、外面には細かいクシ目を施す。横田氏、森田氏の編年によれば、同安窯系青磁埴Ⅰ—1—hに相当するものであろうか。(283) 白磁埴である。外側を垂直に削り、底部は肉厚である高台は露胎で体部に

は薄く施釉される。釉色は淡灰白色を示し、横田氏、森田氏の編年では白磁碗Ⅰ-4類に相当するかと思われる。(284)は青磁の体部である。体部外面には蓮弁の文様が認められ、内面は無文である。釉薬は濃緑色を呈し、胎土は灰白色の精良なものである。この小片から判断は難しいが、あてて行なえば龍泉窯系青磁で、横田氏、森田氏編年では碗Ⅰ-5-aに相当するのであろうか。(285)は土師器高杯である。胎土精良の脚柱部に11面の面取りを施している。色調は黄灰色で暗分的に淡褐色部分がある。(286)は丸瓦である。凸面は縄目叩きの後、叩き目がわずかに残る程度にスリ消している。凹面は布目痕が認められ、中央部にあわせ目が存在する。胎土は砂粒を少し含んだ細かな粘土であり、色調は淡灰黄色を示す。

次に少し廻るが、次の遺物をつけ加える。(287)は弥生時代後期D・E地区河道出土遺物である。少し垂下した端部を持つ壺口縁は、口径15.4cmを測り、外側ではヘラミガキ、内側では刷毛目を施す。(288)はC地区沼沢地出土遺物である。径12.9cm、器高3.1cmを測り、口縁部内外面は横ナデである。(289)は3Aトレンチ井戸2より出土した井戸瓦である。縦30.4cm、横25.1cm、厚さ3.1cmを測り、内面とも丁寧なナデしている。凹面中央に山本新田と文字を浮き出している。S-9は、1Bトレンチ冒層茶褐色粘質土層より出土した砥石である。(入江正則)

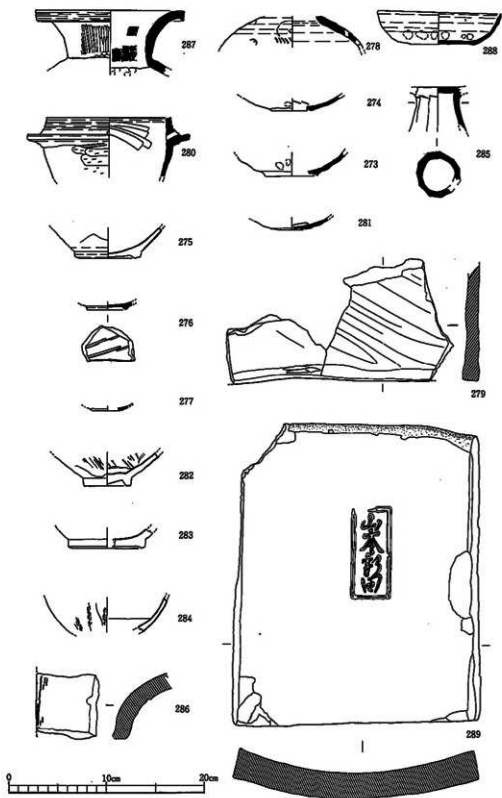


第72図 砥石実測図

註1) 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について、一型式分類と編年を中心として」

『九州歴史資料館・研究論集4』1978年

(2) 大阪府教育委員会 技師 西口陽一氏 ご教示



第73图 中近世出土遗物(1)

第五章 まとめ

これまでに述べた遺構、足跡、自然地理的観察、遺跡の結果を取りまとめ、河内湾から河内平野への変遷が当遺跡ではどのように理解できるかについて述べてゆきたい。

縄文時代晩期以前

基本層序Ⅰ層に相当する時期であり、河内湾の海中に位置し海成層を堆積している。周辺には魚類が生息し、エドザクラと呼ばれる貝類が生息していた。しかし貝類の生息痕跡のサンドパイプがⅠ層上部に認められる事から、徐々に浅くなっていったと思われる。まだまだ海底である事には変りはない。

縄文時代晩期

基本層序Ⅱ層、Ⅲ層に相当すると思われ、Ⅱ—2層出土の土器片の相対年代、滋賀里のⅢ期がこれらの層の1定点を示す。滋賀里Ⅲ期の時代にはⅡ—2層まで堆積しており、Ⅱ層の堆積自体はもう少しさかのぼり、この頃からⅡ層の底置層が広葉樹の葉や木の枝を多量に含みつつ堆積する。Ⅱ—2層ではセタシジミの生息していた事が確認できる事から、水質はすでに淡水化しており大和川の河口は比較的近くまで達していると考えられる。しかしまだ当遺跡は海底であり、ようやく三角州の近接により陸化のきざしが見え始めた頃である。この時期に縄文式土器を出土した事は、至近距離に近づいた三角州や自然堤防上での縄文人の活動を推測させるが、その活動は付近に生息しているセタシジミの採集に限定する必要はなく、もっと幅広い活動の結果として考えておく必要があると思われる。しかしこの後に継続して土器片を出土する事は無く、弥生時代前期に至るまで土器片はおろか活動痕跡を見い出す事も無かった。

弥生時代前期

この時代までに一旦水位は低下しⅢ層による三角州が発達するが長続きせず、じわじわとした水位の上昇とともに当遺跡全体にⅣ層を堆積する。しかしⅣ層も弥生時代新段階までには堆積を終えている。遺構はこの後に構築される。これらの遺構は柱列11、柱2、土壇13、落込20である。この時代には河道が発達し、深さ1.5mにおよび幅も大きなものであるが、これは少くとも水位が1.5mは低下していたと考えられ、大規模な河川の後退とともに遺跡が作られたと考えられる。遺跡の性格は現時点では非常に限られた遺物状況から判断すれば通常の集落を想定させる事は困難であり、むしろ漁業等に使用する前進基地的な性格を想起させる。しかしこれらの諸点については具体的な資料が乏しく今後の検討課題としておきたい。

弥生時代中期

当該遺跡は浅く水を被り、ヨシ、アシ等の水辺に生育する植物や所々に立木が見られ、水鳥が遊ぶような景観が想定されるが、中期初頭を除いては遺構、遺物とも認められない。中期初頭の

遺跡は水位の上昇にともなって水面下に没し、廃絶されたと考えられる。

弥生時代後期

基本層序のⅥ層に相当する時期で、再びさらに水位は上昇し三角州が非常に発達する時期である。Ⅵ-1層はA-F地区全域に堆積し、Ⅵ-2層はF・E・DとA・Bの限られた地区に堆積する。景観は水面上わずかに上面を出す三角州がぐんぐん成長しており、上流から押し流されて来た木器群が河辺のよどみに集まりそのまま埋没し、一方自然堤防上には放置されたかの様な土器群が埋没してゆく状況がある。

古墳時代前期

Ⅵ-2層の堆積する箇所としない箇所があり、凹凸のある景観を呈している。また河川の流路も変化し、かつての河道外のⅥ-2層の堆積しない窪地にも流れている。この窪地に堰および足跡群を検出する。この後にⅦ層によって窪地は埋めつくされ、地形はほぼ平準化する。Ⅶ層は幾度かの堆積の結果埋没し、それは比較的短期間に終了したと考えられる。この層中より庄内式甕、酒津式甕を出土している。

古墳時代中期

この時代に至り、再び遺構に伴って遺物が出土した。遺構は各種認められ、集落の一端の様相を呈し、人間の居住空間として位置付けられる。調査実施区は集落の周辺にあたり、その中心は西側にあると思われる。集落の継続期間は5世紀後半から6世紀後半までと考えられるが、その最盛期は5世紀後半の集落開始直後であると考えられる。

古墳時代後期

集落は最盛期をむかえた後、急速に衰退するが、断絶するまでには至らない。この時期の遺構は極めて少ない。この事から推測すれば集落は縮少し、当調査地は集落の範囲外に位置していたと考えられる。当時の様相を何ら考証する資料も検出し得ず、ほとんどわからないのが実情である。

奈良時代

当時もほとんどわからない。遺構面から言えばきわめて少数の遺構を検出し、遺物面でもきわめて少量出土している。これらの事から判断すればこの時代も前時期同様集落の範囲外にあるのではないかと考えられ、またその他の点についてはわからない。

平安時代

当代については全くわからない。遺物面から見てもこの時代と思われる遺物は全く出土しないし、遺構面からもこの時代と思われる遺構は無い。おそらく当時は人も住めないし、また寄りつかない様相を呈していたのではないかと推測される。

鎌倉、室町時代

この時代はⅦ層に相当し、これを三層に細分化したがそれぞれの時期差は明らかにできなかった。各層ともそれぞれ地表面に出ていた可能性も考えられ、いずれかの層から曲物を井筒とした

井戸が開削されている。このほかⅤ層上面で足跡、蛙眸を認める。

Ⅴ層は河内湖の水位上昇や理由はわからないが、何らかの理由で水成堆積層が形成され湿地化していたものを田として使用したのではないかと考えられる。湿地を再開発して田としたのが12世紀前後ではないかと考えられる。

安土桃山、江戸時代

Ⅴ層に相当し、井戸数基が掘り込まれる。

第六章 新家遺跡の問題点

弥生時代前期の遺構について

当遺跡の、従来までの知見にはなかった弥生時代前期の遺構を確認した。この分析を以下行なうてゆきたいが、まずはじめに柱列と名付けたものの性格を明らかにする作業を行ない、次に遺跡全体のあり方について述べたい。

柱列は3分類することができ、これはA類が平面形が長方形で四辺に柱の列が認められるもの、B類は正方形に近い長方形を示し、四辺とその中にも柱をもつもの、C類は柱列が2本、あるいは1本のみで構成されるもの、分類し得る。

A類 柱列 1・2・3・4・5

B類 柱列 6・7・8・9

C類 柱列 10・11 柱 1・2

これらA・B・C類は先にそれぞれの特性を述べたが、さらに詳しく性格について触れてゆきたい。C類は小規模な為に除きA・B類のみ分析を行ないたい。

A類 規模が比較的類似し、長辺は短辺の約2倍以上の長さを示し、最大8.4mから7.1mを測る。短辺は3.2～3.3mを測り各柱列の格差はあまり認められない。柱列の各柱根は一定の左右の幅の範囲内にありそれぞればらつきをもっている。中心線上両端にある柱材は太く、深く地中に入れられる。また各柱列の長軸の示す方位は非常に似かよっている群がある。

B類 この場合は柱穴のみの場合が多くしかも大型である。柱列の配置は縦横のあまり差のない長方形を示し、四辺のみならず、中央にも認められる。柱穴の配置はA類と異なり、比較的整然としている。

以上の様な形状を持つそれぞれの柱列は、どの様な性格であるかについて以下述べたい。

A類では中心線上の両端の柱が太く、深く入れられている事から、この部分に最も荷重がかかる構造を想定し得る事。屋根をもつ掘立柱建物が想定できる。しかし柱材の太さから考えれば、さほどしっかりした構造をもつとは考えられず、カヤ等を葺いた簡単な建物を想定しうる。しかもこの建築材の組み合わせは、つる等を使用して結縛していたと思われるし、壁もおそらく屋根と同じ植物を葺いていたか、あるいは吹きぬけで壁が無いなど極めて簡単な建物が考えられる。ただ高床住居なのか、平地住居なのかはわからなかった。

B類は、A類と異なって、掘方の規模、配置等からして、構造的にはもう少し堅牢であったと思われる、これも掘立柱建物を推定し得る。正方形に近く東柱を持っている。

A類とB類はそれぞれ掘立柱建物である事を推定したが、次にそれぞれの性格について考えた。

A類は高床住居、平地住居ともわからないが、生活に用する家屋、あるいは日常のさまざまな

作業等に使用した作業小屋などが考えられるが、どちらとも断定できない。

B類は、側柱のみならず東柱を持つ。正方形に近い平面形から、倉かそれに類似した性格として考えられ、何か物質を保存し、収納する性格を持つ事も考えられる。

この様に2種類の掘立柱建物が考えられ、弥生時代前期新家「ムラ」の一断面が推定できた。これをもう少し具体的に解明すると、新家「ムラ」の廃絶直前に遺存していた主要な遺構は、柱列1・2・3・4である。すなわち4棟が同時併存していた可能性がある、倉的性格の分類はその中に含まれないだろう。なぜなら柱根が遺存していないからである。これは次のように考えられる。廃絶時には倉はすでに存在しなかったか、あるいは解体されて移転したかである。しかし廃絶に至る前までにはこの倉が一棟ずつ存在していた時期が充分考えられる。この事を踏まえて新家「ムラ」を復元すると次の様になるだろう。3棟ないし4棟の小屋的なものと1棟の倉のようなものが同時期に存在していた事を想定するのはあながち誤りではあるまい。十分に想定しよう。これらの建物の周囲に土埴、落込が取りまく様に存在し、一方現在判明する所では遺構の存在する北側と南側の北に河道があり、それぞれも同時期に機能していたと考えられる。

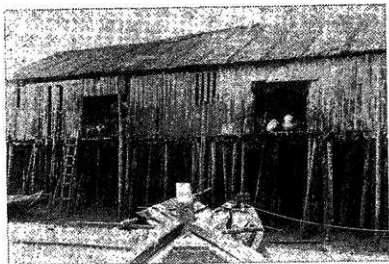
新家「ムラ」の性格はどの様に理解すれば良いのであろうか、「ムラ」の生産基盤は一体何であったのであろうか、水田による水稻耕作の可能性はⅣ層、Ⅴ層とも水田を検出しない為非常に少い。一方遺物の面から考えるにしても石虎丁、鋤、鋏と言った稲の収穫に関連した石器、農耕用具等が確認されていない為、可能性は薄いと見なければならぬ。このように遺物の面では「ムラ」の性格を表わすものが出土していないので、むしろ否定的な判断しかできない。次に立地の面から考えればどうであろうか、「ムラ」は河内湖岸に近接している事自体の中に、大きな意味があり、これから類推し得る漁業基地的性格もあながち誤りではないと言えるだろう。そしてこの「ムラ」もあえて括弧つきにして記しているごとく、人々が定住して生活する集落的根拠を考え得るのかについても、現時点では否定的であり、むしろ漁業の為だけの前進基地的性格を考えたい。これは大幅な汀線が後退するに伴って必然的に前進基地を作らざるを得なかったと考えられる。このような当時の状況を推定しても誤りではないと思うのである。

最後に、柱列A類、B類の考えを補う意味で以下の資料を参考をしたい。第74図は「カンボン、⁽¹⁾トットーリットのロングハウス」で簡単であるにもかかわらず長大な屋根構造を持つものを示す。第75図は「沖から見た水産加工場」⁽²⁾であり、東北スマトラ地方の水上空屋の一種である。第76図は、「溼原の中の一軒家」⁽³⁾であり、雨期になれば水上家屋化する建物を示す。第77図は「トンレサップ南湖の水上空屋」⁽⁴⁾であり、これも水上家屋で、常時水上家屋を維持している建物らしい。第78図は「掘立柱建物の床下の構造」⁽⁵⁾であり、柱を結縄している構造を示す。第79図は「南洋、ウルシヤソール島の舟庫」⁽⁶⁾であり、第80図は「ヤップ本島の舟庫」⁽⁷⁾を示す。さまざまな可能性を指摘し得る。

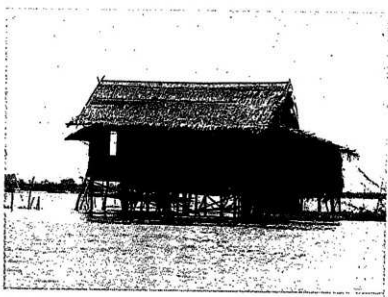
(入江 正則)



第74図 カンボントゥートゥーリットのロングハウス



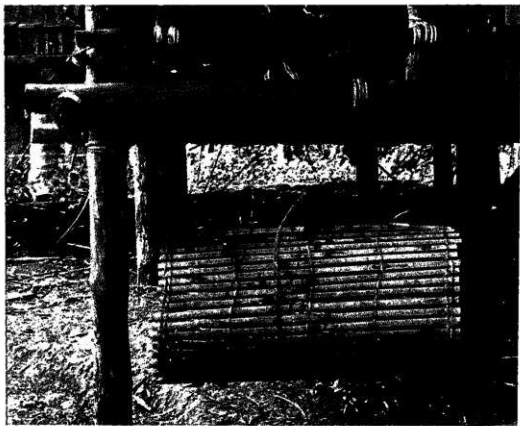
第75図 沖から見た水産加工場の水揚口



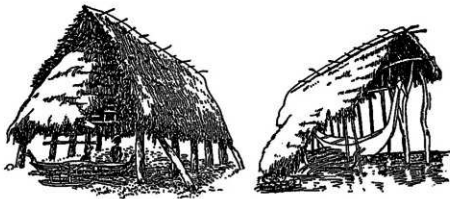
第76図 湿原の中の一軒家 (スマトラ)



第77図 トンレサップ南湖の水上家屋 (カンボジア)



第78図 獨立柱建物の床下の構造



第79図 南洋ウルシィ、ヤソール島の舟庫

第80図 ヤップ本島の舟庫

- 註(1) 岩田慶治 『ボルネオ紀行』 「季刊 人類学」 1-1 1970
(2) 岩切成郎 『東北スマトラの華僑水上部落の生態』 「季刊 人類学」 4-2 1973
(3) 水野寿彦 『熱帯アジアの湖沼と森林』 東海大学出版会 1980
(4) 染木 熊 『ヤップ離島巡航記』 「民族学研究」 第三卷第三號 1937

(あとがき)

当報告書の原稿は昭和56年度に執筆したものに一部筆を加えたものである。この為、若干見解が古くなっている事をご容謝願いたい。

II 編. 新 家 遺 跡

(花 粉 分 析)

1. 試 料

花粉分析試料は、S T A 63+00が30点、S T A 60+65が10点、合計40点である。

これらの試料についての試料番号、土質、花粉、胎子化石産出傾向については、その内容を各項目別にまとめ、別紙の第1表の試料表に記載した。

2. 結果及び考察

分析結果は、検出された花粉・胎子化石総数を基数とする百分率で各試料における花粉・胎子化石の割合を算出し、付表一としてその内容を後掲した。この中で主な花粉と胎子についてはダイアグラムで表わし、付図一として同様に後掲した。

更に、写真版(PLATE. 1・2・3)を作成したので参照されたい。

今回の分析の結果、以下に列挙する花粉・胎子化石が検出された。

(針葉樹花粉 (A P-1))

モミ属(*Abies*)、トウヒ属(*Picea*)、マツ属(*Pinus*)、カラマツ属(*Larix*)、ツガ(*Tsuga sieboldii*)、コメツガ(*Tsuga dirersifolia*)、マキ属(*Podocarpus*)、スギ科(*Taxodiaceae*)、スギ属(*Cryptomeria*)、コウヤマキ属(*Sciadopitys*)、マオウ属(*Ephedra*)、[イチイ科(*Taxaceae*)・ヒノキ科(*Cupressaceae*)・スギ科(*Taxodiaceae*)の何れかであるが、鑑定判別のつかないもの]……(T.C.T)

(広葉樹花粉 (A P-2))

ヤマモモ属(*Myrica*)、カリア属(*Carya*)、クルミ属(*Juglans*)、サワグルミ属(*Pterocarya*)、ヤナギ属(*Salix*)、ハンノキ属(*Alnus*)、カバノキ属(*Betula*)、クマシデ属(*Carpinus*)、ハシバミ属(*Corylus*)、クリ属(*Castanea*)、クリカシ属(*Castanopsis*)、ブナ属(*Fagus*)、アカガシ亜属(*Cyclobalanopsis*)、コナラ亜属(*Lepidobalanus*)、ムクノキ属(*Aphananthe*)、エノキ属(*Celtis*)、ニレ属(*Ulmus*)、ケヤキ属(*Zelkova*)、クワ科(*Moraceae*)、マンサク属(*Hamamelis*)、トサミズキ属(*Corylopsis*)、フウ属(*Liquidambar*)、マメ科(*Leguminosae*)、シラキ属(*Sapium*)、カエデ属(*Acer*)、トチノキ属(*Aesculus*)、モチノキ属(*Ilex*)、ウコギ科(*Araliaceae*)、ツツジ科(*Ericaceae*)、ハイノキ属(*Symplocos*)、トネリコ属(*Fraxinus*)、イボタノキ属(*Ligustrum*)、ガマズミ属(*Viburnum*)、アカメガシワ属(*Mallotus*)。

(草本花粉 (N A P))

サナエタデ属(*Persicaria*)、タデ属(*Polygonum*)、ナデシコ科(*Caryophyllaceae*)、アカザ科(*Chenopodiaceae*)、アブラナ科(*Crusiferae*)、ツリフネソウ属(*Impatiens*)、

第1表 新家遺跡花粉分析試料表

試料番号	土質	花粉胎子化石 産出傾向
------	----	----------------

STA. 63+00

1	暗褐色粘土	A
2	同上	A
3	暗茶褐色土	A
4	同上	A
5	茶褐色粘質土	A
6	同上	A
7	同上	A
8	灰色粘土	A
9	褐色土	A
10	黄褐色粘質土	A
11	同上	A
12	同上	A
13	暗青灰色粘土	A
14	同上	A
15	同上	A
16	同上	A
17	同上	A
18	同上	A
19	植物遺体含暗青灰色粘土	A
20	同上	A
21	青灰色粘土	A
22	同上	A

試料番号	土質	花粉胎子化石 産出傾向
------	----	----------------

23	青灰色粘土	A
24	同上	A
25	泥炭	A
26	黑青灰色粘土	A
27	茶褐色粘土	A
28	黑青灰色粘土	A
29	白色粘土	A
30	同上	A

STA. 60+65

3	淡灰褐色粘土	A
4	同上	A
5	暗灰色粘土	C
6	同上	A
7	同上	A
8	同上	A
9	暗緑色粘土	A
10	同上	A
11	同上	A
12	青灰色砂	A

※ A : Abundant 多い

C : Common 普通

ヒシ属(*Trapa*), アリノトウグサ属(*Haloragis*), フサモ属(*Myriophyllum*), セリ科(*Umbelliferae*),
キク亜科(*Carduoideae*), ヨモギ属(*Artemisia*), タンポポ亜科(*Cichorioideae*),
ヒルムシロ属(*Potamogeton*), ユリ科(*Liliaceae*), アヤメ科(*Iridaceae*), イネ科(*Gramineae*),
ミクリ属(*Sparganium*), ガマ属(*Typha*), スゲ科(*Cyperaceae*), スブタ属? (*Blyxa?*),
オモダカ属(*Sagittaria*), アサザ属(*Nymphoides*), ソバ属(*Fagopyrum*),
マルバオモダカ属(*Caldesia*), ゴマ属(*Sesamum*), タヌキモ属(*Utricularia*).

〈形態分類花粉 (F P)〉

三孔型花粉(*Triporate pollen*), 単溝型花粉(*Monocolpate pollen*), 三溝型花粉(*Tricolpate pollen*),
三溝孔型花粉(*Tricolporate pollen*), 無孔型花粉(*Inaperturate pollen*).

〈羊歯類孢子 (F C)〉

ヒカゲノカズラ科(*Lycopodiaceae*), ゼンマイ科(*Osmundaceae*), ウラボシ科(*Polypodiaceae*),
イノモトソウ属(*Pteris*), ミズワラビ属(*Ceratopteris*), ハナヤスリ属(*Ophioglossum*),
単条溝型孢子(*Monolete spore*), 三条溝型孢子(*Trilete spore*).

次に各柱状ごとに、下部から上部へ主な花粉・孢子化石の消長について述べる。

ST A63+00…………… (No.1~No.30までの30点)

針葉樹花粉はマツ属、スギ科が主に検出され、これに次いでツガ、コウヤマキ属、モミ属などが良好に検出された。

マツ属はNo.30からNo.11にかけて目立った消長は示さず、1~7%の範囲で若干の増減を繰り返しながら検出される。No.10・No.9になると若干増加し、それぞれ8.4%、11.3%検出された。しかし、No.8・No.7になると再び減少するが、No.6以浅では急増し、16.0%~22.0%検出された。

スギ属は最下部のNo.30で11.0%の産出率を示すが、漸次に減少し、No.28で6.9%の割合を示す。しかし、それを境に増加に転じ、No.27からNo.22にかけて、その中のNo.25の18.9%をピークとする凸型の消長がみられる。その後一時的に増加するが、直ちに減少し、No.20からNo.10にかけて台形の消長が見られる。それ以浅では低率な産出を示すが、No.4からNo.2にかけて若干の増加がみられた。

ツガはNo.10・No.24を除くと、No.30~No.1のほぼ全試料を通じ低率ながら産出し、中でもNo.27・No.26とNo.23~No.12で比較的良く検出された。これよりも下位のNo.30~No.28及び上位のNo.11~No.1では1%未満で少なかった。

コウヤマキ属は、下部のNo.30~No.24及び中部のNo.21~No.15から良好に検出される特長がみられる。しかし、それ以外のNo.23・No.22およびNo.14~No.6では1%未満で少なかった。また、No.5以浅では全く検出されなかった。

モミ属は全試料を通じて散見されるが、特にNo.17以深の下半分の試料に良好に検出される傾向がある。

広葉樹花粉は、アカガシ亜属、クリカシ属、コナラ亜属が主に検出された。その他ハンノキ属、

クマシテ属、エノキ属なども僅かながらも良好に検出された。

アカガシ亜属は最下部のNo.30からNo.28にかけて21.6%から34.0%へ増加がみられた。しかしNo.27になると11.4%に急減し、その後No.23まで10.0%前後で一定した検出を示すが、No.22からNo.19にかけて漸増し、No.19では30.3%のピークに達する。そのあと再び減少し、No.18からNo.1にかけて24.2%から0.4%へ徐々に減少した。

クリカシ属はNo.29からNo.24およびNo.19からNo.16にかけて、7~10%の範囲で、ほぼ一定した産出を示す。No.23からNo.20では4~7%で少ない。またNo.14以浅では6.8%から0.4%へ漸減する。

コナラ亜属は、下部のNo.30からNo.26にかけて、その中のNo.28の11.5%をピークとする凸型の消長がみられる。No.23になると急増し、No.23からNo.19にかけ、No.22の16.5%をピークとする、なだらかな凸型の消長がみられる。それ以後では減少し、No.10・No.9から7%前後検出されたほかは少なく、No.18からNo.1にかけて2~6%の割合で、少ないながらも一定した産出を示す。

ハンノキ属は割合は少ないが、No.10からNo.6にかけて低率ながら一定した産出を示す。しかしそれ以外の試料では、敬見される程度で少ない。

クマシテ属は、ほぼ全試料中から低率ながら検出される。No.23からNo.18にかけては連続して検出された。

エノキ属はNo.22からNo.18にかけてと、No.9からNo.6にかけて低率ながら連続して検出された。その他の試料では敬見される程度で少ない。

草本花粉はイネ科が優占して検出されるほか、スゲ科、ヨモギ属、オモダカ属、マルバオモダカ属が良好に検出された。

イネ科はNo.30からNo.19にかけては5%~16.0%の範囲で増加と減少を繰り返しながら産出する。特にNo.30~No.28およびNo.27~No.25にかけては鋸歯状の消長がみられる。No.24からNo.19にかけては8%~15%の範囲で増減を繰り返しながら多産する。No.18になると急に増加に転じ、No.14の54.0%をピークとしてNo.10に至る凸型の消長がみられる。No.9以後では再度増加し、No.8からNo.1にかけて、途中No.6で減少するものの、54.1%~60.0%と優占して検出された。

スゲ科は最下部のNo.30では少なかったが、段階的に増加してゆき、No.26からNo.24では34.1%~45.8%検出され優占した。しかし、次のNo.23になると激減し、3.4%に減少した。その後、No.11にかけて多少の増減を繰り返しながら良好に検出される。No.10・No.9になると若干増加し、それぞれ12.2%、5.5%検出された。それ以後では少なかった。

ヨモギ属は産出率は高くなかったが、ほぼ全試料中から見出された。この中でNo.21からNo.11にかけては連続的に安定して検出された。

オモダカ属はNo.22以浅の試料では殆んど検出されないが、No.21からNo.11の試料では2~6%の割合で安定して検出される。また、No.9~No.2からも僅かに検出された。

マルバオモダカ属は、ほぼオモダカ属と対応して検出され、No.18からNo.10にかけて検出された。特にNo.10からは9.9%検出され多かった。

検出割合は多くなかったが、ミクリ属が下部に多く検出される傾向がみられ、No.30～No.26から良好に検出された。

羊歯類胞子は単条溝型と三条溝型と主に検出された。単条溝型はNo.23からNo.12にかけて連続的に検出された。特にNo.23からNo.18にかけて4%～7%検出された。三条溝型は単条溝型ほど多くはなかったが、No.16からNo.6にかけて低率ながら安定して検出された。

主要花粉・孢子化石の消長の特長から、STA63+00セクションを花粉帯に分けると、I～Vまでの5花粉帯に分帯される。

次に、この花粉帯の特長ならびに古植生、古気候、古環境等について考察する。

I 花粉帯

No.1～No.6までの6点がこれに相当し、その特長は針葉樹花粉のマツ属が高率(16%～22%)で検出されること、及び、草本花粉のイネ科が30%～62%検出され優占することである。

古植生はイネ科を優占とし、アブラナ科を主に混えた草地在り推定される。この草地からはミズワラビ属、オモダカ属などの挺(てい)水生草本の花粉が良好に検出されることから、池沼的環境を示していると思われる。

草地の周囲には、マツ属、スギ科を主とする針葉樹林が存在したと推定される。

古気候は、古植生からみて現在と大差は無かったものと考えられる。

II 花粉帯

No.7からNo.15までの9点がこれに相当し、その特長はNo.9・No.10で若干の減少はあるが、イネ科花粉が5割前後検出され優占することである。

また針葉樹花粉としては、マツ属、スギ科が多かった。このうちスギ科はII花粉帯の下半分から良好に検出される。

広葉樹花粉は、コナラ亜属、アカガシ亜属、クリカシ属、ハンノキ属などが良好に検出された。このうちハンノキ属は、この花粉帯の上半分に多く、コナラ亜属は中部のNo.9・No.10に多く検出された。

従って古植生はイネ科を優占とし、スゲ科をはじめ水生植物のオモダカ属、マルバオモダカ属、ヒシ属、ガマ属および沈水水生植物のフサモ属が生育していたと考えられる。よって池沼的な環境であったと考えられる。

草地の周囲にはマツ属、スギ科などの針葉樹やコナラ亜属、アカガシ亜属、クリカシ属などの広葉樹が共に生育する針広混交林が存在していたものと推定される。

古気候は、古植生から推して、現在と同じか、若干暖かかったと思われる。

III 花粉帯

No.16～No.23までの8点がこれに相当し、その特色は、アカガシ亜属、クリカシ属、コナラ亜属などの広葉樹花粉が高率で検出されることである。またスギ科も多く検出された。

草本花粉はイネ科、スゲ科、オモダカ属が検出されたが、イネ科はI・II花粉帯と比べると非

常に少なかった。

従って古植生は、アカガシ亜属、クリカシ亜属などから成る照葉樹林が広く形成されていたものと考えられる。また、スギ科も良好に生育していたであろう。

更に水生植物のオモダカ属、ガマ属、ヒシ属、ツリフネソウ属が検出されることから、池沼的環境も存在したと考えられる。

古気候は、古植生からみて暖温帯であったと考えられる。

Ⅵ 花粉帯

No.24～No.27がこれに相当し、その特長はⅢ花粉帯と大体同じであるが、この花粉帯はスゲ科草本の花粉が優占して検出された点が異なる。

従って古植生は、アカガシ亜属、クリカシ属などの照葉樹林が形成され、スギ科もかなり生育していたと考えられるが、この花粉帯では更にスゲ科を優占する草地が広く形成されていたと思われる。この草地はⅢ花粉帯のそれと比べて、挺水生草本の種類が少なく、湿地に生育するガマ属などが多かったことから湿地の環境が優位を占めていたと考えられる。

古気候は、古植生からみて暖温帯であろう。

Ⅴ 花粉帯

No.28～No.30がこれに相当し、花粉帯の特長はⅢ花粉帯と近似し、アカガシ亜属、クリカシ属などの照葉樹の花粉が高率で検出された。加えてコナラ亜属、スギ科花粉も良好に検出された。

従って古植生は、アカガシ亜属、クリカシ属から成る照葉樹林が存在したと考えられる。またスギ科、コナラ亜属も良好に生育していたであろう。またガマ属、ミクリ属が検出されることから湿地の環境が推定される。特に、この花粉帯の最下部では、この傾向が強かったものと考えられる。

古気候は古植生からみて、暖温帯に相当するものであったと考えられる。

STA60+65……………(No.3～No.12までの10点)

針葉樹花粉は、マツ属、スギ科、コウヤマキ属の産出が高かった。

マツ属はNo.12～No.9では1%前後で少なかったが、No.8からNo.6ではNo.7の9.9%をピークとする凸型の消長がみられる。No.5で浅になると約1.5%検出され、多かった。

スギ科はNo.7およびNo.6で10%前後検出されたが、そのほかでは3～7%の割合で増減を繰り返しながら検出された。

コウヤマキ属は全試料から1.5%～8.3%の割合で検出され、産出傾向はNo.8からNo.5にかけての試料に若干多く検出された。

広葉樹花粉は、アカガシ亜属、クリカシ属、コナラ亜属が高率で検出された。

アカガシ亜属はNo.12からNo.9にかけてNo.11の21.5%をピークとする消長がみられた。これよりも浅い所ではNo.7とNo.5から7～8%検出され、その他の試料では少なかった。

クリカシ属はアカガシ亜属にほぼ対応する産出傾向を示し、No.12からNo.9にかけてNo.11の17.6

%をピークとする消長がみられた。No. 8 から No. 3 にかけては漸減する傾向が見られたが、No. 5 で若干増加がみられた。

コナラ亜属は No. 12 から No. 3 にかけて漸減する傾向がみられたが、No. 5 では若干増加がみられた。草本花粉はイネ科が優占して検出されたほかに、ヨモギ属、スゲ科が良好に検出された。

イネ科は No. 12 から No. 10 の 3 試料からは全く検出されなかったが、No. 9 から No. 3 にかけて高率で検出された。特に No. 8 から No. 3 にかけては、No. 5 を除くと、36.3% から 48.4% へ増加しながら多産した。No. 5 では急減し、11.6% 検出された。

スゲ科は全試料から 1.5% ~ 6.3% 検出され、若干の増減がみられた。また割合は少なかったが、ガマ属、オモダカ属、マルバオモダカ属などが検出された。このうちオモダカ属は No. 8 以浅の試料に限って検出された。

羊歯類孢子は、単条溝型孢子、三条溝型孢子が主に検出された。

単条溝型孢子は No. 12 から No. 6 にかけて No. 9 の 11.2% をピークとする凸型の消長がみられた。

三条溝型孢子は中部～上部のものから良好に検出された。また水生植物のミズワラビ属が No. 8 以浅の試料から良好に検出された。

主要花粉・孢子化石の産出の特長から、S T A 60+65 セクションを花粉帯に分けるとⅤ～Ⅷまでの 3 花粉帯に分帯される。

次にその花粉帯の特長ならびに古植生、古気候について述べる。

Ⅴ 花 粉 帯

No. 3 ~ No. 5 までの 3 点がこれに相当し、その特長は、マツ属とイネ科が多産することである。またスギ科、コウヤマキ属、アカガシ亜属、コナラ亜属なども良好に検出される。

古植生はイネ科を優占とし、スゲ科、ヨモギ属を僅かに交えた草地在と考えられる。またオモダカ属、ミズワラビ属などの水生植物の花粉が検出されることから、池沼の環境が推定される。

草地の周囲にはマツ属を主体とし、スギ属、コウヤマキ属、アカガシ亜属、クリカシ属、コナラ亜属などの樹木が僅かに生育する林地が考えられる。

古気候は、古植生から推して、現在と大差はなかったものと推定される。

Ⅵ 花 粉 帯

No. 6 ~ No. 8 がこれに相当し、その特長はイネ科花粉が優占して検出されたことである。樹木としてはスギ科が多く、マツ属、コウヤマキ属、アカガシ亜属、クリカシ属が良好に検出された。

古植生はイネ科を優占とし、ヨモギ属、サナエタテ属を若干交えた草地在と考えられる。またオモダカ属、ミズワラビ属、マルバオモダカ属などの水生植物の花粉が検出されることから、池沼の環境が推定される。

草地の周囲には、スギ科、マツ属、コウヤマキ属などの針葉樹や、アカガシ亜属、クリカシ属などの広葉樹が生育していたであろう。

古気候は古植生からみて、現在と大差はなかったものと云えよう。

Ⅵ 花 粉 帯

№9～№12までの4点がこれに相当し、その特長は、アカガシ亜属、クリカシ属が高率で検出されることが特長である。またスギ科、コナラ亜属も良好に検出された。

古植生はアカガシ亜属、クリカシ属から成る照葉樹林が広く分布していたものと推定される。同時にスギ科、コナラ亜属も良好に生育していたであろう。

また、ガマ属が検出されることから湿地の環境も存在していたであろう。

古気候は古植生からみて暖温帯であったと考えられる。

次に、STA63+00セクションとSTA60+65セクションを花粉帯の特長から対比すると、STA60+65セクションのⅥ花粉帯はSTA63+00セクションのⅠ花粉帯に、同じく前者のⅦ花粉帯は後者のⅡ花粉帯に、Ⅷ花粉帯はⅢ花粉帯に、それぞれ対比される。

これを図示すると第1図のようになる。

第1図 花粉帯対比図

STA 63+00		STA 60+65	
花粉層	試料番号	花粉層	試料番号
I	1	VI	3
	2		4
	3		5
	4		6
	5		7
	6	8	VII
7	10		
8	11		
9	12		
II	10	VIII	12
	11		
	12		
	13		
	14		
	15		
	16		
III	17	IX	12
	18		
	19		
	20		
	21		
	22		
	23		
IV	24	X	12
	25		
	26		
	27		
V	28	XI	12
	29		
	30		

	マツ属 - イネ科		
(現在)			(鎌倉~奈良)
(明治)	池沼 (水生草本)		
	温帯		
(近世)	イネ科		(古墳、中・後期)
	マツ属 - スギ科 - コナラ亞属		
	アカガシ亞属 - クリカシ属		
(中世~奈良)	池沼 (水生草本)		(庄内)
	温帯		
	照葉樹林		
	(アカガシ亞属-クリカシ属)		
	スギ科		
(古墳、中・後期)	池沼 (水生草本)		
	暖温帯		
(庄内)			
	スゲ科		
	照葉樹林		
(弥生、後期、第V様式)	(アカガシ亞属-クリカシ属)		
	湿地 (ガマ属)		
	暖温帯		
(弥生、中期以前)			
	照葉樹林 (アカガシ亞属-クリカシ属)		
	スギ科-コナラ亞属		
	池沼 (水生草本)		
	暖温帯		

《珪藻分析》

1. 試料

珪藻分析試料は、STA63+00セクションのNo21～No30の10点である。これらの試料についての試料番号、土質、珪藻化石産出傾向については、これを項目別にまとめて第2表の試料表に記載した。

2. 結果及び考察

分析結果は検出された珪藻化石種の個体数を付表-2に記載した。この中で、主な化石種については写真図版(PLATE.4・5・6・7)を作成し掲げた。また淡水棲種および海水-汽水棲種の個体数を付図-2のダイアグラムで表示した。

分析の結果、以下に列挙する珪藻化石種が主に検出された。

《淡水棲種》

Achnanthes lanceolata, *A.inflata*, *Amphora ovalis*, *Bacillaria paradoxa*,[■]
Caloneis permagna,[■] *Cocconeis placentula*, *C.placentula* var. *englypta*, *Cyclotella comta*,
Cymbella aspera, *C.turgida*, *C.turgidula*, *C.tumida*,[■] *C.sinuata*, *Diploneis ovalis*,[■]
Epithemia turgida,[■] *E.qebra*, *Eunotia monodon* var. *maior* fo. *bidens*,
E. praerupta var. *bidens*, *E. pectinalis*, *E.pectinalis* var. *umdulata*, *E. pectinalis* var. *mior*,
E. kocheliensis,

第2表 新家遺跡珪藻分析試料表

試料番号	土 質	珪藻化石産出傾向
STA. 63+00		
21	青灰色粘土	A
22	同上	A
23	同上	A
24	同上	A
25	泥 炭	A
26	黒青灰色粘土	A
27	茶褐色粘土	A
28	黒青灰色粘土	R
29	白色粘土	R
30	同上	A

■A : Abundant 多い。
 R : Rare 少ない。

Fragilaria pinnata, *F. construens*, *Gomphonema bohemicum*, *G. angustatum* var. *producta*,
G. olivaceum, *Gyrosigma acuminatum*, *Hantzschia amphioxys*, *Melosira granulata*, *M. italica*,
Navicula radiosa, *N. exigua*, *N. pupula* var. *rectangularis*, *N. lacustris*, *N. placentula*,
N. rhynchocephala, *N. dicephala*, *N. bacillum*, *N. anglica*, *N. verecunda*,
Nitzschia triblionella, *N. triblionella* var. *victoriae*, *N. linearis*, *N. scalaris*.
Neidium iridis, *Pinnularia appendiculata*, *P. mesolepta*, *P. gibba*, *P. gibba* var. *linearis*,
P. molaris, *P. viridis*, *P. subcapitata*, *P. interrupta*, *P. microstauron*, *P. hemiptera*,
P. maior, *Rhopalodia gibberula*, *R. gibba*, *Stauroneis phoenicenteron*, *Synedra ulna*,
S. vancheriae, *Stephanodiscus astraea*, *Tabellaria fenestrata*.

〔海水棲種および汽水棲種〕

Coccinodiscus lineatus, *C. excentricus*, *C. lacustris*, *Cyclotella stylum*,
Diploneis Smithii, *Grammatophora macilenta*, *Navicula peregrina*, *N. elegans*, *N. marina*,
Nitzschia eocconeiformis
N. granulata, *N. punctata*, *Terpsionoe americana*.

(注) ※ : 汽水中にも生息できる種。

次に各試料について珪藻構成の特長及び堆積環境について述べる。

No21

検出された珪藻群集のうち主なものは、*Cymbella turgidula*, *Fragilaria construens*,
Gomphonema olivaceum, *Gyrosigma acuminatum*, *G. scalproides*, *Navicula radiosa*,
Cymbella tumida, *Fragilaria Harrisonii*, *Gomphonema bohemicum*, *Neidium iridis*,
Achnanthes lanceolata, *Cocconeis placentula*, *C. placentula* var. *euglypta*, *Cymbella sinuata*,
Pinnularia molaris, *Synedra ulna* などである。このうち *Neidium iridis* を除いて殆どものがアルカリ性の水域を好んで生息する種である。また湖沼等の止水域の環境に多いものとして、*Cymbella turgidula*, *C. tumida*, *C. sinuata*, *C. turgida* などがあげられる。数量としてはあまり多くはなかったが、*Cymbella ventricosa*, *Gyrosigma acuminatum*, *Navicula anglica*,
Pinnularia subcapitata などの流水域に多く生息するものも検出された。

従ってNo21試料は、湖沼堆積物と考えられ、水質的にもアルカリ性を示していたと考えられる。

No22

数量的に多かったものは、*Cymbella turgidula*, *Achnanthes lanceolata*, *Navicula radiosa*,
N. rhynchocephala, *Fragilaria construens*, *Gomphonema bohemicum*, *G. olivaceum*,
Amphora ovalis, *Cocconeis placentula*, *C. placentula* var. *euglypta*, *Cymbella turgida*,
C. sinuata, *Diploneis ovalis*, *Fragilaria pinnata*, *Gyrosigma acuminatum*, *G. attenuatum*,
Hantzschia amphioxys, *Navicula exigua*, *N. dicephala*, *Pinnularia subcapitata*, *Synedra ulna*
である。このうち多くのものはアルカリ性水域のものである。

また、*Cymbella turgidula*, *Achnanthes lanceolata*, *Cymbella turgida*, *C. sinuata* などは湖沼に多く生息するものである。

従って、No22試料は湖沼堆積物と考えられ、水質的にもアルカリ性を示していると推定される。

No23

主なものとして、*Cymbella turgidula*, *Gyrosigma acuminatum*, *Navicula radiosa*, *Synedra ulna*, *Achnanthes lanceolata*, *Cocconeis placentula*, *C. placentula* var. *englypta*, *Cymbella turgida*, *Gomphonema longiceps* var. *subelavata*, *G. olivaceum*, *Navicula dicephala*, *N. verecunda*, *Nitzschia triblionella* var. *victoriae* が検出された。

これらの多くは、アルカリ性水域を好んで生息する種である。また、*Cymbella turgidula*, *Achnanthes lanceolata*, *Cymbella turgida*, *C. sinuata* などは湖沼など止水域に多い種である。更に当試料からは、*Gyrosigma acuminatum*, *Gomphonema parvulum*, *Navicula anglica* など流水域に多い種も良好に検出された。

従ってNo23はアルカリ性の湖沼堆積物と考えられ、河川などによる流入も推定される。

No24

Eunotia monodon var. *maior* fo. *bidens*, *E. pectinalis* var. *minor* など酸性水域に生息する種が多く検出されることが特長である。アルカリ性型のものとしては、*Achnanthes lanceolata*, *Gyrosigma acuminatum*, *Navicula dicephala*, *Synedra ulna* をはじめ、*Cocconeis placentula*, *C. placentula* var. *euglypta*, *Cymbella turgida*, *C. turgidula* などが良好に検出された。これらの多くは湖沼中に生活するものである。

従って、当試料は湖沼堆積物と考えられる。水質的には酸性の環境も存在したであろう。

No25

好酸性型の *Eunotia* 属が多く検出されることが特長である。特に *Eunotia monodon* var. *maior* fo. *bidens*, *E. pectinalis* (亜種も含む), *E. praerupta* var. *bidens*, *E. flexuosa*, *E. lunaris* が良好に検出された。

その他、*Pinnularia gibba*, *P. interrupta* など好酸性型のものが検出された。

アルカリ性型のものとしては、*Melosira granulata*, *M. italica*, *Cymbella turgida*, *Epithemia turgida*, *Fragilaria construens*, *Rhopalodia gibberula*, *R. gibba* などが多く検出された。これらは沼池性型を示すものが多い。

従って、No25試料は湖沼堆積物と考えられ、水質的にも酸性の環境が強く現われていると云え

No26

好酸性型として *Eunotia pectinalis* (亜種も含む), *E. monodon* var. *maior* fo. *bidens*, *E. tenella*, *Pinnularia gibba* (亜種も含む), *P. microstauron* が多かった。

好アルカリ性型として *Epithemia turgida*, *Melosira granulata*, *Fragilaria pinnata*, *Navicula anglica*, *Rhopalodia gibba*, *R. gibberula* などが多く検出された。

水質に左右されずに生活する不定性型としては、*Diploneis ovalis*, *Melosira italica*, *Pinnularia viridis* などがあげられる。

従って、No26試料は湖沼成堆積物と考えられ、水質的にも酸性の影響が強かったと思われる。

No27

この試料からは、*Coscinodiscus lacustris*, *Navicula peregrina*, *N. elegans*, *Diploneis Smithii*, *D. ovalis* などの海水棲種または汽水棲種の珪藻化石が見出されることが特長である。

淡水棲種としては、*Diploneis ovalis*, *Navicula radiosa*, *Amphora ovalis*, *Pinnularia molaris*, *P. microstauron*, *Rhopalodia gibberula*, *Navicula*, *Fragilaria pinnata*, *Gyrosigma acuminatum* など好アルカリ性型のもが多く検出された。

従って、本試料は海進の影響があったことが推定される。よってNo27試料は海水～汽水成の堆積物と考えられる。

No28

この試料においても *Coscinodiscus excentricus*, *C. lacustris* などの外洋性で浮遊性の種や、*Cyclotella stylum* などの内湾・沿岸性の種および *Diploneis Smithii*, *Grammatophora macilenta*, *Camphylodiscus* sp., *Navicula elegans*, *N. marina*, *Caloneis permagna* など海水～汽水棲種が検出された。

淡水棲のものは検出の種類や数が減少し、*Amphora ovalis*, *Rhopalodia gibberula* などが主に検出された。

従って、No28試料は多分に海水の影響を受けたことが考えられる。よって、この試料は海水成の堆積物と考えられる。

No29

やはり海水棲種である *Coscinodiscus lineatus*, *C. excentricus*, *C. lacustris*, *C. sp.* など外洋性で浮遊性の種や、*Cyclotella stylum* など内湾・沿岸性の種および *Diploneis Smithii*, *Grammatophora macilenta*, *Navicula elegans*, *Nitzschia cocconeiformis*, *N. granulata*, *N. punctata*, *Terpsionia americana*, *Camphylodiscus* sp., *Caloneis permagna* などの海水または汽水棲種が良好に検出された。

淡水棲のものでは、*Pinnularia hemiptera*, *Rhopalodia gibberula* などが検出された。

従って、No29は内湾成の海水成堆積物と考えられる。

No30

この試料は汽水棲種の *Navicula peregrina* が非常に多く、全体の約5割を占めて検出されることが特長である。このほか、*Diploneis ovalis*, *Navicula elegans* などの海水棲種が検出された。また淡水棲の種類がNo28、No29に比べて豊富であることも特長といえる。特に、*Amphora ovalis*, *Fragilaria Harrissonii*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula radiosa*, *N. exigua*,

Pinnularia microstauron, *Rhopalodia gibberula*, *Stephanodiscus astraea* が多く検出された。

従って、No.30は海水と淡水が混入するような汽水の環境であったことが推定される。よって、No.30は汽水成の堆積物であろう。

以上、述べてきたことを簡単にまとめると以下ようになる。

S T A 63+00

No.21.....	アルカリ性	湖沼堆積物
No.22.....	◇	◇
No.23.....	◇	◇
No.24.....	酸性	◇
No.25.....	◇	◇
No.26.....	◇	◇
No.27.....	海水～汽水成堆積物	
No.28.....	内湾性	海成堆積物
No.29.....	◇	◇
No.30.....		汽水成堆積物

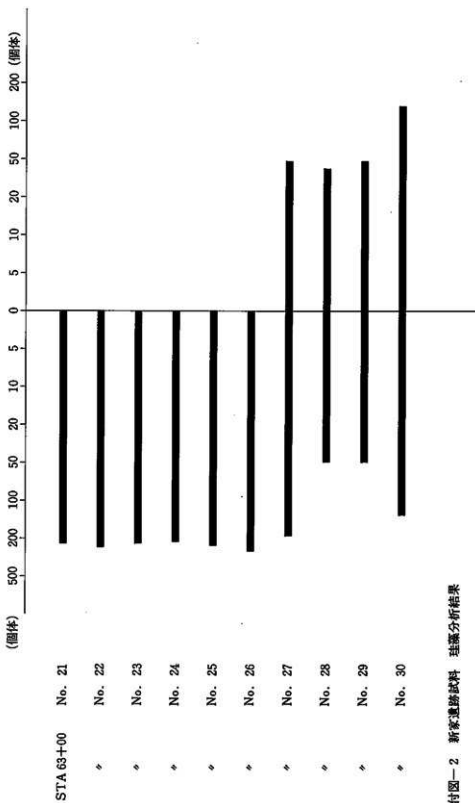
参 考 文 献

- 安 田 喜 憲 1977 大阪府河内平野における弥生時代の地形変化と人類の居住
地理科学 No.27. P 1～14
- 安 田 喜 憲 1978 大阪府河内平野における過去一万三千年間の植生変遷と古地理
第四紀研究 Vol.16 No.4. P211～229
- Yoshinori YASUDA 1978 Prehistoric Environment in Japan-Palynological Approach-
Rep. Sci.Rep.Tohoku Univ vol.28. No.2 P118～281
- 野尻湖地質グループ 1980 野尻湖層の堆積物群集
地質学論集 No.19. P75～100

ECOLOGY	DIATOMS	Sample No.	N#21	N#22	N#23	N#24	N#25	N#26	N#27	N#28	N#29	N#30
F	Achaetika lanceolata		7	20	14	14	1					
F	A. inflata		1			3	2	1		1		1
F	A. exigua		1									
F	A. e. var. heterovalvata				1							
F	A. Ostrupii		1									
F	A. peragalli		1									
F	A. haeckiana		1									1
F	A. brevipes var. intermedia		1									
F	A. lacunarum		1									
F	A. trimidis		5	1		1						2
(B)F	Ampylus ovalis		2	5	3	3	6	5	12	9	2	14
	Anomoeoneis sphaerophora											4
BF	Bacillaria paradoxa				3	2		1				
BF	Caloneis permagna									5	4	
F	Caloneis silicula		3		1							1
F	C. Schroderi								1			
F	C. bacillum					1					11	14
M	Camphylodiscus sp.											
F	Concosira pilosulenta		5	7	10	6						
(B)F	C. P. var. euglypta		6	9	9	7	1					1
F	Conradiella brevis		1									
M	C. acutiracis											
M	C. bicincta											
(M)BF	C. locustis											
F	Cyclotella pumata			1							3	1
F	C. striata			1							2	2
BF	C. stylorum										3	4
BF	Cymatopleura solea				1	1	2	1				3
F	C. Cymbella aspera		2	2								
F	C. naviculiformis		3	3								
F	C. turridula		15	7	8	4	8	6				1
(B)F	C. tunida		9	33	27	4	1	1				
F	C. cyathiformis		2	2	3							
F	C. prostrata			1								
F	C. sinuata		6	1								
F	C. ventricosa		2	9	5	5						2
F	C. gracilis		3	1								
F	C. sumatrensis		2									
F	C. affinis		1									
F	C. cupidata			1								
M	Denticula kantschatica											
MBF	Diplooneis ovalis			5	1	1	14	23	30	1		14
D	D. elliptica											
M	D. Sneathii									1	1	1
D	D. sp.											
BF	Epibhemia turrida		2	2	1	5	4	16				2
F	E. zebra											
BF	E. soex			1			2					3
F	Emotia monodon		3	1	26	12	12	5				1
	var. minorfo, bidens											
F	E. septentrionalis			1	1							
F	E. prescripta var. bidens		1		3	6	1					
F	E. P. var. inflata											
F	E. gracilis				1	1	1					
F	E. flexuosa					3						
F	E. valida			1								1
F	E. tenella			2	3	4	1	1				
F	E. pectinatis											
F	E. P. var. umbellata						5	7	16	1		1
F	E. P. var. minorfo			5	21	7	9	1				3
F	E. P. var. subrotica					2	1					
F	E. P. var. ventralis					1	8					
F	E. P. var. minorfo, bidens						3					
F	E. P. var. minorfo, bidens			1	1	12	1	15				
F	E. vaeensis											
F	E. kochholensis											
F	E. bidensula											
F	E. parallela					1						
F	E. papilio		1									
F	Fragilaria harrisonii		8									7
F	F. P. pinata		1	7	1	1	2	8	7			2
F	F. constricta		10	10	5	1	6	1	3			
F	F. Gomphoponea acuminatum											
	var. coronata		1	1			2					
F	G. constrictum		1	3								
F	G. G. C. var. capitata		1	3								
F	G. G. bohemicum		8	10	1	2	2	1				
F	G. G. b. var. calcaria											3
F	G. G. angur		1				1					
F	G. G. angustatum		1	1								
F	G. G. a. var. producta				2	3	1					
F	G. G. longiceps			3								
F	G. G. 1. var. subclavata				7	4						
F	G. G. parvulum				2	3						
F	G. G. gracile											
F	G. G. oliveceum		11	11	7	3	2	7				
F	G. G. 0. var. calcaria								1			
F	G. G. laeocolatum		2									
F	G. G. tergostatum			1								
F	G. G. abbreviatum		4									
F	G. Gyrodigma cumistatum		11	8	16	10	2	6				4
F	G. G. distortum		1			1						
F	G. G. d. var. Parkerti											
F	G. G. scalpoides		12			5	7					
F	G. G. Spencerii		2	1								
F	G. G. Kazngii		2						1			
F	G. G. ballicum		2							1		
F	G. G. Wansbircii											1
F	G. G. attenuatum			9	5	4						
M	Grammatophora mucilenta		2	6	1		7	14	5	1	3	
F	Hantzschia amphioxys		2									1
H	H. elongata			1								
F	Melosira undulata											
F	Melosira granulata		1	1	1	1	14	15				2
F	M. italica		2	1	1	1	20	7				
F	M. meridionalis											
FB	Melosira circulare		8	15	7	3	1	8				115
F	M. Navicula perigrina											
F	M. var. rostrata		2	5	10	7	1	1	23			9
F	M. rotosa		2	0	5	3	4	3				7
F	M. onigra											
F	M. papilio		1									1

(淡水棲固体数)

(海水—汽水棲固体数)



付圖一2 新家灣踏試料 硅藻分析結果